し、中隊主力の渡河掩護を完ふし、續いて敵の迫擊に移るや陣頭に立ち前進す、午後八時頃に至り、敵は全く拉林畔に包圍せらる、然るに敵は二百米の近距離より死物狂の抵抗を爲し彈丸雨霰の如し、我軍は日沒を待ちヂリ〳〵と包圍し午後十一時一齊に突近を敢行す、太田は分隊の先頭に立ちて猛然突入し敵匪二名を刺殺し、更に三人目を刺さんとするや、戰運拙なく匪彈の爲め腹部に貫通銃創を受け「天皇陛下萬歳」を叫びつゝ壯烈なる戰死を遂げたり、本戰鬪に於ける太田の勇猛果敢なる行動は友軍の士氣を鼓舞振作し、戰捷の素因が作爲したるものにして、其功績拔群なりと謂ふべし、即日少兵伍長に進めらる。

功に依り金鵄勳章功七級並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

太田性溫厚篤實父母に仕へて孝養怠らず又兄弟に友情厚く、交友に情誼を盡し、鄉黨皆之を敬慕し、其戰沒を聞き之を悼まざるもなし。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級

松尾靜樹

松尾靜樹は長野縣下伊那郡大鹿村大字鹿鹽の出身にして、大正三年五月生、父を富治一母をシヤウと云ひ、昭和三年三月鹿鹽尋常高等小學校、卒業同年四月靑年訓練に入り九年三月五日修了同年十二月九日現役兵として獨立守備歩兵第二十四大隊第二中隊に入營し、遼陽に駐屯し猛烈なる教育訓練を受け翌十年二月八日第一期檢閲を了へ、爾後繁激なる警備諸勤務に日夜奮鬪努力せり、三月二十日匪賊の出沒未だ頻繁なる林口に移駐し、至嚴なる警戒裡に、日夜警備勤に又示威行軍等に邁進中、六月十八日より二十七日に亘り、當時勃利縣小五站及大靑山附に蟠居せる謝文東、小白龍江勝海樂子等の合流匪を攻擊するや、士氣旺盛積極的行動に依り、之を擊退し、又七月三日蘭嶺東南方附近に匪賊約七十を擊滅し、續いて大楊木南方八百高地西方八粁の高地密林地帶に匪首明山の率ゆる約百五十の匪賊を攻擊するや、敵は巧みに我鋒鋭を避け南方に退却せしを以て直に急追し、午後二時頃白草溝七九二高地附近に之を捕捉し、多大の損害を與へ潰走せしめたり、又八月八日大楊木南方八百高地附近に匪首徐司令東山好、九彪岐山等の合流匪集結しあるを知し、同日午後十時出動翌朝拂曉を期して包圍攻擊を敢行するや、松尾は輕機第二分隊に屬し、極めて勇敢機敏に行動し適切なる射擊を以て、敵に多大の損害を與へ四散せしめたり、十月九日より十二月六日に亘り秋季討伐實施せらるるや、當時依蘭縣興隆鎭及勃利官大四站附近には趙尙士李華等の合流匪所在に跋扈し、住民恟々たるものあり、討伐隊出動に當り松尾は輕機關第三分隊に屬し、克く困苦缺乏に堪へ各地に勇戰奮鬪し、討伐の任務遂行上寄與する處頗る大なるものあり、翌十一年二月二十一日より四月二十日に亘り、初年兵教育並勤務要員として哈爾賓に派遣せられ、精勵以て克く其任務を完ふし、續いて佳木斯附近の警備に任ずるや、湯原分遣隊に於て警備中、六月二十二日大平川分遣隊より疾病患者を佳木斯に護送する爲め、電話に三兵員の要求ありたるに依り、湯原警備隊より、松尾を長とし十名自動車にて應援せり、大平川分遣隊に於ては八名の警乘を增し、總員十八名を以て午前九時大平川分遣隊

を出發す、途中午前十時頃復隊屯に差懸りたる際該部落より射擊を受けたるを以て、直に下車し之の敵を攻擊せんとせしに、敵は漸次兵力を增し約二百に達し、且つ該部落支那式家屋を占領しありて頑强に抵抗す、玆に於て我軍益々士氣を皷舞激勵し猛射以て敵に多大の損害を與へしも、敵は衆を恃み益々頑强に抵抗す、午前十一時に至るや我軍の彈藥漸く盡きんとせしを以て、湯原大平川兩分遣隊に之の狀況を報告せんとせしに、自動車は敵彈の爲め故障を生じ、已むなく徒步傳令を以て報告せしめたり、然るに最早彈丸盡き肉彈に依るの外なしと悲壯なる決心の下に自個の銃劍に信賴し、松尾隊長を中心として、群がる敵中に突進中各身に數彈を受け、玆に壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり、隊長が中心として全員斃れて後已みたるは皇國軍人の精神の發露にして武人の龜鑑として、永く戰史に燦然たるものあるべし、卽日步兵伍長に進めらる。

功に依り金鵄勳章功七級並勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍騎兵幹部候補生勳八等功七級　吉田正規

吉田正規は福島縣田村郡瀧根村大字廣瀨字蛇內の出身にして、騎兵第二十三聯隊第三中隊入營中、昭和十年九月廿一日滿洲遣編成下令、同二十八日一路佳木斯に向け屯營出發同十月八日到着す。其間克く編成並輸送業務に精勵し勤勞大なるものあり、十一月廿八日甲種幹部候補生に任ぜらる、同日皇五爺嶺附近の匪賊討伐り參加するや、八代中隊の尖兵たる內田小隊に屬し、中隊の先頭車輛に搭乘して前進し午前七時前皇五爺嶺に到着せしに、前方部落より匪賊三、四十名乘馬にて、東北方に退却中なるを目擊し、中隊長は尖長に依然乘車前進を命ず、尖兵長は直に逃走敵匪に急迫せしに、北方山地に依りて我を猛射する敵匪線はれ、其火力頗る熾烈なるを以て、尖兵長は皇五爺嶺北端部落に部下小隊を下車散開せしめ、徒步にて該高地に向ひ攻擊前進せしむ、吉田候補生は當時分隊長七森軍曹が他方面の敵匪に對し追擊の命を受け不在なるを承知し、自ら分隊長たるべきを宣す、此處に於て小隊の士氣益々振ひ、攻擊動作をして愈々勇敢ならしめたり、爾後頑强なる敵の猛火も屈せず、部下の先頭に立ちて、士氣の作興に勉め、沈着剛膽自ら範を示し、高地に據れる約百の敵匪に對し多大の損害を與へ、且小隊長を輔佐し其指揮を容易ならしめしが、偶々右側前方岩山高地より飛來せる匪彈に胸部に命中し、惜くも玆に名譽の戰死を遂げたり、其行動たるや實に軍人精神の發露として永く戰史に輝くべし。

功に依り功七級金鵄勳章並勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍步兵幹部候補生勳八等　宇山旭

宇山旭は東京市神田區佐久間町四ノ二二の出身にして、昭和九年一月二十日滿洲派遣第七師團編成下令せらるゝや、同月二十三日第十一中隊に編入せられ、直に繁激なる編成業務に熱心從事し、日夜精勵し諸般の業務を正確圓滑ならしめ、同二月四日留萌港出航勇躍征途に就けり、其間列車中の警戒出航佐船內の警戒等常に、敏活なる行動は其任務を完がらしめたり。同二月十一日錦洲到着直に附近警備に從事す、同二十五日步兵科幹部候補生を命ぜられ同日步兵一等兵に進級す。

錦洲附近警備隊として常に繁劇なる警戒勤務に服するや常に率先勞苦を意とすず、日夜熱心不撓其任務の達成に奮進せり。同二十五日義縣に於て、鐵道輸送の警戒勤務に任じ、師團主力部隊の輸送を遺漏なからしめたる其の功績優秀なるも

のあり、斯くして宇山旭の勤務成績は極めて、顯著なるものとして常に他の模範たりしが、不幸にして同三月廿六日急性粟粒性結核の病魔に犯され錦洲衛戍病院に病藥の餘儀なき身となり、同二十九日遂に沒す、前途の武勳を胸に祕しつゝ人事を盡して天命を待ちしと云ふべく惜むべき極なり。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵幹部候補生(伍長)勳八等功七級　梅原啓市

梅原啓市は、京都市下京區雁金町の出身にして、父を喜太郎、母をツルと云ひ、大正二年十二月二十六日生なり。大正十五年三月智尋常小學校を卒業し、次で京都市立第一商業學校に入校、昭和六年三月同校卒業、昭和九年十二月一日歩兵第九聯隊留守隊に入營し、同月八日滿洲派遣の爲宇品港を出帆、同月十四日北安鎭に到着、同地の警備に任じ、酷寒を冒して熱心精勵し、翌十年三月幹部候補生を命せられ、日夜繁激なる勤務に服しつつ所要の訓練を重ね、同年六月十日歩兵上等兵の階級に進めらる。

同九年九月十一日以降は德都鎭の警備に任じ、各地の掃蕩を行ふと共に匪賊に通ぜんとする者の搜索檢擧等に從事し、日夜活動を續けて功績尠からず。同年十月下旬克山縣公署通報に依り、平日軍匪は其の根據地臥虎山附近に在ることを知り、部隊長は先づ該匪の現況を確めんが爲、二十四日西澤曹長以下十一名を搜索隊として北山屯臥虎山附近に派遣するや、啓市も亦之に加はり、斥候となりて挺進敵に接近して其の情況を偵知し、搜索隊の任務達成に貢献せる所甚大なり。以上の功績も亦優秀と認めらる。

然して西澤搜索隊は同月二十七日帽兒山附近炭燒小屋に潛伏中の平康隨匪約三十を奇襲す。敵匪は我部隊の不意なる猛射を受け隊を亂して北方及び東方に敗走す、此時搜索隊の左翼に在りし梅原候補生は、この情況を目擊し、渡邊一等兵を指揮して獨斷敵の退路を遮斷すべく急進し、退却し來る敵匪を迎へて之に猛射を加へたり。此時敵の一部は必死の抵抗を爲して我を亂射せり、候補生益々士氣を振ひて渡邊一等兵を激勵し、勇猛に動作して敵に肉薄す、敵匪狼狽多くの死屍を遺棄して北方に敗走せり。然るに此際啓市敵彈を受けて遂に名譽の戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日甲種幹部候補生を命じ伍長の楷級に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

啓市性質溫順にして氣概に富み、親に任へて至孝、出征後も常に書簡を寄せて父母を慰藉したり。又在營間特に軍務に精勵して其の成績優良、大いに將來を嘱望せられたるが、幹部候補生としては修業中ばにして遂に兇彈のため殪れたるは、洵に惜しむべし。啓市の父は騎兵にして日露戰爭の出征勇士、長兄喜一郎も亦旅順歩兵隊に在りて活躍せる歴戰者なり。父子三名國事に身を捧げて奮鬪し、殊に今此の勇士を出したるは、實に一家一門の名譽と謂ふべし。盛なる哉。遺族一同の健在多幸を禱る。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　村田宗利

村田宗利は、長崎縣壹岐郡箱崎村瀬戸浦の人にして、昭和九年十二月一日現役志願兵として、獨立守備歩兵第七大隊第一中隊に入隊し、初年兵教育を受けつゝ繁劇なる各種勤務に服し、中隊の警備任務遂行に貢献せる所甚大なり。然して翌十年三月第一期教育終了の後は、或は衞兵として微宵要所の守備監視に任じ、又は巡察に從ひて日夜危險地に出入巡邏し、又時々國際列車の警乘兵として服務し、常に勇敢機敏に行動し、又注意周到にして其の任務を完全に遂行せり。以上の功績優秀なるものと認めらる。

昭和十年五月二日午前二時三十分第二〇二列車東京圖線哈爾巴嶺驛の西方約三粁の地點に於て突如脫線轉覆し、同時に約二百の匪賊より襲撃せられたり。此の時宗利は小銃手として同列車の警乘勤務に服しあり、警乘長五十嵐上等兵指揮の下に直に應戰し、一方車内を消燈し且つ入口に錠を施さしめ、勇敢に交戰せり。この機宜に適したる處置と沈着にして有効なる射撃は、大いに敵を制して匪賊の列車に殺到することを防止したるが、匪賊は其數の優勢を恃みて漸次に列車に近接したり。依つて警乘兵は敢然下車して攻勢を取りしも、彈藥を射耗し盡したり、此に於て分隊長は肉彈を以て突撃するに決し、銃劍を振ひ、奮迅の勢を以て群がる敵中に突入し、猛烈なる搭圖の後各員各々數敵を殪したるも衆寡遂に敵し難く、宗利敵彈のため頭部に貫通銃創を被りて壯烈なる戰死を遂げたり。斯く全員枕を並べて全滅の悲運に終りたるも、全員一致任務の爲め笑つて死地に就きたる動作は、實に我國固有武士道の精華にして千古不朽以て軍人の龜鑑とし、世道人心に偉大なる影響を及ぼすべきは勿論なりと雖も、尙ほ此の勇猛なる動作に依り列車乘客の生命を安全ならしめ被害を小限度に止むることを得たり、宗利の功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

宗利性質温順にして剛毅なり。殊に責任觀念旺盛にして、入營以來特に軍務に精勵し、諸般の成績優良、上下皆其の戰歿を惜み、深く之を哀悼せり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　山口正之

山口正之は京都府相樂郡山田莊村大字山田小字樋ノ口の人にして、昭和八年十二月現役兵として獨立守備歩兵第十七大隊第一中隊に入營し、奉天に到着して滿洲事變の勤務に從事し、次で八面城に移駐して同地附近の警備に任じ、九年四月以降は鄭家屯より四平街に至る間の平齊沿線を守備し、且つ昌圖梨樹兩縣下の掃蕩又は列車警乘、線路巡察分遣隊勤務等に服したりしが、同年九月下旬傳家屯東方地區及び泉溝南方地區に蟠踞せる匪賊討伐の爲出動し、別働隊たる栗林小隊に屬し九月二十五日新發堡に於て匪賊の一隊を攻撃するに方り、正之勇敢に動作して敵を猛撃し、終に敵陣に向て突撃を敢行し、敵に多大の損害を與へたり。以上の功績優秀と認めらる。爾後平齊沿線の警備を擔任して翌十年二月に至る。

同十年二月獨立混成第十一旅團編成下令に依り、同旅團獨立歩兵第十二聯隊要員として八面城を發し奉天に到着、同聯隊第六中隊に編入せられて二月二十日以降建昌營附近の警備に任じ、同年四月三十日に及びたり。然して五月一日以後は凌南縣及び其の隣接地方討伐の爲、建昌營出發、長途の行軍中繁劇なる勤務に從事したる後、忠正公平等の合流匪を討伐し、徹底的打撃を與へて之を潰走せしめたり。五月十八日建昌營に歸還し再び同地の警備に任じて同月末日に至りしが、六月一日より再び長途の行軍を爲して朝陽縣南部地區の討伐を爲し、六月十日化支に於ける交渉促進のため聯隊主力古北

口に集結するや、中隊も亦急遽出動す、正之第二小隊第四分隊に屬して之に參加し、六月十日錦州出發炎天灼熱を冒して行動し、中隊出動の目的を達成して七月下旬建昌營に歸還せり。爾後同年十月に亘り又建昌營附近の警備に當り恪勤精勵一日の如し。以上の功績も亦優秀と認めらる。

同十年十月三日より同十四日に亘れる朝陽南方地區の討伐に方りては第二小隊長の傳令として之に參加し、三日建昌營を出發し、十四日中隊主力と共に謝字杖子附近の敵を擊破し、同日夕太平溝附近高地の敵を攻擊せる際は小隊長と共に陣頭に立ちて敵中に突入し、同夜太平溝の敵を攻擊するに方りては、正之尖兵小隊に屬して前進中、右側方警戒の爲め派遣したる中上等兵の指揮せる分隊方面に急激なる銃聲起り、其情況を確むるため、小隊長の命令に依り同方向に急行したる正之は、中上等兵と連絡の結果、同分隊は優勢の敵と衝突し、目下苦戰中にあることを知り、之を小隊長に報告せんが爲め歸還の途次、村落端の凹地に敵の密集部隊あるを認め、急ぎ歸還中敵彈のため左大腿部を貫通せられて轉倒せしも、大聲を以て必要件を傳へ、幸に小隊長に傳達せられて中隊は遂に敵を擊破するを得たり。正之功績拔群と認められ、十五日在朝陽赤峯衛戍病院に入院加療せしも十八日歩兵上等兵に進められ同日戰傷死せり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

正之性質溫順にして氣慨に富み、入營後特に軍務に精勵して成績優良なりき。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　加藤久八

加藤久八は靜岡縣榛原郡川崎町靜波の出身にして、春吉の二男として生れ、母をしげと云ひ、川崎尋常小學校を卒へ、

豐橋市鈴木製絲工場に入り、製絲職工として熱心業務に精勵する事六ヶ年に及び、昭和九年十二月一日現役兵として歩兵第十八聯隊第七中隊に入營す、同十一日滿洲派遣の爲め屯營出發、同三十日駐屯地富錦に到着し、爾後同地附近の警備に任じつゝ連日の教育訓練に一意專心努力し、成績良好なり、昭和十年三月十三日より約一ヶ月に亘る北境地區春季大討伐に際し、高木部隊は饒河西部山地の李學萬匪及西風溝附近の北海匪各約六十の團匪掃蕩に從事し克く其目的を達成せり、

當時加藤二等兵は輕機彈藥手として之に屬し、積雪車輛を沒する峻嶮なる山岳地帶に或は泥濘膝を沒する濕地帶に、あらゆる苦難を意とせず、常に率先勇敢に奮鬪し本討伐に貢献する處多大なるものあり。

春季討伐後一時勢を失墜せし匪團も樹木の繁茂期に入るや其勢力を挽回し、饒河縣內各地に出沒し良民を拉致し、或は物資の掠奪等、跳梁激しく而して其居所一定せず、富錦守備隊は六月三日より二十四日に亘り之が徹底的掃蕩を實施し潰滅せしめたり、加藤二等兵は前期同樣輕機彈藥手として參加し、克く分隊長を輔佐し行軍、警戒、宿營、部落掃蕩等不眠不休熱心精勵し克く任務を完ふせり、續いて六月二十五日より八月十八日に亘る饒河地區夏季討伐を終へ、九月十九日より十月二十六日に亘る北境地區秋季討伐に際し、饒河支隊長は李學匪約三百膠林子に宿營中なる確報に依り、九月二十六日早朝行動を起し、警察隊をして四排より西通を經て、滿軍をして哈嘆河子方面

より北山を經て各腰林子に向はしめ、支隊は四排より二隻の發動艇にて烏蘇里を下航し、午後一時新屯に上陸し小久保小隊を南方獨立家屋に位置せしめ、敵情を偵察せしに偶々西方約六、七粁の濕地帯を腰林子方面より北山南端高地に向ひ、徒歩前進中の約二、三百の部隊を發見し、日章旗を打振るも應答なきに依り、匪團と判定し直に前進攻撃に決す、此より先歩兵一等兵に進みし加藤は鈴木小隊第五輕機彈藥手として參加す、新屯附近一帯は泥濘膝を沒する大濕地帯にして、前進極めて困難なるを克く萬難を排し、午後三時敵前六、七百米の地點に達するや、第五輕機分隊は小隊の左端第一線に攻撃前進す、敵は高地の陣地に據り我攻撃前進に對し俄然一齊に猛烈なる反撃を開始せり、加藤一等兵は此の彈丸雨飛の中を迅速機敏に行動し、敵情變化に細心の注意を拂ひ、細大なく分隊長に報告し、且彈藥の遞送迅速確實にして輕機をして其特性を充分發揮せしめたり、戰鬪益々猛烈となるに連れ一等兵の活躍目覺しく、偶々敵匪は巧みに北方高地に移動し、我を包圍の體形にあるを知り、之を速報せしに、小隊長は直に防策攻撃を命じ、敵の行動を阻止するを得たり、然して我前進部隊の攻撃益々猛烈となり、敵の抵抗頑强にして屈する色なく、此時加藤の屬する第一彈藥手中村一等兵斃るや、加藤直に交代し有効適確なる射撃は小銃分隊の前進を容易ならしめたり、加藤一等兵は尙も敵彈下を勇敢に前進し敵前四百米附近に前進中敵の集中火を受け腰部に貫通銃創を受けたるも、剛毅なる一等兵は尙も屈せず前進せんとせしも、起つ能はず「萬歳」を呼びつゝ殪る、是を見たる分隊長は駈寄り「加藤シッカリセヨ」と呼び起したりしが、僅に眼を開き「自分ノ事ハカマワズ前進シテ下サイ」の聲も微に悲壯なる戰死を遂げたり、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り功七級金鵄勳章勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

久八性温順にして寡言實行の人たり。家裕ならざるに依り幼時より兩親を援け、兄に從ひ弟妹を愛し、孝悌の美德を有し前途有爲の青年なりしが、眞に痛惜の至りなり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級

三輪初長

三輪初長は靜岡縣周知郡水窪町地頭の出身にして、大正四年十一月十一日生、父を萬次郎、母をなみと云ひ、大正十一年四月水窪尋常高等小學校に入り、昭和三年三月卒業す、同七年四月水窪青年訓練所に入り、同十年三月修了、常に家庭にありて父亡き後の家政中堅となりて家事に精勵し、鄕黨の信賴厚く模範青年として敬愛せられたり、昭和十一年一月十日現役兵として歩兵第四十六聯隊に入隊し、四月一日編成下令、同日第一機關銃中隊に編入され、同八日屯營出發勇躍征途に就き、同二十四日三江省通河に到着し、同日より五月十二日に亘り該駐屯地附近の警備に任ず、當時附近一帯匪賊の出沒頻繁にして、部落襲撃の風說盛なる狀況下に於て、至嚴なる警戒裡に所有困苦に耐へ、日夜繁激なる諸勤務に奮闘努力し、以て其任務を遂行せり、五月十三四の兩日に亘り、永發屯及長發屯の兩戰鬪に際しては、第四小隊第七分隊第五彈藥手として之に參加す、五月十三日午後五時永發屯に於て趙尙志匪約二百と遭遇し、直に之を攻撃し陣地占領を命ぜらるゝや、迅速機敏に攻撃前進し、敵彈雨飛の中を冒し、彈藥補供を圓滑にし、機關銃をして全機能を發揮せしめ、以て敵を潰走せしめたり、續いて翌十四日三姑に向ひ前進中、長

發屯に於て再び趙尚志匪約二百と遭遇し、直に之を攻撃すべく左小隊の戰闘に協力し、陣地占領を命ぜらるゝや、分隊長の號令に應じ極めて勇敢機敏に陣地を占領し、迅速に彈藥を補充し、且つ獨斷敵情を監視し遂次之を報告し、分隊長の射撃指揮に貢献する處あり、戰闘の進捗に伴ひ、長發屯北側豪上に進出するに及んでは、勇敢機敏に率先敵彈雨下を冒し、彈藥補充に努力せしのみならず、缺兵の爲め機關銃の搬送頗々困難なるに協力援助し、以て機を逸せず射撃し得せしめたり、敵は優勢を恃み、且つ堅固なる圍壁に占據し、頑强に抵抗し敵彈益々熾烈なり、此時我軍寡兵にして何等寄るべき地物なく、稍々苦戰に陥入れり、偶々我陣地風上に面したるを以て、部落に放火せしに直に村落は大半燒失し、黑煙濛々として我視界を遮り、通視困難なりしが、右小隊は此機に乘じ攻撃前迫す、此の時敵の大部は圍壁を越へて或は乘馬を以て西方に逃走せしに依り、直に陣地を變換し、機を逸せず彈藥補充に奮闘し、機關銃をして其特性を發揮せしめたり、然るに敵の一部は圍壁内にありて尙頑强に抵抗し、我機關銃に對し猛射を集中す、偶々一番銃手負傷するや獨斷身を挺して進出之に交代す、其勇敢なる動作は實に賞すべきものあり、愈々益々士氣旺盛に猛射を繼續し、彈藥盡き第六彈藥手より彈藥を受領し、之を補充すべく移動の際、不幸敵彈飛來左胸部を貫通し、遂に玆に壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり、本戰闘間敵彈雨注の中沈着剛膽に旺盛なる攻撃精神と勇敢なる動作に依り、身を挺して任務を完ふし、戰捷の素因を爲せし其功績たるや偉大なりと謂ふべし、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り金鵄勳章功七級並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

初長性質溫厚實直寡言實行の青年にして、通學時代は二里半餘の山道を四ケ年間缺席なく通學し、又青年學校に入るや選ばれて生徒長となり、常に鄕黨青年の指導者として貢献する處多かりき、偶々戰場の華と散りしは眞に惜むべきも、其偉功は永く戰史に燦たるものあるべし初長以て瞑すべきなり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　野中泰二

野中泰二は、埼玉縣北埼玉郡大越村大字大越の人にして、昭和九年十二月現役兵として獨立歩兵第十三大隊第三中隊に入營し、綏化に位置して同地附近の警備に任じつつ、初年兵としての教育を受け、教育の進歩に從ひて漸次二年次兵と伍して各種の重要なる勤務に服し、或は衛兵として徹宵要所の警戒監視に任じ、又は斥候に加はりて危險地に出入匪徒の情況を偵察し、又鐵道線の要所附屬衛工物の掩護等に任じ、終始熱心精勵にして其の功績顯著なるものと認められたり。

同十年三月三十日三十一日は張維屯附近の匪賊を攻撃するや、敵は村落の圍壁を利用して頑强に抵抗せしが、勇敢に動作して遂に之を撃退し、同年七月六日六道崗附近に於て堅固に陣地を占領せる敵を攻撃するに方り、泰二は乘馬小隊輕機關銃分隊射手として之に參加す。敵匪は陣地の一部として村端の圍壁を利用しあり。泰二の分隊は前記圍壁の一角たる西南角望樓の敵を射撃し、之を制壓すべく命令せられたり。此に於て分隊は西南方に少しく迂回運動を取りて、指示せられたる望樓の前方約七十米に進出し、正確有効に同望樓に向て猛射を加へ、暫時にして之を沈默せしめ、次で同望樓の北方に隣接せる敵を射撃し、以て竹内分隊の攻撃に協力せしが、此の際輕機關銃の位置せる地形は、全く開濶にして些の遮蔽物もなく、敵彈に對して暴露し、危險甚しかりしが、戰況上已むを得ず此の位置より敵を猛射し奮戰中なりしが、偶々敵の一彈は泰二の腹部を貫通し、遂に名譽の戰死を遂げたり。然れ共泰二の勇猛なる動作は大いに友軍の士氣を皷舞し、又所命望樓の攻撃制壓は、小隊の攻撃進捗を容易ならしめ、小隊は當面の敵を撃破することを得たり。泰二功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

泰二性質溫順にして氣慨に富み、責任觀念旺盛なり。入營以來特に軍務に精勵し、諸規定の履行嚴格、克く服從の道を嚴守し、同僚間の交際圓滑にして上下の信用淺からず、隊員皆擧つて其の戰歿を惜み、痛く之を哀悼せり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　西澤啓

西澤啓は、埼玉縣比企郡明覺村大字桃木の人にして、昭和九年十二月二日獨立守備歩兵第七大隊第一中隊に入隊し、同日より圖們に位置して同地附近の警備に服しつつ、初年兵第一期教育を受け、酷寒を冒して演習教練に從事しつつ衞兵巡察等の諸勤務に服し、恪勤精勵し、翌十年三月第一期教育終了後は、依然圖們に位置して京圖線の守備を擔任し、日夜至嚴なる警戒勤務に服し、又時々列車に警乘し、終始精勤にして中隊の警備任務達成に貢献せる所多大なり。以上の功績優秀なるものと認めらる。

同十年五月二日午前二時三十分第二〇二列車は京圖線哈爾巴嶺驛の西方約三粁の地點に於て突如脱線し、轉覆すると同時に約二百名の匪賊より襲撃せられたり。此の時啓は小銃手として同列車の警乘勤務に服しあり。警乘長五十嵐上等兵の指揮を受けて、列車客室を消燈せしめ、且つ入口に錠を施さしむる等、機宜の處置を取り、警乘兵全員と共に勇戰奮鬪、然も沈着正確なる射撃を以て敵を制壓し、列車に殺倒することを防止せるか、其數に於て著しく優勢なる匪賊は、各方面より漸次列車に近接したり。此に於て警乘長以下敢然下車して攻撃を取り、奮迅の勢を以て猛鬪せしも、悉く彈藥を射耗し、遂に長以下肉彈となり銃劍を揮ひて群がる敵中に突入し、格鬪して各々數敵を殪したるも、衆寡遂に敵し難く、啓敵彈の爲頭を貫通せられ、全員と共に壯烈極まれる戰死を遂げたり。この勇猛なる犧牲的奮鬪に依り、多數乘客の生命を安全にし、其の被害を最小限度に止むるを得たり。啓功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

啓性質溫順にして機敏、責任觀念旺盛なり。入營以來特に軍務に精勵して其成績優良、上下の信用厚かりき。殊に啓最後に於ける勳作は寡少の兵員と共に數十倍の敵匪と交戰し、所謂刀折れ矢盡くるまで奮鬪し、其長を中心として全員其の任務の爲笑つて陣沒せり。其の忠烈や以て鬼神を泣かしむべく、實に帝國軍人の典型的戰死として、其の芳名は永く千古に輝くべし。啓亦死所を得男兒の本懷たらずんばあらず。筆者は特に其冥福と共に遺族一同の健在多幸を禱りつつ玆に筆を擱く。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　福田萬作

福田萬作は、奈良縣吉野郡國樔村新子の人にして、昭和九年一月歩兵第三十八聯隊留守隊に入營し、同年四月滿洲派遣の爲め同月十七日屯營を出發し、同月二十三日鴨綠江を通過して二十五日齊々哈爾に到着し、第三機關銃中隊に編入せられ、同中隊と共に齊々哈爾南兵營に駐屯して、同地附近の警備に任じ衞兵巡察其他重要なる勤務に服し、終始一貫熱心着實にして遺憾なく與へられたる任務を達成し其の功績優秀なるものと認められたり。

同九年十月四日以降、第三師團の秋季討伐に方りては第二小隊第三分隊一番銃手として吉林省濱地區の討伐を擔任し、四旬餘日に亘りて連日連夜殆んど不眠不休を以て行動し、率先勞を厭はず、常に至嚴なる警戒を行ひて功績尠からず。同年十一月十八日齊々哈爾に歸還して再び同地の警備に服し、翌十年五月中旬より第二次春季討伐として聯隊主力の出動す

るや、第二小隊第三分隊二番銃手として之に參加し、四十餘日に亘る長日時に亘り京圖線附近及び拉濱東方地區の匪賊討伐に從事し、此の間大密林大濕地を踏破し、幾多の困苦缺乏に堪へつつ同地方の治安工作並に肅正に貢獻する所多大なり。以上の功績も亦優秀と認めらる。

同十年九月一日以降は第二獨立守備隊の秋季討伐に方りては舒蘭縣東曾家船口に分駐し、同月二十五日伊藤小隊の一員として第十中隊に配屬せられ、午後七時より東三道溝に蟠踞せる約四十の匪賊を夜襲し、最後に機關銃を以て敵を猛射して大なる損害を與へ、兵器彈藥若干を鹵獲せり。越へて同月二十九日拂曉大干屯西北方地區より南下中の匪賊團を攻擊するため、伊藤小隊長の指揮を以て午前五時四十分出發し、西北臺端にて敵匪の一群を擊破し、之を追擊して下甸子に至り、敗敵の後尾を捕捉して之に大損害を與へ、次で追擊を續行して松花江支流を渡り、松花江の本流に進出したるに、有力なる敵匪は二隻の船を以て同江を渡河中なり、依て之を攻擊したるに敵匪も亦直に應戰し、戰鬪は漸次激烈となり、此時萬作正確なる射擊を以て敵を猛射し、敵に大なる損害を與へたりしが、午前八時十分頃に至り携帶彈藥の全部を射耗し、小隊長は突擊を令し小隊全員小隊長と共に肉彈となりて群がる敵中に突入し、遂に壯烈なる戰死を遂げたり。萬作功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

萬作性質溫順にして剛勇なり。入營以來特に軍務に精勵して其の成績優良、上下の信用厚かりしが、遂に戰場の華と散り、隊内の將兵皆深く之を哀悼せり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　太田岩男

太田岩男は群馬縣前橋市天川原の出身にして、昭和九年十二月一日歩兵第六十八聯隊留守隊に入營、同日第十二中隊に編入せられ、滿洲派遣の爲め、同十二日岐阜出發、同十九日掖河に到着し、爾來翌十年三月十六日に亘り酷寒並危險を冒して教育訓練を受け、克く上官の命に服し、勞を惜まず、常に警戒心旺盛に精勵以て其任務を完ふせり、三月十七日より銃工術修業に服し、克苦精勵克く其業務を了へ、半截河移駐後は銃工兵として專心兵器業務に精勵せり、此間歩兵一等兵に進めらる、爾來十二月十七日に亘り、引續き同地附近の警備に任じ、衛兵巡察斥候等繁激なる要職に服し、克く困苦缺乏に耐へ、以て警備の任を完ふせり、翌十年三月二十五日より四月七日に亘り、春季討伐工事場警備隊にありて、衛兵、展望哨等要務に服し、警戒至嚴の下に奮鬪努力し、以て其職責を完ふせり、越へて十月十日より十一月五日に亘り、密山勃利寶生縣下に於ける秋季討伐に參加す、當時勃利縣大茄子河々谷附近には李司令、占高山、海樂子、洪勝、反亂滿軍等の匪團蠢動しあり、加ふるに出動當初は連日の降雨にて、至る處大濕地となり、泥濘膝を沒し、特に行動地域は濕地密林山谷等、極めて非衛生地帶にして、且幾多の危險に晒らされ、各地に轉戰し、勇戰奮鬪以て治安の確保に邁進し、以て本討伐の目的を遂行せしめたり、中隊は翌十一年一月二十九日金廠沟附近に逃亡せし、百十數名の兵匪討伐の命に基き、一月三十日前川中尉をして部下小隊及第二小隊を併せ指揮せしめ出動せしむ此時一等兵は第一小隊長早坂曹長の傳令として參加す、彼我戰鬪開始さるるや、敵は圍壁に占據し頑强に抵抗し、勳ずる氣配もなく、戰第二次に移り戰酣となり彈雨熾烈なり、上等兵は此間にありて刻々と變化する敵狀を報告して、小隊長を積極的に輔佐しありたるも、偶々小隊長敵彈に斃れ、續いて小隊の死傷續出し、殊に輕機分隊は殆んど敵彈に斃れたるを目擊するや、憤然獨斷火線に增加し、分隊長田

中軍曹の指揮に入る、敵の兵力逐次增加し、田中分隊を包圍する如く迂廻接近せり、玆に於て一等兵は勇猛果敢に敵を攻擊し、機に乘じ猛然として躍進せんとする刹那腹部に貫通銃創を受けたり、然るに自若として小隊の危急と散兵の任務を自覺し、三四十米に近接せる敵を逐次狙擊し三、四名を殪せしも、遂に精魂盡きて玆に名譽の戰死を遂ぐるに至れり、其功績や偉大なりと謂ふべし、即日歩兵上等兵に進めらる。

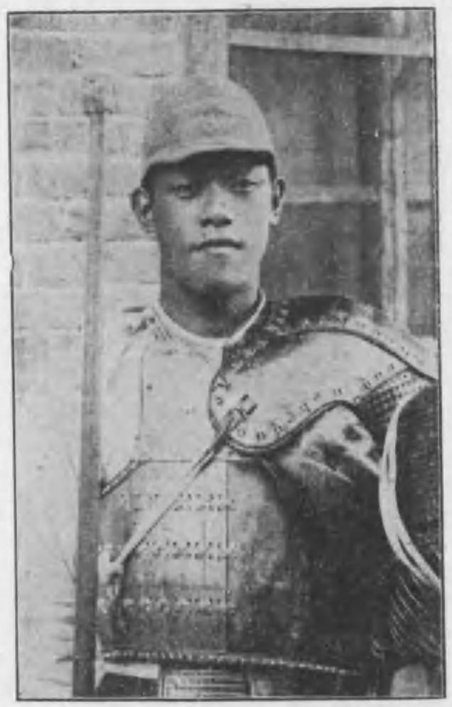
に功依り功七級金鵄勳章勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　久光悌

久光悌は、愛媛縣西宇和郡二木生村大字周木六番耕地の人にして、父を新藏母をオノと云ひ、大正二年六月二十六日生なり。昭和四年三月三瓶町高等科四年を優等成績を以て卒業し、昭和八年十二月獨立守備歩兵第十二大隊第一中隊に入隊、直に滿洲事變に關する業務に從事し、九年四月一日以降拉賓線新站平安間の警備に任じ、德林匪等の近傍各地に出沒頻りなる中に在りて服務す。時恰も高粱繁茂の時期にして匪賊の策動に便なるに際し、日夜至嚴なる警戒を爲し、少數兵員と共に復雜繁多なる勤務に服して精勵し、以上の功績優秀と認めらる。

同九年五月上旬吉林省舒蘭縣北部の討伐に方りては、小銃手として之に參加し、暗夜を衝き泥濘深き惡路を踏破して匪賊の巢窟を掃蕩し、附近一帶の治安維持に貢獻せる所甚大なり。又同年七月十八日沙泡子附近の戰鬪に於ては地形地物を利用して巧に敵匪の宿營しある家屋に近づき、不意に之を猛射して先制の利を占め、次で敵の陣地を攻擊するに方りては敵の猛火を冒して有利なる地點に進出し、有効に敵を猛擊し、以て小隊の攻擊進捗を容易ならしめたり。然して同年九月十月の間は圖寧線石頭寗安溫春間の警備に當り、極めて士氣旺盛にして刻苦精勵せり。以上の功績も亦優秀なるものと認められたり。

同九年十月六日以降秋季討伐に際しては輕機關銃分隊に在りて之に參加し、嶮峻なる山岳地帶並に密林多き地方に於て、連日難路を踏破し、屢々雪中に露營する等宿營給養の粗惡を忍びて行動す。殊に十月九日夜半敵匪拉賓線東部に向ひ退却するを知り、第二小隊と輕機關銃分隊は追擊に任じ、五道滴達に向ひ急進中、南部西南岔西北方に於て匪賊約二百名と衝突せし際は勇敢機敏に動作して敵を射擊し多大の損害を與へて之を擊退したり。爾後再び圖寧線の警備に服して翌十年三月に至り、此間不完全なる滿人家屋に起居して、繁忙なる中隊の編成業務に從事し、編成完結後は寗安市街の警備を擔任し、寡少なる兵員と共に、停車場飛行場其の他主要なる建築物等の守備に當り、又不逞徒輩の檢擧、隱匿兵器の押收等に從事して殆んど休息を得ざる狀態なりしが、同年



三月十九日高麗分隊司令藤田伍長の指揮下に在りて小李溝附近の戰鬪に參加し、敵火を冒して敵の左翼に迂回し、敵の不意に乘じて之を猛射せり。敵は狼狽して其一部は退却したるも、其の兵力甚しく優勢なりしため、有力なる敵は悌に向て逆襲し來り飛彈雨の如し。悌奮戰猛鬪中不幸敵彈のため右腹部を貫通せられて遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群

を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

悌性質温順にして沈勇、隣人の敬愛する所たり。既に父を亡ひ、母は周木の悌が宅に現住す。母よ健在なれ。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　森田貞兼

森田貞兼は、高知縣香美郡植山村大栃の人にして、父を健之助母を寅尾と云ひ、大正四年八月四日生なり。郷里に於て小學校を卒業の後同地實業公民學校に入校、昭和六年三月同校を卒業し、同八年十二月現役志願兵として獨立守備歩兵第十大隊第四中隊に入營し、連山關に到著して直に滿洲事變に關する業務に從事し、翌九年一月下旬以降拔河守備隊の冬季討伐に參加し、一月中山石磨刀石寿安海林等の各地に於ける戰鬪に、二月中海林山石附近の討伐、二月下旬より三月に亘り密占河海浪河河谷の討伐を行ひ、輕機關銃手として嶮峻なる山岳地帶並に大森林地帶に於て、酷寒と困缺に堪へつつ連日の行動を爲し、遂に本討伐の目的を達成したり。以上の功績優秀と認めらる。

同九年五月十一日大通溝附近の戰鬪に際しては小銃手として久保少尉の指揮に屬し、勇戰機敏に動作して敵の翼側に迫り、有効なる射擊を以て敵に大損害を與へ、同年六月二日城子河附近の戰鬪に方りては分隊長の意圖の如く活動し、敵匪を西北方に潰走せしめ、更に之を追擊して殆んど殲滅に歸せしめ、六月十日東北段附近、七月七月柳毛河附近の戰鬪、及び九月十九日大于家溝附近の戰鬪に際しては輕機關銃彈藥手又は小銃手として之に參加し、炎天下に於て山地を越へ沼澤を渡り、行動極めて困難なる地形に於て連日活動し、九月三十は輕機關銃射手として滴道河附近の匪賊を攻擊し、機敏に

動作し、正確なる射擊を以て敵に大損害を加へ、中隊戰捷の効果を大ならしめたり。以上の功績優秀なるものと認めらる。

同九年十二月初旬より翌十年三月下旬に亘りては梨樹鎮附近の守備に任じ、衛兵巡察列車警乘等常に繁劇なる勤務に服して精勵し、十年五月初旬羅圈背附近にて匪賊の一隊を猛擊し敵は死體五を戰場に遺棄して潰走せり。其後寧門附近の守備をなして同年八月中旬に亘り、依然劇務に服して精勵なりしが、同年八月十八日寧門西方約十吉なる船廠窩舖に匪賊約七十集合しありとの報告に接し中隊長大田大尉以下五十三名重輕機關銃歩兵砲各一は討伐の爲め直に出動し十九日午前四時より先づ歩兵砲射擊を以て攻擊を開始せり。敵は堅固なる圍壁に據りて頑强に抵抗せしも、中隊は三面より合擊遂次に敵に肉薄したり。此時貞兼は發烟筒を携へ、敵の猛火を冒して圍壁下に到著し、巧に烟幕を構成し、小隊は此烟幕を利用して遂に圍壁内に突入し、敵を殲滅することを得たれ共、此際不幸敵の一彈は貞兼の左肩胛部に命中し、遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

貞兼性質温順にして剛勇なり。入營以來特に軍務に精勵し共成績優良、上下皆共戰歿を惜みたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　酒井市太郎

酒井市太郎は、神奈川縣川崎市大島の人にして、父を定九郎、母をしまと云ひ、大正二年十二月十一日生なり。家事の都合に依り小學校全科卒業に至らず。家事農業に従事して精勵なりしが、昭和九年十二月五日現役兵として獨立守備歩兵第十三大隊第一中隊に入營、同日より呼蘭に位置して滿洲事變の業務に従事し、初年兵第一期の教育を受けつつ警備勤務に服し、或は衛兵として徹宵要所を守り、又は巡察に従ひて危險地に出入行動し酷寒を冒し缺乏に堪へ、終始一貫刻苦精勵、以上の功績顯著なるものと認められたり。

昭和十年三月初年兵教育第一期終了の後は、従前に引續き呼蘭に位置し、同地附近の警備を繼續し、線路沿線の巡察、又は潜伏斥候等更に一層重要なる任務に服し、又は列車警乘勤務、少數兵員と共に分遣隊勤務等に服し、常に士氣旺盛にして熱心奮勵し、又時々近傍各地に出動して掃蕩に従事すること一再に止まらず。自ら進んで難事に當り、然も決して勞苦を訴ふるが如きことなく、中隊の警備任務達成に貢献せる所甚大なり。以上の功績優秀なるものと認めらる。

同十年七月十一日以降、大隊の慶城縣及綏稜縣一帶の討伐を行ふに方り、佐藤小隊に屬し、最初は慶城縣城に位置して大隊豫備隊たりしが、七月十七日綏稜東方約五里「ブンヂヤートン」附近の戰鬪に際して小銃第一分隊に屬して、火線中央分隊となり、敵の猛火を冒して其第一、第二監視線を突破し、主陣地の前方約四十米に肉薄し、益々敵に猛射を加へたるが、敵も亦分隊の正面に向て猛火を集中し飛彈雨の如し、市太郎勇猛少しも屈せず、益々沈着勇敢に交戰中、敵匪退却の徴候を認め、大聲之を報告す、小隊之を機會として全線突擊に移りたる一刹那、偶々敵の一彈は市太郎の胸部を貫き、遂に名譽の戰死を遂げたり、功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

市太郎性質温厚篤實、其の鄕に在るや孝養の道を盡し、渡滿の爲東京驛を出發するに際し、其妹に向て「自分の代りに親を大切にせよ」と懇諭して出發したりと。市太郎兎彈に斃れたるも其英靈は九段坂上に永久に鎭座し、永く兩親並に妹等の身邊を護らん、遺族の健在多幸を禱る。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　川村長太郎

川村長太郎は三重縣宇治山田市大字中島町の出身にして、昭和九年一月二十日現役兵として歩兵第三十三聯隊第六中隊に入營、軍務精勵中四月十四日滿洲派遣の爲め屯營出發、同二十日泰安に到着、同日より八月三十日に亘り該地附近の警備に任じ、日夜繁激なる諸勤務に服し、常に熱心努力以て其任務を完ふせり、八月三十一日より約一ヶ月に亘り、黑龍江省中部の匪賊討伐に參加し、張家窩棚、靠山屯等各地の戰鬪に勇戰奮鬪し、又連日連夜斥候、歩哨、偵察等常に危險を冒

して、積極的行動に依り討伐達成に貢献する處あり、終つて再び泰安附近の警備に服し、警備任務に精勵せり、十月三日歩兵一等兵に進めらる、爾來引續き警備の重任にありしが、翌十年三月二十八日より四月五日に亘り龍江省北部春季討伐實施せらるるや、三木小隊第一分隊に屬して之に參加し、當時猛威を逞ふせし平康德匪討伐を擔任し、泰安鎭、克山、德都鎭、科絡站、沐訥河等の間を行動し、此間衞兵、斥候警戒員として連日連夜幾多の辛酸をなめ、困苦缺乏に耐へ不撓不屈克く其任務を完ふせり、殊に四月四日苑地營子に於ける大平双江黑虎等の合流匪討伐に於ては、沈着勇敢に力闘奮戰し、以て分隊の任務達成を容易ならしめ、其功績優秀なるものあり、討伐終了後四月二十六日より七月十二日の間齊々哈爾附近の警備に服し、克く其任務を完ふし、七月十三日より十九日に亘り嫩江水上討伐に參加し、炎熱と闘ひ、物資乏しき地方に困難危險を冒し、日夜不眠不休積極的に活動し以て嫩江水上附近の治安確保に貢献せり、七月二十日より九月二十六日に亘り再び齊々哈爾附近の警備に服し、終へて翌九月二十七日より約一ヶ月に亘り、菅野部隊乘馬歩兵として防衞地區秋季討伐に參加し、各地の治安工作に邁進し、克く其目的を達成せしめたり、續いて及川部隊第二次討伐實施に當り十月三十日帽兒子附近の戰闘に際しては、斥候長となり嫩江警察隊員三名を指揮し、匪情偵察に任じたり、午前六時三十分頃前進中の中隊主力は匪賊約三十騎と遭遇し、之が攻撃開始せらるゝや、此時一等兵の乘馬負傷の爲め直に下馬戰闘に參加し、第三分隊の到達するを待ち之に加はり、猛然攻撃を續行し、敵をして高地西端に壓迫す、彼我の戰闘約一時間、午前七時五十分頃、渡邊小隊戰場に到達し南方高地に前進するを見るや、彈丸雨飛の中を巧みに冒して渡邊小隊と連絡せり、之が爲め兩部隊の協同戰闘を極めて有利ならしめ、該匪團を完全に包圍し之に殲滅的打撃を與へたり、然して一等兵は連絡任務を終るや、再び第三分隊の最左翼に加はり、攻撃を續行しありしが午前八時三十分頃、機到來一齊突撃戰に移るや、一等兵率先勇躍突進せんとする刹那戰運拙なく一彈丸左下腿を貫通す、然るに一等兵之に屈せず更に數十米を前進中又一彈其左胸部を貫通し遂に玆に壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり、一等兵の勇敢機敏なる行動は本戰闘の効果に貢献する處實に偉大なるものにして、其功績優秀なりと謂ふべし、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り金鵄勳章功七級並勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　鈴木助男

鈴木助男は群馬縣勢多郡桂萱村大字東片貝の出身にして、昭和九年十二月一日獨立守備歩兵第五大隊第三中隊に入營、同日より事變勤務に從事精勵せり、翌十年一月二十九日より三月六日に至り、冬季討伐實施せらるるや、二等兵は殘留勤務に服し、僅少の人員を以て、歩哨、斥候巡察或は第一線出動部隊への糧秣輸送、又は患者の護送等、不眠不休寢食を忘れて、奮闘努力し以て其任務を遂行し、出動部隊をして後顧の憂なく活動せしめたり、又朝陽鎭に位置し、東邊道守備の任を完ふし、五月十九日より七月一日に亘り憂季討伐實施せらるるや、二等兵は機關銃分隊として之に參加し、出動以來四十餘日に渉り、山地の嶮峻難路を踏破し風塵を冒し酷暑に耐へ討伐或は掃蕩に又歩哨斥候巡察等に不眠不休積極的に行動し、中隊の任務達成に貢献する處大なるものあり、十月廿六日大板石溝嶺附近の戰闘開始に當り、中隊主力は大荒溝より横虎頭に向ひ行動中、匪賊の密偵を逮捕し凱向せしに紅軍匪約四十名は上記場所附近山頂に於て喫食中なるを偵知し、直に之を攻撃し、敵に多大の損害を與へたり。此時二等兵は小銃手として敵彈下に勇敢に行動し、濕地の難路長途の追撃に克く耐へ、以て任務遂行に邁進せり、此間歩兵一等兵に進めらる、續いて秋季討伐開始せらるるや、機關銃手として之に參加し、常に積極的活動を續け、中隊の討伐達成に貢献する處大なるものあり、十二月一日より十八日の間冬季討伐に

活躍し、續いて西長春溝附近の戰鬪に於て、該地附近に蟠居せし紅軍匪約百を奇襲に依り擊滅せしめ以て偉功を奏し、翌十一年一月十日崗山頭道溝附近の戰鬪に於ては、潛伏匪賊を潰滅し、再起不可能ならしめ以て附近一帶の治安確保に貢献せり、東瀕軍曹は本季討伐中大泉附近の治安維持に任じありしが、十四日小都巔附近に於ける福田小隊の戰鬪情報を得、之に策應すべく、午前十一時大都嶺に向ひ出發せり、午後二時頃西溝附近に於て約三十の匪賊を發見し、直に攻擊を開始し、午後三時頃一軒屋附近に前進せり、此時敵は兩側高地中間に逃走せるを見て、一方高地の占領を企圖し、分隊長自ら先頭に立ち高地に向ひ前進し、漸く其の中腹に達するや、敵は既に左右高地を占領しありて、頭上より我軍に射擊を開始し、續いて他方高地上にも亦敵匪現はれ輕機銃を以て我軍を猛射せり、此時一等兵は分隊の中央にありて、四方の敵に對し射擊しつゝ正面高地の占領に努力しつゝありしが彈藥漸次缺乏し、敵の射擊益々急にして前進意の如くあらず、午後六時頃敵は攻擊に轉じ我に近迫せるも彈丸既に盡きたり、玆に於て分隊長の命に依り、敵中に突入せんとする刹那遂に敵彈の爲め無念名譽の戰死を遂げたり、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り金鵄勳章功七級並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍騎兵上等兵勳八等功七級　眞田清

眞田清は神奈川縣三浦郡西浦村萩野の出身にして、昭和十年四月一日騎兵第二十六聯隊第二中隊に入營同日より六月七日に亘り、通遼にありて、猛烈なる初年兵の教育を受けつゝ、傍ら設備不完全なる營舍にありて、不寢、既當番或は傳令等に服務し、日夜精勵以て警備の任を完ふせり、六月八日北支事件の爲め山海關附近出動の爲め、兵器被服及諸物品の授受並返納等に不眠不休努力し、出動準備を遺憾なからしめ、爾來七月八日に亘り聯隊機關銃小隊員として、山海關に駐屯し克く小隊長の命に從ひ、其職責を完ふせり、次いで七月九日より十二月十六日に亘り、西北防衛地區海拉爾に在りて、教育並に警備勤務に從事す、其間施設不備なる兵營にありて熱心に教育を受け酷寒と鬪ひ、內務に精勵し、不寢番、既當番或は傳令等に服し、以て警備の達成を遺憾なからしめたり、此間騎兵一等兵に進めらる、十二月十七日より二十五日に亘り興安北省西南國境調査隊要員として、酷寒零下四十度餘の中にありて、人員少數なるに拘らず終始一貫奮勵努力以て其任務完成に邁進せり、此間十九日調査隊は特烏喇山に向ひ前進中、不法越境し來れる外蒙兵約五十名「オラホドカ」附近に陣地を占領し國境監視隊に對し抵抗中なるを知り直に之を攻擊す、此際一等兵は機關銃分隊射手として、克く分隊長の命に遵ひ沈着機敏に射擊を開始するや、敵は側射を受くるの苦痛に堪へず、小銃若干及輕機銃一を其左翼方面に移動せしめ、我に對し猛烈なる射擊を開始すると同時に、國境監視隊方面にも猛射を浴せたるに依り我軍の前進稍困難に陥入りたり、此時敵の左側背に陣地變換を命ぜらるゝや、最も神速機敏に陣地を變換し、俄然敵の左側背より急激なる射擊を開始せしに、敵兵爲に動搖し遂に主力に從ひ乘馬退却するに至れり、玆に於て退却する敵を猛擊し、輜重車と思はるゝ駱駝車を斃し、敵をして多數の彈藥及糧食を殘置し潰走するに至らしめたり、殘留せる徒歩兵十數名は依然として射擊を續行し、容易に降服せず頑强に抵抗せしに依り、機關銃分隊は、敵の猛射を冒し、更に前進し其背後より射擊を開始するに及び漸く銃を捨てゝ降服するに至れり、二十三日夜調査隊は「アッスルスム」に宿營しありしが、既に設置せられたる在「オラホトガ」國境監視哨、外蒙兵の壓迫を受け、「ホルンデルス」に後退せりとの報に接したるを以て、「オラホトガ」附近の情況を認む可く蒙古兵と共に自動車に依り「オラホトガ」に達するや同地にありし監視兵約十名は外蒙兵約三十名の攻擊を受け、戰鬪中なるを目擊し直に之を擊退するに決し、國境監視隊と共に、攻擊に移るや一等兵機關銃射手として、沈着機敏

に先づ敵の徒歩兵の側面に向ひ射撃を集中す、爰に敵兵一時我に向ひ射撃を續けしも、終に辟易して積極的攻撃を止め、寧ろ遂次後退を開始するに至れり、玆に於て我軍機に乘じ猛烈に攻撃を繼續せしかば、遂に敵は抵抗する遑なく敗走せしに依り我軍退却する敵の背後に迫らんとせしに、敵の輕機銃窪地の北岸にあるを發見し、直に之に對し射撃を開始するや敵亦た我自動車上の機關銃に對し猛射を集中し、自動車の車體及機關部に反撥する囂然たる音響は白雪に跳躍する彼我射撃の爆音と和し戰場騷然たり、然れども一等兵は愈々沈着正確なる射撃を續行し、敵に多大の損害を與へるに依り、敵兵稍々動搖し退却するの色見へたる瞬間、一等兵は頭部に貫通銃創を受けたるも、更に屈する事なく毅然として猛射を續行し遂に敵をして敗退せしむるに至れり、然るに一等兵は重傷の爲め手當の甲斐なく悲壯なる戰傷死を遂ぐるに至れり、一等兵の勇猛果敢なる行動は、實に鬼神も泣かしむべく、軍人精神の權化として賞揚するに足るべく、其功績や拔群なりと謂ふべし、即日騎兵上等兵に進めらる。

功に依り金鵄勳章功七級並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　田中光雄

田中光雄は岐阜縣吉城郡船津町大字東町の出身にして、昭和九年十二月七日獨立守備、歩兵第二大隊に入營し、同日より中隊は錦州方面に移動を豫想し、輸送準備に着手するや、二等兵は一意專念被服及陣營具の梱色に從事す、而して輸送に方りては輸送諸勤務並停車場衛兵として熱心精勵し、以て克く其任務を遂行せり、二月十九日より四月三十日に亘り、錦州附近の警備に任じ、克く其任を盡し、五月一日より凌南縣及其隣接地方の賊伐に參加す、正月五日里山附近の戰鬪開始するや、敵彈下而も嶮峻馬背の如き地形を踏破し攻撃前進中、敵前二百米附近の高地に於て不意に敵の別動隊約百名と遭遇し、交戰の後敵に多大の損害を與へ、午後八時該高地を占領す、午後九時三十分頃敵は該高地に逆襲し來るや、勇敢に應戰し直に之をして潰走せしめたり、玆に討伐を終了し、五月十八日より再び錦州附近の警備に任じ、五月三十日其任務を完ふし、翌五月三十一日より六月八日に亘り朝陽縣南部地方の討伐に參加す、此間第二小隊第三分隊長安田上等兵の指揮下にありて、活動せしが小隊主力は敵の退路に迫るべく攻撃前進を起すや、選はれて斥候となり主力に先行して六八四高地東北方の高地占領に任じ、高地攻撃開始するや、小隊の左第一線分隊の一員として、最も行動困難なる岩石累々たる進路を最高峯に向ひ勇躍前進し、此が爲め小隊の行動を容易ならしめ、爾後追撃に移り、戰友と共に猛烈なる射撃を以て追撃し、遂に敵をして潰走せしめたり。此間一等兵に進めらる。後古北口出動、朝陽南方地區討伐に參加す、十月十日中隊凌南縣柳條子溝南方高地に李樹珍匪を討伐するに際しては、一等兵は第二小隊第二分隊にありて、當初小川斥候に加はり、中隊の最前線にありて、能く匪情特に敵陣地の翼を確め、適時適切なる報告を爲し、小隊の攻撃好資料を得せしめ、次いで火線構成に方りては左火線となり、敵の猛射を受けつゝ前進し、敵の第一線陣地たる高地を奪取す、此間一等兵は衆に擢んで常に勇進し、絶へず沈着に射撃し第一線陣地に於て抵抗せる敵をして遂に潰走せしめたり、又敵陣地の根據地たる岩山を引續き攻撃するや、敵は巧みに地形地物を利用し、其兵力位置を判斷するに苦慮しありし時、一等兵は分隊長に自ら斥候となり前面の敵情偵察を申出で、敵火を冒し巧みに地形を利用して、或は躍進し或は匍匐して、敵陣の間隙内に潜行し、當面の敵情特に兵力位置を確認し、再び敵火を冒して歸來之を小隊長に報告せり、小隊長之に依る適切なる攻撃部署を爲す事を得せしめたり、玆に岩山の敵に對し攻撃前進を開始するや、一等兵な勇躍衆に先んじ、沈着適切なる射撃を行ひ分隊全員の士氣を鼓舞せり、然るに攻撃前進繼續中、午後六時三十分頃前敵の一彈右肩胛部に次いで第二彈は側

方より左肩胛部を貫通せるも屈せず、戰鬪を繼續せんとする間第三彈は胸部を貫通し、流石の勇士も玆に壯烈なる戰死を遂げたり、一等兵の此の勇敢機敏なる行動は、本戰鬪を有利ならしめ、遂に敵をして、四散潰走の素因を爲したるものにして其功績たるや實に偉大なるものとして推賞するに足るべし、卽月歩兵上等兵に進めらる。

功に依り金鵄勳章功七級並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　淺井定雄

淺井定雄は靜岡縣濱名郡芳川村都盛の出身にして、昭和九年十二月一日、歩兵第十八聯隊第九中隊に入營し、直に同地依蘭地區の警備に任ず、當時謝文東李筆堂、趙尙志、文武間の有力匪依蘭縣境附近を橫行し治安未だ完からず、此情況下に於て、日夜繁激なる警備勤務に服し、又屢々示威行軍に、或は掩護隊として、終始一貫奮鬪努力せり、而して十二月二十六日以後は、主として連絡勤務に服し、積極的活動に依り、該地警備勤務に貢献せり、三月十一日より四月十四日に亘り、北境地區討伐に際しては當時尙寒氣酷烈山岳地帶は積雪尺餘に及び、行動頗る困難を極め、其間幾多の辛酸を嘗めつゝ各地に勇戰奮鬪し常に積極的行動に依り、克く討伐任務遂行に貢献せり、殊に三月十六日通河北方瑪瑙河上流楊木頂子の戰鬪には、該地一帶に强大なる陣地を占領せる暴林匪を攻擊するや、附近一帶は密林にして而も積雪尺餘に及び、我軍の行動意の如くならず、然るに敵は堅固なる陣地に依り頑强に抵抗す、第二小隊第五分隊彈藥手として、活躍中の二等兵は、此の猛烈なる彈雨の下樹幹鹿砦等を冒して、敵陣地に肉迫し射手をして遺憾なく其威力を發揮せしめ、谷底陣地を攻擊す、玆に於て敵聊か動搖の兆あるを知り機を失せず猛射を浴せ、遂に敵の右翼陣地を占領し、續いて勢に乘じ敵匪をして四散潰走せしめたり、而して一先づ警備地依蘭に凱旋し、警備任務に服せり。續いて七月八日より約一ヶ月に亘り關東軍隊掩護隊長丸山軍曹の指揮下にありて、測量隊の掩護に終始一貫積極的行動に依り奮鬪努力せり、此間康油坊附近及連珠崗附近の各戰鬪に際しては、第五分隊彈藥手として、酷暑の下、嶮峻なる密林地帶を踏破し、所有困苦を冒し連日連夜勇戰奮鬪し、以て戰鬪の成果を收めしめ掩護隊の任務を完ふせり、此間歩兵一等兵に進めらる、九月十九日より十二月十六日に亘り十年秋季討伐實施せらるるや趙尙志李華堂、延錄等の敵匪討伐を企圖し、九月二十五日には萬寶山西南方附近に又同月二十八日には十家子南方附近に激戰し、常に率先勇敢に前進し、適切なる射擊を以て敵を潰走せしめたり、尙此間西達蓮泡附近の戰鬪に活躍し、克く其任務を完ふせり、秋季討伐の爲め潰走せし趙尙志匪等は、一月上旬に至り湯原縣北方山中に跳梁す、中村部隊之が討伐に任じ、之を攻擊するや依蘭地方に追擊し徹底的大打擊を與へ潰走せしめたり、此間一等兵は第一彈藥手として、連日危險を冒し各地に轉戰し、勇敢機敏に行動し、以て討伐任務の成果を大ならしめたり、續いて一月九日湯原縣八里河沿岸附近の戰鬪に又一月十三日依樺縣境双龍河附近の戰鬪に參加し、勇戰奮鬪し未だ其勞慰する暇なく、再び一月十四日依蘭縣楊家店附近の戰鬪に參加す。一月十四日天明と共に四合山を出發したる、中村部隊は楊家店東端に於て綠林好、明山、天元等の合流匪約百五十と遭遇し、彼我至近の距離に於いて交戰す、戰鬪酣ならんとする頃一等兵の屬する小隊は左側高地方面より敵の退路を遮斷すべき命を受け、勇躍之に向ひ前進す、敵は該高地の占領せらるるを致命的打擊なりと知り、之が防戰に勵めたるに依り、前進中敵の集中火を蒙むるに至りしも、一等兵は毫も意に介せず積雪七寸餘、而も急峻にして攀登困難なる高地に向ひ、分隊長と共に躍進す、此時馬足を利用して反對斜面より、我に先んじ該高地を占領したる十數名は、至近の距離より一等兵を猛射す、玆に於て一等兵は良好なる射擊位置を分隊長に具申し、射擊の位置を變更し、猛然敵に適確なる射擊を開始し敵の動搖に乘じ前進を繼續し、敵前至近の距離に近迫せ

しが、此機逸す可らず、一齊突擊に依り、直に之を占領せり、此時一等兵は敢然敵陣に突進す、敵は此勇敢なる突擊に怯へ直に退却せしも、惜むべし一等兵は敵彈の爲め胸部に貫通銃創を受け「天皇陛下萬歳」を唱へつゝ壯烈なる戰死を遂げたり、淺井一等兵の勇敢なる行動と機宜に適する意見具申とは、分隊をして有効なる射擊をなさしめ、敵敗退の因をなさしめたるものにして、其功績偉大なりと謂ふべし。

功に依り金鵄勳章功七級並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　鄉西政惠

鄉西政惠は靜岡縣磐田郡十束村堀之內の出身にして、昭和十年二月二日滿洲派遣獨立混成第十一旅團要員として、獨立歩兵第十一聯隊第一機關銃中隊に轉屬、同十一日東京出發、同十三日大阪港出帆、大連を經て同二十五日平泉へ到着し、同日より五月一日に亘り該地附近の警備に任じ、寡少なる人員を以て連日連夜勞苦を厭はず自己を忘れ、終始一貫積極的に警備任務に服し、附近一帶の治安維持に貢献せり、五月六日より六月八日に亘り承德南部討伐に從事し、寬城子附近の討伐に參加するや、長期間に涉り各地に勇戰奮鬪し、以て克く討伐の任務を遂行せり、此間歩兵一等兵に進めらる、五月八日平泉縣下孟杖子附近孫匪討伐に際しては、一等兵は本部傳令として參加し、同日午前四時四十分寬城本部を出發、同九時二十分清河溝鞍部に到着す。當時敵匪約百五十名孟杖子西方高地一帶に陣地占領中なるを知り、直に此敵を攻擊す、一等兵は第二分隊員として、嶮峻なる山岳地帶に於て、彈丸雨飛の中更に意とせず、率先分隊の中心となり勇戰奮鬪し、遂に敵をして潰走せしむるに至れり、續いて五月十日孫匪の巢窟たる老梁附近の約二百の匪團を奇襲し、敵の退路を遮斷し殲滅に歸せしめ、又五月二十日東小塞附近の戰鬪に際しては、一等兵の屬する部隊の正面には、福滿、高橋兩小隊の猛擊に耐へ兼ね、潰走し來りし敵匪の現出夥しく抵抗又激烈たり、此時一等兵は命を受け、單身猛火を冒し巧みに地形を利用し、敵匪の據れる高地脚を迂回し、其後方匪團の有無狀態を偵察し、機を逸せず之を分隊長並に友軍指揮官に報告し、之より敵匪の側背に肉迫して猛射を浴せたり、之が爲め敵は周章狼狽動搖を來せしに依り、佐藤分隊及本部偵察隊の攻擊前進を容易ならしめ、遂に敵をして四散潰走せしめたり、五月二十四日北支遼化縣毛山附近の孫李匪の殲滅戰には、大隊本部傳令として本部直轄指揮小銃分隊に屬し、午前四時戰鬪開始と共に嶮峻なる山地を意とせず、率先勇躍敵火を顧みず猛進す、當時午前十時五十分頃、敵主陣地五〇六高地より、我警戒網を脫出せんと企圖せる匪團の本部直前の峪地に逃走し來れり、一等兵は其行動偵察の爲め單身峪地を匍匐し猛火を冒し岩峪に集結せんとする、副將關元有以下最高幹部約五十名の狀態を目擊し、之を報告するや、分隊長は直に比隣部隊と相呼應し、壯烈なる戰鬪の結果副將以下の匪團を殲滅せしめたり、此時一等兵の行動たるや、功績偉大なるものあり、六月九日より七月二十三日に亘り古北口附近に出動し、常に積極的に精勵し、以て克く其任務を完ふせり、次いで七月二十四日より十月五日に亘り平泉附近の警備を終へ、朝陽北部秋季討伐に活躍し、十一月三日龍家店附近の掃蕩に際しては、龍家店西北方一粁無名部落に潛天林司令部潜入しありとの情報に接し、中隊之を包圍攻擊するや、一等兵は當初村落四圍の監視兵に加はり、監視中擧動不審の土民數人屋內に逃入するを發見し、機を失せず之を小隊長に報告すると共に、單身拳銃を擬し之を追擊中、不幸土壁銃眼より敵の射擊を受け、腹部に二發の貫通銃創を受けたるも更に屈せず、大聲を以て小隊長に報告し、以て中隊をして擊滅を容易ならしめたり、一等兵益に壯烈なる戰死を遂げたりと雖も此勇猛果敢なる行動は軍人の龜鑑として、永く戰史に燦然たるものあるべし、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り功七級金鵄勳章並に勳八等白色桐葉章を遂げ賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　久木正生

久木正生は鳥取縣日野郡神奈川村大字下安井の出身、大正二年二月六日に生れ、父は傳次郎、母は常代と云ふ。郷里の明倫高等小學校を卒業せり。

昭和八年十二月一日徴兵として歩兵第六十三聯隊留守隊に入營せしが、間もなく滿洲派遣の爲九日松江を出發、十日宇品港を出帆、十二日釜山港に上陸、十五日哈市に到着、歩兵第六十三聯隊第六中隊に編入、爾後翌九年三月十五日迄第一期教育修業の傍ら同地警備の勤務に服し、特に中隊主力冬期作戦に出動後は、衛兵、巡察、警乘等日夜繁劇なる諸勤務に勵み、以て出動部隊をして後顧の憂なからしめ、且つ此間二月二十一日より二十四日に亘り、吉林省冬期討伐の爲哈市、狼窩、正紅旗、周家鄙等の地區掃蕩に、或は宣撫工作に從事するや、克く分隊長の指揮に從ひ、率先奮勵其任を果し、多大なる功績を殘せり。

然るに此間公務に基き病氣に罹り、三月十六日哈市衛戍病院に入院、醫療に努めたれ共其甲斐なく、六月二十二日遂に同院に於て公病死を遂ぐるに至れり。

即日歩兵上等兵に進めらる。功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はれり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　齋藤良男

齋藤良男は栃木縣上都賀郡足尾町の人にして、父を良平、母をスイと云ひ、大正二年五月二十八日生なり。昭和三年三月常磐尋常高等小學校を卒業し、爾後家に在りて農業に從事せしが、昭和九年一月歩兵第六十八聯隊に入營し、同年四月一日編成下令に依り滿洲派遣歩兵第六十八聯隊第三中隊に編入せられ、四月十一日屯營出發、同月十二日敦賀港出帆、清津港に上陸、四月二十日吉林省梨樹鎮に到着、同年十二月二日に至る間同地附近の警備に任じ、同年四月二十一日以降は梨樹鎮停車場司令部勤務員として列車軍需品の警戒、傳令勤務、給養事務の助手等に服して精勵せしが、同年六月中旬中金廠附近及び南天門附近の討伐に際し、第二小隊第一分隊に屬して之に參加し、泥濘密林を過ぎて行動し、常に率先難局に當り奮勵衆を擢きたりしが、六月十五日大城城子附近に於て突如匪賊の現出に方りては、分隊長の命に從ひて勇敢に動作し、雨飛する敵火を冒して敵を攻撃し、遂に之を撃退したり、此功績優秀なるものと認めらる。

同九年八月中旬以降平陽鎮石通河子附近に於て陸地測量隊を掩護し、同年十月九日以降秋季討伐に際しては第三小隊第二分隊に屬し、連日連夜頗る困難なる穆稜密山勃利三縣下國境或は山岳無人家地帶並に濕地帶の長期討伐に當り、此間酷寒を冒し疲勞を顧みず終始一貫奮闘し、露營宿營に際しては屢々徹宵の衛兵勳務に服して精勵せり。又桶子溝附近の戦闘

に際しては國境の險に據れる約二百の敵を攻撃し、嶮峻を攀ぢて敵の右側背に進出し、分隊長以下勇猛果敢に敵を攻撃し千村井田兩一等兵戰死、次で小隊長も又敵彈のため壯烈なる戰死を遂ぐ。此時良男毫も屈せず戰友を激勵しつゝ奮戰、遂に銃劍を揮つて敵中に突入、衆兵之に倣ひ、遂に敵を擊退せり。以上の功績優秀と認めらる。

同十年三月二十五日より同月二十九日に亘る春季討伐に方りては、山口少尉の傳令として之に參加し、酷寒を冒して衛兵車輛捜護等に服務して屢々晝夜兼行、積雪數尺の大密林内に行動したりしが、蘇國々境第二十一號界標北方約七粁地點に露營し、之を據點として匪賊巢窟の精況を捜索し、三月二十九日第四中隊右縱隊として前進中、俄然匪賊と衝突し、中隊は猛烈に之を攻撃せしが敵も亦頑强に抵抗して飛彈雨の如し。此時良男傳令として第一隊を馳廻し、緊要なる命令報告の傳達中、敵の一彈は其の左胸部を貫通せしが、良男之に屈せず小隊長の命令を大聲連呼之を傳達しつゝ遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日日步兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

良男性質溫順にして氣慨あり、特に軍務に精勵して其成績優良なりき。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　米山重鎭

米山重鎭は神奈川縣高座郡小出村芹澤の人にして、昭和八年十二月一日現役兵として獨立守備步兵第十三大隊第二中隊に入營し、初年兵教育を受けつゝ警備に關する業務に從ひ、酷寒零下三十度の地に於て猛練習を爲しつゝ衛兵巡察等の勤務に服し功勞尠からず、九年三月第一期教育を終了し、同年四月一日以降滿鐵沿線及び新京附近の警備に任じつゝ移駐準備を行ひ、日夜精勵にして勞苦を事とせず、四月五日より海倫に移駐し、爾後同地附近並に賓北線の警備に任じ、同沿線の各地に於ては匪賊の出沒頻繁なる中に在りて、小數兵員と共に分遣隊として勤務し、又は線路巡察、潛伏斥候等危險なる任務に服し、又屢々討伐掃蕩示威行軍等に參加出動し、常に率先難事に當り、勇敢に動作して其の功績顯著なり。然して上記の期間に於て九年五月中旬より同年十月に亘り哈爾賓安達間滿洲電信電話株式會社電線建設の掩護隊に加はり、小銃分隊に屬して作業の直接警戒を爲し、之れが爲め分遣隊となり又は駐止斥候として匪賊の出沒妨害を警戒し、日夜不休の精勵を以て其の任務を完うしたり。以上の功績は之を綜合して特に優秀なるものと認められたり。

同十年八月初旬より九月下旬に亘りては、慶城縣四合成附近の警備に服し、地方の治安維持に大なる貢献を爲しありしが、九月二十七日四合成東方約十粁劉海令屯附近に双英鵬飛小平東洋三連長吳索倫等の合流匪約三百侵入せるを以て、混成小隊（二十八名）は之が討伐の爲め同地に急行せり。重鎭第四分隊輕機關銃第三彈藥手として本戰鬪に參加し、先づ目的地に向て前進中、進路上の警戒兵となり、敵匪潛伏の虞ある密林中の捜索警戒に任じ、進んで敵情を捜索し有利なる報告を提出すると共に分隊の誘導に勉め、以て小隊の戰鬪を有利ならしめたるが、此の前進途中に於て密林内に潛伏しありし敵の狙撃を受け、頭部に貫通銃創を被りて名譽の戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日步兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

重鎭性質溫順にして機敏、責任觀念旺盛なり。入營以來特に軍務に勉勵し、其の成績優良なり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　河西久義

河西久義は、愛知縣名古屋市南區荒子町の人にして、昭和九年十二月一日歩兵第六聯隊留守隊に入營し、同日派遣歩兵第六聯隊第十中隊に編入せられて、十二月十一日名古屋を出發し、同月十八日豆滿江を通過して同月二十一日東寧に到着し、同地の警備に任じたり。是より曩き入營直後より編成改正業務を補助し、兵器物品の整理梱包等に從事し、數日の間不眠不休を以て精勵し、又衛戍出發の後、長途の海陸輸送間は多數荷物の搭載卸下、列車船舶内の勤務に服し、率先勞苦を辭せず、以上の功績顯著なるものと認められたり。

同九年十二月二十一日以降東寧附近の警備に當り、翌十年四月上旬中師團の春季討伐に參加し、分隊長の命に從ひ常に勇敢に動作して戰功あり。然して同年四月より七月に至る間縫工作業兵として穩稜に派遣せられ、第六中隊長の隷下に屬して縫工術を學びつゝ巡察又は匪徒檢索掩護等の諸勤務に服し、常に熱心誠實に服務して其の與へられたる任務を完全に遂行せり。同年八月縫工術修了歸隊の後は衛兵巡察掩護等の諸勤務に服して刻苦精勵從前と異らず、此の間に於て中隊將兵の被服整理を擔任し、晝夜兼行殆んど休息を得ざる狀態を以て勤務に精勵し、以上の功績も亦優秀なるものと認められたり。

同十年九月二十四日より師團の秋季討伐に方りては岡島討伐隊、高橋小隊小銃手として之に參加し九月二十五日水曲流溝子及び九拂溝附近に於て、十月十日十一日小寒葱河奥地に於て又十月二十一日二十二日黄泥河子北方、十月三十日大綏芬河右岸地區に於て匪賊を討伐掃蕩し、大密林地帶或は嶮峻なる山地に行動し、幾多の困厄を忍びつつ其の任務に邁進せり。斯くて十一月九日久野分隊長指揮の下に防寒被服受領の掩護隊に加はり、折からの降雪を冒して出發し、西歳子に到着同地に露營し、翌十日露營地を出發し、東片底子に向ひ、久義縱隊の最後尾に在りて警戒を擔任しつゝ前進せり。然るに當日の前進地區は「ブナ」樹密生し且つ雜草繁茂しあり、加之降雪愈々烈しく四周の通視は頗る困難なりしが、久義分隊長を輔佐して統制困難多數の傭役馬夫を督勵しつゝ前進、萬寶灣の西方約五粁なる谷地に達したる時、突如共產匪の一團より襲擊を受け、掩護隊は直に應戰したるも、敵匪は地形の利と衆多を恃みて猛火を注ぎつゝ漸次に我を包圍せんとしたり。久義沈着正確なる射擊を以て敵に大なる損害を與へ、次で分隊と共に敵中に突入し直に二三の敵匪を刺殺したり、敵匪震駭して一時退却したるも其數に於て十數倍の敵は他の方面より殺倒し、分隊は其の携帶彈藥全部を射耗し、遂に分隊長以下銃劍を揮ひて再び敵中に突入せり。久義此の際敵彈を胸部並頭部に受けて壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

久義性質溫順にして沈勇たり。事に當りて熱心、責任を重ずるの觀念旺盛にして軍務の成績優良なり。上下皆戰沒を惜しみ痛く之を哀悼せり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　本橋勇一

本橋勇一は埼玉縣入間郡所澤町大字所澤の人にして、昭和八年十二月一日獨立守備歩兵第七大隊第一中隊に入隊し、同日より蓋平に在りて事變に關する勤務に服しつゝ初年兵教育を受け、翌十年三月圖們に移駐して同地の守備に任じ、四月一日以降圖寧線の警備を擔任して翌十年三月初旬に及びたりしが、此の間二道河子、小三岔口及び圖們に在りて服務せり。

同地方は間島地區に於ける共産匪の根據地にして、鐵道沿線に出沒し、或は線路破壞、列車轉覆、部落襲擊等の事故頻發し、民心甚しく不安の狀態にありしが、守備隊到着以來至嚴の警戒を保ちつゝ、積極的に討伐掃蕩を行ひ、以て治安維持を確立したるが、勇一常に率先難事に當り士氣旺盛に活動して中隊の任務達成に貢獻せる處甚大なり。以上の功績優秀と認めらる。

同十年五月二日哈爾巴嶺附近の戰鬪に際しては、勇一列車警乘兵として服務中偉功を立てたり。卽ち同日午前二時三十分第二〇二列車に警乘中、京圖線哈爾巴嶺驛西方約三粁の地點に於て突如脱線轉覆と同時に約二百名の匪賊より襲擊を受けたり。勇一輕機關銃分隊長として五十嵐上等兵の指揮を受け、沈着勇敢に動作して適切有効なる射擊を以て敵を制壓し以て列車に向てする匪群の殺倒を防止しありしが、次で下車攻擊中彈藥缺乏し、遂に負傷者の銃劍を執りて群がる敵中に突入し、直に敵匪一名を刺殺したるも、此時敵彈のため頭部及び左右大腿部に貫通銃創を受け遂に名譽の戰死を遂げたり。本戰鬪に於ける勇一の機敏なる處置は、警乘長をして遺憾なく列車防禦に關する處置を爲さしめ、以て多數乘客に對する匪賊の惨虐行爲を免れしめたるのみならず、寡兵を以て衆敵に對し奮戰猛鬪、長を中心とし枕を並べて其の任務に殉じたる動作は正に皇軍の爲め萬丈の意氣を表現して餘ありと謂ふべし。勇一功績拔群を以て卽日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

勇一性質溫順にして剛勇なり。入營以來特に長上を敬し、同僚との交誼厚く、常に上下の信愛を受け、隊内諸員皆其戰歿を惜しみたり。

陸軍輜重兵上等兵勳八等功七級　福田正德

福田正德は、島根縣簸川郡灘分村大字平田灘分の人にして、父を善藏、母をミチと云ひ大正三年十一月三日生る。昭和二年三月鄕里の小學校に於て尋常科を卒業し、次で縣立平田實業學校に入校し、昭和五年三月同校を卒業す。翌六年青年訓練所に入所せしも、同九年入營に方り退所。昭和九年十二月現役兵として關東軍自動車隊第一中隊に入隊し、同日より新京に在りて初年兵としての教育を受け教育の進歩に伴ひ、漸次重要なる警備任務に服し、熱心勤勉、自動車機關の調整修理等に從事し、以上の功績顯著たり。

斯くて新京附近の警備は翌十年四月七日に亘り、此の間精勵一日の如く出動の準備を完成し、四月八日より熱河作戰に參加のため新京を出發し、熱河省平泉に派遣を命ぜられ、獨立第十一旅團長の指揮下に入りて平泉承德間軍需品の常續輸送に任じ、又馬欄峪撒河橋警備隊に軍需品の輸送を擔任し、殊に五月五日より同七日に亘れる平泉警備隊有田部隊の下板城南方地區匪賊討伐に參加し、同隊の討伐効果を擴大せるに與つて力あり、以上の功績優秀と認めらる。

同十年五月十七日獨立混成第十一旅團命令に基き朝陽警備隊坂田部隊は大平房附近の匪賊を討伐するに方り、正德之に協力すべき命令を受け、自動車第一六四九號連轉手として小隊長磯部輜重兵特務曹長の指揮を受け、同日坂田部隊の尖兵を搭載し、各種難路を突破して前進し、大平房附近に於て匪賊と遭遇するや、尖兵は直に之を擊退し、次で之を追擊して朝陽南方約十六粁なる大營子に達するや、前方並に右方より敵の射擊を受け小隊は之に應戰す。此時敵の一彈は正德の愛車放熱函に命中せり。正德敵彈下に在りて沈着に動作し所要の應急修理を了りたる後、尖兵の兵員僅少なるを見、他の運轉手助手と共に銃を執りて火線に加はり敵を猛射せり。然るに火線に於て彈藥の缺乏を告げたるも、豫備の彈藥は自動車内に在り。然も河原の眞只中に在る自動軍には敵の射彈集中し、之に近づくことは此際極めて危險なるや明なり。此の時正德奮然として起ち、自動軍上に飛上り彈藥箱を引出し、第二の箱を取出さんとして再び自動車に飛上りたる一刹那、敵彈のため頭部を貫通せられて、遂に壯烈なる戰死を遂げたり。正德功績拔群を以て即日輜重兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

正德性質溫良にして氣概に富み、其鄉に在るや交友に交誼厚く、常に衆望を集め青年分團長に推され兼て本團幹事に就任し、團員の指導誘掖に勉めたり。又入營以來特に軍務に精勵して成績優良なりき。正德妻あり淸子と云ふ。遺族一同の健在を禱る。

陸軍歩兵上等兵勳八等　平野宇平

平野宇平は靜岡縣磐田郡敷地村萬瀨の出身にして、歩兵第十八聯隊第五中隊服務中、昭和九年四月一日臨時編成下令、同十六日滿洲派遣の爲め屯營出發同二十八日佳木斯に到着し、同日より該地附近の警備に任ず、其間部隊衛兵斥候傳令等に精勵し、至嚴なる警戒裡に其重任を完ふせり、六月十一日より八月十四日に亘り、駝腰子にありて同地附近の警備に任じ、其間屢々討伐に出動し、特に中隊は依蘭部隊の糧秣輸送の爲め、五月八日佳木斯出發五月十日任務を完ふし佳木斯に歸還せり、此歸還の途次十日午前七時三十分頃土龍山北方約二里長金山附近に於て約八十の匪賊と遭遇し直に之を攻擊せり、此時平野は第五分隊第四彈藥手として敵彈雨飛の中にありて沈着勇敢克く小隊長及隣接分隊長との連絡に勉め、以て小隊長の命令意圖を適時遺憾なく各分隊長に傳達し、本戰鬪に大なる貢獻を與へ其功績優秀なるものあり、五月十五日より二十七日に亘り春季討伐に際しては、田中部隊に屬し、駝腰子、大平川鎭附近に蟠踞せる謝文擊並に王子彬匪の伐討の爲め出動せり、而して討伐地域は殆んど山地にして道路極めて險惡、殊に前日の降雨の爲め道路は至る處に濕地となり水量多く、人馬の通過に大なる困難を來せり、宿營に方りては家屋狹少のみならず臭氣鼻を衝き、更に物質の調辨不自由の爲め給養極めて粗惡なる等の狀況下に於て、克く困苦缺乏に堪へ軍紀を守り、士氣極めて旺盛常に積極的任務達成に邁進せり、而して再び佳木斯警備中八月十五日病に冒され、同地衛戍病院に入院九月一日哈爾賓衛戍病院に轉送十月二十六日歩兵一等兵に進められ十一月一日內地送還豐橋衛戍病院に收容、同日留守第一中隊に編入、專心加療中、十月十八日病革まり遂に病歿するに至れり、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

陸軍騎兵上等兵勳八等功七級　森川健太郎

森川健太郎は佐賀縣佐賀市神野町の出身にして、昭和十一年三月七日獨立騎兵第十一中隊に入營し、同日より赤峰附近の警備に任じ、初年兵として第一期教育訓練の傍ら、繁激なる警備勤務に精勵し、以て第一期檢閲を終了し且つ赤峰警備をして遺憾なからしめたり、所屬中隊は六月十六日より治安肅正の爲め、警備區域内に潜入せる周永久を匪首とする合流各匪の徹底的殲滅を期し出動す、森川は出動當初より、大行李掩護の機關銃分隊要員として參加し、酷熱百度餘の炎暑を意とせず、大行李自動車と共に連日連夜道なき至難の地區を辿りて、常に中隊主力への糧秣彈藥等の補給に支障なからしめたり、就中六月二十九日喇嘛前山附近の戰鬪に於ては白石車載機關銃分隊四番銃手として機敏なる機銃の卸下陣地侵入並に迅速なる積載に任じ、機關銃をして戰機に合せる威力を發揮せしめつゝありしが、吳同花附近に達せしとき、敵匪團の韓家窩堡方面に東走を企圖するや、分隊は該匪の退路を遮斷せんと欲し、敵匪の主力を超越し、約五六十の匪と同時に韓家窩堡村落に突入す、此時敵の一齊射擊を受け、瞬間にして自動貨車の車體に數彈を受けたり、森川は分隊長の命に依り、拳銃を以て戰友に擢して至近の距離に肉迫せる敵匪數名を射殺す、此の時自動貨車は俄に其の進路の前方小地隙に遭遇し切換への暇なく、全速にて之を跳飛し大衝擊を受け急停止す、戰友本能的に相扶け危く轉落を防止するを得たり、敵匪は之を目標として自動貨車に集中火を浴せたり、森川は既に身に數彈を受けあるも屈することなく能く之に應戰し、敵匪を車體に近接せしめず、益々勇敢機敏に活動し、遂に分隊は安全に村落を突破し、敵匪の退路を遮斷するを得たり、然るに此時森川は更に一彈頭部を貫通するに及び、玆に壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり、此の勇敢機敏なる行動は敵の退路を遮斷し、戰捷の素因を作爲したるものにして、其功績や眞に拔群なりと謂ふべし、即日騎兵上等兵に進めらる。

功に依り金鵄勳章功七級並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　西原武義

西原武義は靜岡縣田方郡函南村畑毛の出身にして、昭和九年十二月一日現役兵として、第三十四聯隊留守隊に入營し、同十二日滿洲派遣の爲め靜岡出發、同二十日哈爾賓に到着し、同日より該地附近の警備に任ず、其間第一期教育訓練を受けつゝ傍ら、警備勤務に精勵し、優良なる成績を以て第一期檢閲終了後、翌十年三月十五より月餘に亘り帽子山警備に服し屢々討伐に出動せり、特に三月二十八日万發街並西黑河附近の戰鬪に際しては、左火線分隊にありて、最も勇敢機敏に行動し沈着正確なる射擊に依り敵に多大の損害を與へ、又追擊に當りては分隊長意圖の如く行動し以て本戰鬪の効果を齎らしめたり、又四月一日三道街附近の戰鬪に於ては、打一面以下の鬼匪を奇襲し之を捕獲し、殘匪を殲滅し以て偉功を奏したり、五月二十三日より六月二十日に亘り第二次春季討伐に際しては本部傳令として參加す、本討伐は長期に亘り、而も降雨多く行動地域は濕地帶と大森林地帶にして河川所々に介在し行動頗る困難なりしも、克く困苦缺乏に耐へ、終始積極的に活躍し、屢々飛來する友軍飛行機と適時適切に連絡を保持する等傳令の任務遂行上遺憾なからしめたり、其功績頗る大なるものあり、次いで六月二十九日より七月二十日に亘り山河屯警備に任じ、本部傳令として常に卒先難局に當り、勞を惜まず、諸事積極的にして警備上貢獻する處頗る大なるものあり、又七月三日夜半蛤蟆河子附近にある創江南天崗等の合流匪約四百を攻擊するや、本部指揮機關として活躍し、交戰三時間餘に亘り、其間敵彈雨の下危險を冒して各部隊間の連絡を確保し、勇敢機敏に活動中、我右翼方面より約六〇〇の紅槍會匪大擧逆襲し來るを目撃するや、獨斷之を猛

射し沈着正確なる射撃を以て敵數名を斃し敵の心膽を寒からしめたり、之が爲め機關銃小隊を安全ならしめ、且同小隊の戰鬪を容易ならしめたり、其功績優秀なりと謂ふべし、然るに不幸病に冒され七月二十二日哈爾賓衞戍病院に收容せられ、專心加療中八月十六日遂に病歿するに至れり、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　中山由藏

中山由藏は靜岡縣小笠郡西都村上西鄕の出身にして、歩兵第十八聯隊第九中隊服務中、昭和九年四月一日編成下令、同十六日屯營出發、同二十一日國境通過同二十七日依蘭に到着し、同日より該地附近の警備に任じ、繁激なる警備諸勤務に精勵中、五月六日大隊長護衞の爲め河合少尉の指揮下にありて、團山子に向ひ一行の前進をして、萬遺憾なからしめ、又六月二十二日齋藤小隊に屬し、土龍山湖南營部隊の軍需品輸送を實施するや、當時明山亮山匪今尙附近に跳梁しある危險なる情況下に、中山は克く上官の命を遵奉し、至嚴なる警備裡に輸送業務を完全に遂行し二十三日歸還せり、以降尙依蘭地區の警備に任じ、人員僅少なるに拘らず、日夜繁激なる警戒勤務に精勵中、五月十八日より三十一日に亘り、春季依蘭地討伐實施せらるるや、所屬中隊は倭肯河流域に於ける謝文東匪討伐を擔任し、龍城七十日間に亘る湖南營屯槃隊の救出に活躍し、敵匪をして四道溝に撃退し、續いて小石道河子に亮山匪約二百を撃滅し、小八浪に於て東來好匪約百を撃退す、殊に小石頭河子に於ては、時恰も雨天而も暗夜加ふるに地形不案内にして道路極めて嶮惡なりし爲め、行動困難なりしも更に屈せず、勇猛果敢なる行動を以て克く敵を攻撃し遂に四散滑走せしめたり、六月十三日東馬廠甸子附近の戰鬪に實山の率ゆる約三十の騎馬匪を攻撃するや、中山は第三分隊彈藥手として、縱横無盡に活躍し、以て該匪を殲滅せしめ、續いて六月十七日依蘭北方約一邦里にある、大古洞河に水賊猖獗しあるを知り、同日午前八時三十分松花江を渡河し、大古銅河流域を行軍し、附近一帶を掃蕩す、本討伐間中山は常に率先積極的に活動し以て討伐任務遂行上貢献する處大なるものあり、六月十八日明山、亮山匪は黑龍江省軍脫走兵と合流し、其數二百五、六十名一團となり、依蘭縣城を攻撃して金品を强奪せんと企圖し依蘭東方約二邦里に達す、茲に於て依蘭の吉林軍及警察隊は之が討伐に際して却て苦戰に陷りしを以て、守備隊は午後五時警急集合し之を赴援し、翌十九日敵を神子勾に於て攻撃し東南方に潰走せしめたり、中山亦た第三分隊彈藥手として參加し、迅速機敏なる行動に依り、機能を發揮せしめたり、其功績偉大なるものあり、次いで九月一日より十日に亘る五道崗大八浪三道崗方面の討伐に際しては、大田小隊輕機第三分隊にありて、警戒勤務並に行李の監視等に任じ、惡天候の爲め行動極めて困難なりしも、克く奮鬪努力し以て其重任を完ふせり、十月七日より二十日に亘り秋季依蘭地區討伐に際しては十月八日依蘭出發より、華木崗の戰鬪に至るまで、殆んど連日尖兵として活躍し、十四日より十五日の間は華木崗の新戰場に占據し、大隊の該地附近掃蕩の據點となり、又重傷せる梶塚少尉を掩護し、或は酷寒を冒して飛行場を造築する等所有勞苦に耐へ克く其任務を完ふせり、次いで大隊は十月十四日華木崗合流點に於て謝文東、明山等約五百の合流匪を捕捉し之に殲滅的打撃を與へたり、此時中山は小隊長負傷後と雖も更に勳搖する事なく勇敢沈着に射撃を繼續し、遂に七虎力河の驛に進出し敵に多大なる損害を與へ、之を潰走せしめたり、而し以降依蘭地區警備に精勵中不幸病に冒され十年二日二十五日佳木斯衞戍病院に收容專心加療中五月三十日病革まり遂に歿するに至れり、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　櫻井現司

櫻井現司は群馬縣佐波郡殖蓮村大字植木の出身にして、昭和十一年三月二日獨立守備歩兵第十六大隊第三中隊に入隊し同日より京白線守備並に附近の警備に任じ、初年兵として教育訓練を受けつゝ、傍ら警備諸勤務に服し、列車警乗、裝甲軌道車、モーターカー、巡察等に精勵し、又討伐示威行軍に出動し、常に積極的行動を以て、京白線の交通確保並に中隊地區の治安維持に貢献する處大なるものあり、七月十五六兩日に亘る肇洲縣前敖木臺附近の戰鬪に際しては、當時第一扶江及拉林河沿線を根據とし、扶餘肇州兩縣下に轉々として現出し跳梁を逞ふせる、九龍老軍、四季好文武の合流匪約三十は、十四日扶餘縣第三區葛拉溪北方松花江中砂島に蟠居しありとの報に接し、前郭旗守備隊長山道大尉以下五十七名は、十五日午後三時を期し之を攻撃すべく、同日午前四時扶餘南岸より警備艇二隻に分乘出發し、午後三時目的地に到りしも敵を發見せず爾後趙家店、三間窩堡附近に至る間の江中を掃蕩し午後八時葛拉溪に歸着敵情を捜索宿營す、十五日午後十一時頃に到り、該匪は肇州縣前敖木臺に蟠居しあること概ね確實となりしを以て之を攻撃するに決し、十六日午前三時宿營地を發し、同五時戰鬪開始位置に航行するや、監視匪の知る處となり、匪團は直に高地の東端に散開し我警備隊に一齊射撃を浴せたり、中隊長は先づ輕機を以て敵を猛射せしめつゝ、濕地常に上陸戰鬪を開始す、此時根岸は第四輕機銃分隊第二彈藥手として、身丈に達する濕地葦の繁茂中に潜伏し、敵を猛射し其有効適切なる射撃に敵數名を射殺し、以て敵の心膽を寒からしめ、友軍の戰鬪を有利に展開せしめ、愈々敵に近迫し突入するや、我軍の急激なる突入に逃げ場を失せし潜伏匪の狙撃を受け、其一彈根岸の左前膊を擦過せしめたるも更に屈せず、直に敵の左側に突入す、此瞬間更に第二彈飛來左悸肋部に命中し茲に壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり、根岸の攻撃精神の熾烈に友軍の士氣を鼓舞し、遂に敵を殲滅に歸せしめたる其功績や偉大なりと云ふべし、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り金鵄勳章功七級並に勳八等白色桐葉を授け賜はりたり。

陸軍騎兵上等兵勳八等功七級　佐藤龜之助

佐藤龜之助は秋田縣由利郡鮎川村黒澤字寺田の出身にして、騎兵第二十四聯隊第一中隊服務中、昭和十年九月二十一日編成下令、同二十六日盛岡出發勇躍征途に就き、十月二日國境通過、同十日富錦に到着し、直に該地附近の警備に任じ、士氣旺盛にして上官の意圖を體し、日夜繁激なる諸勤務に精勵せり、特に其の間十一月二十一日より三十日に亘り、寶清縣下の討伐に際しては、聯隊機關銃小隊に屬し、各地に勇戰奮鬪し克く機能の發揮に努め、次いで十二月十四日より三十日に亘り、饒河縣下の治安宣撫工作並に匪賊討伐の爲め出動し、克く小隊長及分隊長意圖の如く活躍し、馬頂子附近の戰鬪の如きは、嶮峻なる山岳地帶を物ともせず、一意攻撃精神の下に機能を發揮し、聯隊行動に遺憾なからしめ、其功績や偉大なるものあり、一月二十九日より二月七日に亘る饒河縣下大葦子附近の蘇聯不時着機偵察の要務を終へ、二月九日より十六日に亘る富錦縣西南地方討伐には機關銃分隊として、連日連夜所有困苦缺乏に耐へ、警戒に戰鬪に克く分隊長の意圖の如く、常に積極的に活動し以て任務遂行に寄與し、其間木營附近の戰鬪、玻力崗西溝附近の各戰鬪に參加し、九洲匪亮山八河合流匪を各潰滅に歸せしめ以て偉功を奏し、續いて三月二十九日より四月四日に亘り、寶清縣及富錦縣南部地方討伐に出動するや、各地に勇戰奮鬪し以て討伐の目的を達成せしめ、其功績頗る優秀なるものあり、七月七日半截林子附近に玉鳳林孟嘗君等の合流匪約百蟠居中なるの情報に依り、中隊は直に出動す、佐藤又機關銃射手として參加し、愈々敵

陣地に迫り攻撃開始するや、午前九時頃第三、四號森林より猛烈なる敵の側射を受くるを以て、所屬分隊は第一號森林を占領し、三浦小隊の戰鬪に協力すべき命を受けたるも、該森林は射撃困難なる爲め、第二號森林に進出せり、此時佐藤は率先敵彈雨飛の下機を逸せず、勇猛果敢に適確なる射撃を浴せ、以て敵の心膽を寒からしめ、且つ三浦小隊の攻撃を容易ならしめたり、時恰も午前九時三十分頃佐藤は敵彈の爲め左大腿部に貫通銃創を受けたるも、攻撃精神に燃ゆる佐藤は更に屈せず射撃を繼續し居りしが、之を知りたる分隊長は、直に之を後退せしめ止血救急の處置を爲したり、戰鬪終了後佳木斯衛戍病院富錦分院に收容せしも、大腿骨々折し内出血甚しかりし爲め、戰友の厚き看護も甲斐なく、即日午後十時三十分遂に戰傷死を遂ぐるに至れり、本戰鬪に於ける勇猛果敢なる行動は、皇軍の武威を遺憾なく發揮せしものにして、其武功拔群なりと謂ふべく、即日騎兵上等兵に進めらる。

功に依り金鵄勳章功七級並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　戸苅光男

戸苅光男は愛知縣寶飯村豐川町大字大崎の出身にして、歩兵第十八聯隊第六中隊服務中、昭和九年四月一日編成下令、同十六日滿洲派遣の爲め屯營出發、同五月一日富錦に到着し、直に前任部隊と交代し、該地附近の治安維持並警備勤務に任じたり、當時附近の治安概ね維持せられたりと雖も、城外十里を出でずして小匪賊蟠居蠢動し、不逞の徒城内に侵入し人心不安の折柄至嚴なる警戒裡に、設備不完全なる假兵舎にありて衛兵巡察不寢番等に精勵し、城内及兵舎内外の治安並に警戒に任じ、日夜精神的に努力し以て警備上遺憾なからしめたり、五月十二日午前一時より同六時に亘る、城内の匪賊掃蕩に際しては、指揮官の命に基き擔任區域の交通を遮斷し、嚴重なる警戒及捜索を爲し、隣接部隊と連繋を保ち、以て憲兵警察隊の行動に便宜を與へ、遂に七十餘名の容疑者を逮捕し、貢献する處大なるものあり、五月初旬以來約七百の黄沙會匪及紅槍會匪は樺川及集賢鎭附近に蟠居しあり、大隊は之が討伐の目的を以て、五月十三日富錦を出發せり、時恰も北滿は酷暑の爲め、人馬の行動著敷困難且つ飲料水缺乏を告げ、濕地は到る處人馬の通過を妨げ、宿營に方りては家屋狹隘にして不潔極りなく、臭氣鼻を衝き更に物資の調辨不自由の爲め、給養極めて粗惡なる等最も困難なる狀況下に於て、戸苅は特に責任觀念旺盛にして、常に自ら難局に當り、終始一貫勇敢に行動し、以て十日間に亘る討伐に對して貢献する處大なるものあり、五月十四日柳樹河子に宿營せし、約二百の匪賊は東方に向ひ移動せしを知り、大隊は直に之を攻撃の目的にて夾信子に向ひ出動し、十六日午後一時頃哈達密河を渡りたる時、夾信子に該匪あるを偵知し、將兵の士氣大に昂り勇躍前進中、尖兵の前方七百米を七、八十騎の匪賊西北方に向ひ、移動中なるを認め、尖兵中隊配屬の機關銃及歩兵砲は直に展開して攻撃を開始せり、此時戸苅は第一線分隊の列兵として、分隊長の命に依り勇躍果敢に行動し、敵退却を開始するや、斥候となり、直に前方部落に至り敵情を捜索し、直に之を報告し、又戰鬪終結と同時に負傷者を家屋に運搬し衛生部員の援助を爲す等、本戰鬪に於ける功績偉大なるものあり、五月十七日沙崗附近の匪賊掃蕩の爲め午前五時出動し同五時五十分頃安那川の線に達す、安那川は約二粁の濕地帶を形成し、西方の一部には獨木橋あるも外は泥濘深く股に達す、而して對岸沙崗には歩騎混合の匪賊ありて、我尖兵の河岸に達するや、該部落及南方高地より盛に射撃せり、當時戸苅は本隊の先頭を前進しありしが、尖兵敵の射撃を受くるや、直に後方臺上に展開し、尖兵中隊の展開並に前進を掩護し敵の退却するや機を逸せず率先濕地を前進し、部隊を誘導し、或は徒渉材料の運搬及施設に努力し、遂に最大困難たりし濕地通過を容易ならしめ、該戰鬪並に爾後の行動を有利ならしめたり、其功績頗る大なるものあり、大隊は五月十九日双

鴨山附近掃蕩の爲め、午前四時出動し、同八時二十五分頃老馬家南方二吉米に達するや、前方右前の高地より小銃射擊を受け、直に之を擊退し其陣地を占領せり、此間戸刈は中隊長の傳令として部隊間の連絡に任じ、敵彈雨下危險を顧みず、勇敢機敏に活躍し以て其重任を完ふし、本戰鬪に貢献せり、五月二十二日駐屯地に凱旋し間もなく、全身に倦怠を感じ頭痛を催したるも、旺盛なる士氣と燃ゆるが如き責任觀とに依り、之を訴ふることなく繁激なる諸勤務に活躍しありしが、六月二日遂に病の爲め佳木斯衞戍病院に入院、後内地送還廣島衞戍病院より豐橋衞戍病院へ轉送、鋭意加療中十年三月三十日病革まり遂に歿するに至れり、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　江藤寅三

江藤寅三は靜岡縣駿東郡御殿場町東田中の出身にして、昭和九年十二月一日現役兵として、歩兵第三十四聯隊留守隊に入隊、同十二日滿洲派遣の爲め屯營出發、同二十日哈爾賓に到着し、原隊に入り第十一中隊に編入せられ、同日より該地附近の警備に任じ、教育訓練の傍ら諸當番雜役に服し、率先躬行能く掛員の意圖に從ひ、精勤以て其任務を完ふせり、翌十年三月一日より十一月三十日に亘り、第三師團無線電信教習所に修業兵として入所し、常に誠實眞劍に修業に邁進し好成績を以て修了せり、爾後哈爾賓警備に任じつゝありしが、第三師團秋季討伐實施せらるゝや、横山部隊第五號無線通信手として參加し、無線班長の指揮に從ひ常に熱心努力し、又鳥吉密本部岡田部隊本部、旅團司令部との連絡に服し、頗る繁激なるにも拘らず、迅速正確に實施し、各部隊間の密接なる連絡に遺憾なからしめ、討伐實施上貢献する處頗る大なるものあり、十二月一日より一面坡警備に任ずるや、横道河子に駐屯し、各部隊間の無線連絡に服す、此間江藤は日夜寢食を忘れて通信實施の迅速正確を期し、大隊の行動を容易ならしめ、其依つて齎らせし効果頗る大なるものあり、十二月三十日より翌十一年一月三日に亘り、馬家店附近討伐に際しては、當時酷寒零下三十餘度を示し、行動極めて困難なりしに拘らず、克く班長の意を體し、率先機材の調制を圖り、不眠不休本部各部隊間の無電連絡に努力し、部隊の行動を遺憾なからしめたり、次いで一月七日より十九日に亘り冬季討伐實施せらるゝや、討伐隊は一月七日午前七時一面坡を出發、途中肅清を行ひつゝ馬家店に到り、翌八日小山子に進出し該地を根據として附近一帶の掃蕩を實施す、出發以來報告並連絡事項逐次輻輳したるも、無電の連絡空しく、責任觀念旺盛なる江藤は責任を痛感し、日夜不眠不休之が交信の完成に邁進したるに、一面坡本部の機能不良なるを探知するに至れり、一月十五日以降歲虎嶺山中の掃蕩實施するや、迅速機敏に通信所を開設し、聯隊本部並討伐隊との通信連絡に努力し、以て討伐隊の行動を容易ならしめたり、三月九日より春季討伐出動に參加し、部隊の移動に連れ、常に無電連絡に終始し以て貢献する處あり、玆に於て横道河子に凱旋せしに、食慾不振頭痛腰部刺痛を覺へ、四月七日受診す、當時尿著しく混濁しあり、十日一面坡に歸還を命ぜられ、十一日一面坡に於て受診、十三日哈爾賓衞戍病院に入院加療中、四月二十三日病革まり遂に歿す、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　永井京一

永井京一は靜岡縣磐田郡天龍村豐島の出身にして、歩兵第十八聯隊第二中隊服務中、昭和九年四月一日臨時編成下令、

同十六日滿洲派遣の爲め屯營出發、同二十八日佳木斯に到着し、直に該地附近の警備に任じ、少數なる人員を以て部隊衛兵、碇泊所及飛行場各衛兵等繁激なる諸勤務に精勵し、又出動部隊の糧秣運搬及護衛兵等に活躍し、以て中隊の警備勤務に遺憾なからしめたり、四月二十九日横道河子附近に於て砲を有する敵匪約五百と對戰中なる第三中隊を增援の爲め大隊主力出動するや、所屬中隊は尖兵中隊となり、暗夜未知の地形泥濘化の道路を横道河子に向つて前進す、其間永井は克く分隊長を輔佐し、勞苦を惜まず自ら進んで傳令に或は連絡に服し、中隊前進の爲め多大の貢献をなしたり、爾後横道河子西側部落の掃蕩及永譽鎭附近の掃蕩に際しては、身心の疲勞を意とせず、幾多の危險を冒して卒先勇戰奮鬪し以て掃蕩の目的を達成せしめたり、五月十五日より十九日に亘り、依蘭佳木斯富錦地區討伐に際しては、永井は第二小隊第二分隊八番砲手として參加す、當時王子彬は大平川鎭附近にありて、紅槍會等を合せ其數約三百、反滿抗日の旗色鮮明にして暴威を逞ふせり、所屬聯隊は之が討伐の爲に出動す、時恰も解氷期にして、各地の濕地及小川は友軍の行進上最も大なる障碍なりしも、全軍の士氣益々旺盛にして、此等障碍を排し、勇猛邁進一擧に敵匪を潰滅せしめたり、此間永井は常に率先陣頭に立ち、勇戰奮鬪し皇軍の威力を遺憾なく發揮せしめたり、其功績や偉大なるものあり、續いて駝腰子、五道崗附近に謝文東及明山等の合流匪を討伐するや、五月二十一日午前零時永寶鎭出發駝腰子に前進す、暗夜に加ふるに降雨にして、道路は泥濘輜は深く沒入し、只さへ困難なるに、八虎力河及小流の橋梁は悉く燒却せられ、渡渉の外なく腰を浸して水中に入り、或は濕地に遭遇するや、地理不明の爲め、連絡困難に陷入る等凡ゆる困苦を經て漸く夜に入り駝腰子に進出し、疲勞困憊の極慰するに暇なく直に掃蕩開始するや、率先勇猛果敢に活躍し以て敵匪を潰走せしめ討伐任務達成に貢献する處大なるものあり、七月二十一日廟嶺附近の戰鬪には、第一線分隊として克く分隊長を輔佐し、敏速適切なる行動に依り據點たる高地を占領し、小隊攻擊に多大の効果を齎らしたり、折柄の豪雨は行動意の如くならざるも、沈着剛膽克く率先追擊に邁進し、遂に敵匪を南方に潰走せしめたり、尙之等匪賊の家屋掃蕩に當りても、常に勇猛果敢身を挺して職責遂行に邁進せり、續いて八月十七日廟嶺附近に蟠居せる王子彬匪討伐の爲め、暗夜未踏の地に行動を敢行するや、濕地帶の雜草深く繁茂し行動困難なりしにも拘らず、克く積極的に行動し、敵匪攻擊に際しては迂廻分隊に加はり、敵の退路を遮斷して之に猛射を浴せ多大の損害を與へ潰走せしめたり、其功績偉大なるものあり、十月三日中隊は廟嶺及程家木營老平崗附近の王子彬匪掃蕩の爲め出動するや、分隊員として參加し、連日の行動に疲勞の極に達し居るも、戰友と相共激勵し、克く分隊長を輔佐し前進中廟嶺南側に於て騎馬匪約三十を發見し、直に之を攻擊するや、沈着剛膽率先猛射を浴せ克く之を擊退せり、又程家木營附近の掃蕩に當りては、所有困苦缺乏に耐へ、密林中を縱横無盡に活躍し、以て克く其目的を達成せしめたり、次いで依蘭地區樺川地區の討伐に參加し、常に積極的行動に依り克く其任務を達成し、治安維持に貢献する處大なるものあり、然るに不幸病魔の冒す處となり、十一月一日佳木斯衛戍病院に入院後哈爾賓衛戍病院に轉送加療中惜しくも十月八日病革まり遂に病歿するに至れり、卽日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　河合仲平

河合仲平は靜岡縣濱名郡蒲村新上屋の出身にして、昭和九年十二月一日歩兵第十八聯隊第八中隊に入隊、同十一日滿洲派遣の爲め屯營出發同三十日富錦に到達し、直に該地附近の警備に任じ、日夜演習に內務に精勵努力し、僅少なる二年兵の間に伍して、不寢番に或は附近の示威行軍等幾多繁激なる業務に專念し、以て第一期を終了せり、三月十六日より四月八

日に亘り、北境地區春季討伐實施せらるゝや、人煙稀なる饒河縣内を連日の猛吹雪を冒して、各地に勇戰奮闘し、以て討伐任務を完ふせり、殊に三月二十六日部隊は李學滿匪の一部と、十八垧地附近に於て交戰するや、河合は第二小隊第四分隊輕機關銃第三彈藥手として參加し、積雪深く加ふるに雜木密生し、人馬共に其前進意の如くならざる地形に於て、分隊長の意圖の如く行動し、彈藥の補充を圓滑ならしむると共に、敵情の變化を適時適切に報告し、分隊長をして終始有利なる戰闘を遂行せしめたり、三月二十八日李學滿匪討伐の爲め出動し、帶玉碾子附近に於て、敵陣地攻擊に際しては、火線分隊として、左第一線にありて、匪彈の猛射を受くるも毫も怯まず、彈藥補充を圓滑ならしめ、亦た適切なる敵情の變更を報告し、自ら左右連絡に當り、分隊長をして常に有利なる指揮掌握を爲さしめたり、而して敵潰走に乘じ其根據地陷落並に追擊に當りては、克く分隊長を輔佐し戰闘成果に貢献する處大なるものあり、其功績優秀なるものあり、四月十日より十五日に亘り、小椎率山附近の戰闘には、率先陣頭に立ち勇猛果敢有効なる射擊を以て、敵を殲滅に歸せしめ偉功を奏したり、九月十九日より十月九日に亘り北境地區秋季討伐實施せらるゝや、牡丹江討伐隊松本部隊岩淵小隊第一分隊小銃手として參加し、小隊豫備隊として、常に本部の警戒に、宿營地の巡察斥候等に任じ、幾多の困苦に堪へ奮闘努力以て、其任務達成に貢献せり、十月二日公心磯附近に匪首不明の合流匪あるを知り、所屬部隊は直に之を攻擊するに決し、同日午前零時三道崗を出發、公心磯方面の敵匪を求めて行動す、此夜寒氣加はり暗夜然も地理不案内たる地域を行動し、偵察の結果公心磯附近に大家好匪約四十の騎馬匪あるを知り、直に之を攻擊す、河合は左第一線小隊の火線として、敵の頑强なる抵抗も意とせず、危險を冒して各部隊間の連絡に任じ、迅速機敏に馳驅奮闘し、分隊長をして有利なる指揮掌握をなさしめ、遂に敵の退却開始の兆あるや、速かに報告すると共に益々沈着にして前後の連絡を密接にして、毫も遺憾なからしめたり、此の勇猛果敢なる行動に友軍の志氣頓に擧り、戰捷の期を早からしめたり、其功績や偉大なりと謂ふべし、十月十日より十八日の間披河移駐業務に精勵し、披河到着後十一月二十日に亘り、該地附近の警備に任じ、日夜繁激なる警備諸勤務に努力し、又十月二十四日より北部寧安地區秋季討伐開始せらるゝや、輕機銃第二彈藥手として、積雪尺餘の山岳地帶を踏破し、殊に石道河子より二道河子に進出の際の如きは、寒氣肌を刺す中を數度の渡渉行軍を爲す等所有困苦に堪へ、或は斥候となり、又警戒勤務に任ずる等、常に積極的に行動し、其任務達成に邁進せり、然るに行動中病魔の冒す處となり十一月九日披河衛戍病院に收容せられ、專心加療中十一月二十日遂に病革まり歿するに至れり、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　榊美好

榊美好は靜岡縣田方郡三島町德倉の出身にして、昭和九年十二月一日歩兵第三十四聯隊留守隊第十中隊に入隊、同十二日滿洲派遣の爲め屯營出發同二十日哈爾賓に到着し、該地にありて、日夜教育訓練に專念し翌十年三月九日第一期檢閲終了し、爾後繁激なる警備諸勤務に精勵中、三月二十二日より四月十七日に亘り、北鐵接收の爲め哈爾賓工廠及哈爾賓停車場の警備に任じ、晝夜兼行不良分子の捜索並に警戒及鐵道技術工場の保護に努力し、至嚴なる警戒裡に皇軍の武威を發揮し、不良分子をして乘ずるの機會なからしめ、以て接收業務達成に貢献する處頗る大なるものあり、次いで五月二日より九月五日に亘り、元寶屯に分駐するや、專ら附近の討伐を敢行し治安確立に邁進せり、其戰況の大要左の如し。

五月八日元寶屯南方地區大王碾子山附近の五省及海洋匪を急襲し、次いで田家附近の匪首會合場を夜襲する爲め、岩谷

小隊第六分隊射手として午後一時四十分同地を出發し、午後六時三十分大王磴子山東北側に至るや、一軒屋より數名の匪賊山中に逃避するを發見し、直に之を急襲し匪首海洋を斃せり、爾後行動を續行し、晝間より暗夜に亘り難路を意とせず所有困苦缺乏に耐へ、勇猛邁進匪首會合場に向ひ、夜襲を敢行し、敵に多大の損害を與へ、之を擊退し翌九日午前四時元寶屯に凱旋せり、次いて五月十九日元寶屯東方約六粁南黃泥河子附近部落に仁義匪掠奪中なるを知り、午前十一時三十分發之が討伐に出動す、此時榊は第六分隊彈藥手として之に參加し、勇猛果敢に前進し南黃泥河子に進出するや、匪賊約八十名部落家屋約三棟を燒却掠奪中なるを以て、直に之を攻擊す、此時火線分隊彈藥手として、最も勇敢に且迅速に行動し彈藥の補充に遺憾なからしめ、以て火力の發揮に任じ、敵に多大の損害を與へ北方に擊退せしめたり、續いて五月十八日元寶屯南方約十二粁大王磴子山附近に匪賊約百蟠居しあるの報に接し、午前三時宿舍を出發し、一路敵の陣地に肉迫し直に之を擊退せり、又五月二十九日元寶屯東北方約二十粁石頭河子附近に五省匪約二百を攻擊し、勇戰奮鬪以て之を潰走せしめ、王家溝東方高地に於て、巢窟數個を燒却し再起不能に陷らしめたり、六月十三日孫初把頭附近に敵匪約三十を殆んど殲滅し、尙進んで七月十日元寶屯東方約三十支里附近に、匪首仁義の率ゆる約百五十の匪賊あるを知り、直に出動し南黃泥河子東方高地に達するや、敵は前方七百米の臺上を退却中なるを發見し、直に之を攻擊す、此時榊は左火線分隊輕機銃彈藥手として、最も迅速且勇敢に行動し、以て輕機の威力を發揮せしめ、遂に敵をして四散潰走に陷らしめたり、續いて老西溝附近の戰鬪に敵を擊退せり、以上の戰績を綜合するに榊の武功實に優秀なりと謂ふべし、九月六日より四日間に亘る步砲連合討伐に際しては、第五分隊第五彈藥手として、克く其火器の威力を發揮せしめ、以て敵を擊破し、討伐任務達成に貢獻せり、九月二十八日より十一月二十六日に亘り、十年度秋季討伐實施せらるゝや、典興崗附近、南黃泥河子附近大青頂子山附近、青雲山附近の各戰鬪に參加し、常に輕機銃彈藥手として、遺憾なく機能を發揮せしめ敵匪をして、悉く潰滅せしめたり、其功績や頗る大なりと謂ふべし、然るに十一月二十七日病に斃れ哈爾賓衞戍病院に收容され、專心加療中病革まり十二月三日遂に歿するに至れり、即日步兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍步兵上等兵勳八等　片山庄太郎

片山庄太郎は靜岡縣引佐郡三ヶ日町字志の出身にして、昭和九年十二月一日步兵第十八聯隊第九中隊に入隊、同十一日滿洲派遣の爲め屯營出發翌十年一月二日依蘭に到着し、爾來同地にありて主として初年兵敎育訓練を受けつゝ、警備勤務に精勵し、三月八日良好なる成績を以て第一期檢閲を終了せり、三月十一日より北境地區春季討伐實施せらるゝや、當時謝文東、趙尙志、李華堂、畢林滾地雷等の合流匪依蘭方正通河鳳山縣下に蟠居中なりしに依り、江西部隊は之が討伐の爲め、三月十二日依蘭を出發し、氷雪の難路を冒し、三月十六日畢林の山寨攻擊を開始せり、此間片山は第一小隊第二分隊にありて終始熱心に警戒並に搜索の任に當り積極的に行動し、士氣益々旺盛なるものあり、然るに敵は山寨を不落の要害と恃み、其勢侮り難きものあり、而して附近一帶は密林にして加ふるに積雪尺餘に及び、我軍の行動意の如くならず、玆に於て第一小隊は火線となり猛射突擊に依り敵の警戒陣地を奪取し、愈々中央突角陣地の堅壘攻擊に移るや、敵は巧みに銃眼を利用し頑强に抵抗し、友軍の前進益々困難なりし際、片山は勇敢にも逐次敵に肉迫し、猛射を浴せ戰鬪愈々酣ならんとする時敵彈飛來片山の右上膊を貫通せり、然るに片山は屈する色なく射擊を續行せり、此の沈着剛膽なる片山の行動は、友軍の士氣を大に振張し、遂に戰捷の素因を爲したるものにして、其功績頗る大なるものあり、而して直に入院手當

の結果、五月四日治療退院六月一日歩兵一等兵に進めらる、然るに運拙なく同七日再び病に冒され衛戍病院に入院、十月三十日内地送還、廣島衛戍病院に收容同日留守隊附を命ぜられ、鋭意加療中十一月四日遂に歿するに至れり、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

陸軍騎兵上等兵勳八等功七級　吉田壽男

吉田壽男は福島縣相馬郡原町南新田字大橋本の出身なり、騎兵第二十三聯隊第三中隊入營中、昭和十年九月二十一日滿洲派遣編成下令同二十八日盛岡出發勇躍征途に就き、十月八日佳木斯、長途輸送業務の勞を慰する暇なく、十月二十九日松本部隊、長岐小隊に屬し、半家河子附近の匪賊討伐に參加し、中隊乘馬襲撃に方りては、勇敢機敏に勳作し、亦徒歩攻撃に於ては、沈着剛膽に匪賊と交戰し、小隊の攻撃を容易ならしめ功績顯著なるものあり。

十一月二十八日皇五爺嶺附近の匪賊討伐に於て、吉田一等兵は八代中隊の尖兵たる内田小隊に屬し先頭車輛に搭乘前進し、中隊長車との連絡に任じ、其確實なる報告は尖兵長をして任務の達成を容易ならしめたり、而して皇五爺嶺に於て、匪賊二百四、五十を發見し、尖兵車は速度を増加し、該匪團に急進近迫し、車上射撃を行ふや、一等兵は沈着正確なる射撃に依り、直に敵匪を潰走せしめ多大の損害を與へ、續いて徒歩追撃戰に移らんとするや、敵彈飛來吉田一等兵の腹部を貫通せり、然れども一等兵は毫も屈せず、進撃せんとせしも重傷の爲め起つ能はず、一等兵の無念極まりなきを察知し得べし。直に佳木斯衛戍病院に收容十二月一日騎兵上等兵に進められ同七日遂に戰傷死す。

功に依り功七級金鵄勳章並勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功六級　川合大二

川合大二は愛知縣南設樂郡鳳來寺村大字一色字小島の出身なり、昭和九年四月一日臨時編成下令同日歩兵第十八聯隊第二機關銃中隊に編入され、同四月十六日屯營出發五月一日富錦に到着し、前任部隊と交代するや、爾來同地區警備に任じ常に克く上司の意圖に從ひ、連日繁激なる衛兵巡察の諸勤務に專心精勵し、治安並警備勤務を遺憾なからしめ、亦二年兵除隊後は極めて僅少なる人員を以て、初年兵入隊の爲め晝夜兼行寢食を忘れて準備の完璧を期し、更に支障なからしめたり、同五月十三日以降討伐の爲め、樺川集賢鎮附近、夾信子附近、沙崗附近、双鴨山附近等各地に轉戰し、其間或は泥濘腹部に達し車輪を沒するの惡路に屈する色なく、或は宿營狹隘且臭氣鼻を衝くが如き、不潔極まる人家に宿營し、又物資調達不能の爲め給養極めて粗惡なる等あらゆる困苦に堪へ、諸勤務に終始熱心精勵し、進撃に際しては、上司意圖の如く迅速機敏に行動し其目的達成に邁進したり。殊に十月廿日より開始せられたる、秋季樺川附近討伐に際し新城鎮南方三百米の濕地通過に當りては、大小行李並彈藥其の他兵器を兵力を以て運搬し、水深九十糎水流一米五十時恰も寒風肌を刺す中を、勇躍糒袴猿股となり幅二百米の河を數回往復し渡河運搬の任務を完ふし討伐の目的を達成せしめたるが如きは實に勇敢無比と謂ふべく、何れも其功績拔群なりと認めらる。

昭和十年二月廿五日より三月廿六日に亘り關東州測量班富錦附近の測量掩護の任務を完ふし、續いて、七星崗附近、李金圖子及寶講附近の討伐より、北境地區秋季討伐を經て、九月二十六日より、新屯附近の戰鬪開始されるや、川合一等兵

は饒河支隊配屬機關銃分隊三番射手として參加し、常に沈着剛膽能く適時適切なる行動に出で、敵の機先を制し猛烈なる敵の集中火も更に意とせず一意專心正確なる射擊を續行し遂に敵は各陣地の支へ難きを知り潰走するに至れり、一等兵は續いて退却する敵を猛射奮戰中敵彈下腹部を貫通せしも頑として尙も射擊を續行せんとするも重傷の爲め遂に堪ゆる能はず、「天皇陛下萬歲」を唱へ玆に壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり。其の功拔群なりと謂ふべし。卽日步兵上等兵に進めらる。

功に依り功六級金鵄勳章勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　大矢木傳英

大矢木傳英は千葉縣長生郡白潟村鷲の出身にして、昭和八年十二月一日、獨立守備步兵第七大隊第一中隊に入隊、直に滿洲事變に關する勤務に從事し、十二月十日より翌九年三月三十一日に亘り、共匪橫行する間島地區に於て、繁激なる教育の傍、京圖線の警備並間島地區の守備に服し、且屢々事件突發せる情況下に、酷寒を冒し、所有困難に堪へ、斥候巡察或は列車警乘、驛警戒等の諸勤務に任じ、終始一貫積極的に服務し、以て其任務を完全に遂行せり、殊に此間一月二十七日より三日間に涉り、討伐隊に送付すべき糧秣等輸送掩護隊として、六十餘輛の荷馬車を掩護し大荒溝口子に輸送せり、特に圖們、大荒溝口子間は常に共匪橫行し、危險なる地區なりしにも拘らず、警戒至嚴を極めたる爲め、匪賊をして一指だに染めしめず、完全に其任務を遂行せり、越へて五月三日小城子及石道河子附近の戰鬪を終て、九月八日石道河子附近の戰鬪に際しては、輕機銃手として參加し、延吉縣小城子西南方約三千米の地點に潛伏警戒せしに、午前十時三十八分同地東南方高地に約四十名の共匪を發見し、之を攻擊せんとするや、更に高地に約二十名の共匪を發見す、依て先づ西南方高地の敵を擊退し、直に反轉東南方高地上の敵に向はんせしも、地形不利を察し、附近滿人家屋を利用し、敵を誘致接近を計りたるに、敵は猛烈に喚聲を擧げて數米迄接近せり、玆に於て白兵戰距離內に誘致し、俄然敵中に飛込み難なく、敵を殲滅に歸せしめ、敵をして再度起つ能はざるに至らしめたり、次いで十月十日小城子警備中、敵匪約三千名市內に襲來したるを逸早く察知し、市內潛伏を計りつゝある該匪を求め、殆んど餘す者なく之を掃蕩し、人心動搖の兆ありしも、克く之を鎭撫し治安確保に貢獻せり、終へて十一月三十日に亘る間圖寧線警備に任じ、克く其任務を完ぶし、此間步兵一等兵に進めらる。

昭和十年一月以降四月三日に亘り匪賊接攘地帶たる圖寧線小三岔口、李樹溝附近の警備に任じ、克苦精勵以て、附近一帶の治安確保に貢獻せり、四月四日より十三日に亘り京圖線南方地區討伐に際しては、輕機銃手として、第三小隊に屬し和龍三道溝に先遣し金子討伐隊の討伐に策應すべく、百四坪、官地方南方地區に出動し、連日積極的活躍に依り、討伐の成果を容易ならしめたり、十月三日大荒溝奧地の戰鬪に活動して、馬團、海龍匪の根據地を覆滅し次いで、十月六日俊車廠溝の戰鬪に勇戰奮鬪し、以て中隊の討伐任務を容易ならしめ、秋季討伐實施せらるるや、殆んど勞を慰する閑なく、亦之に參加し、所有困苦缺乏に耐へ、勇敢且積極的に行動し、以て中隊をして其目的を完からしめたり、越へて十一年二月十一日明月溝——安圖守備隊間糧秣輸送自動車護衞兵として、安圖に向ふ途中、安圖縣小英子嶺上に潛伏待機七百、武裝共匪約八十名の襲擊を受け、敵は道路兩側高地の天嶺に地形の利と衆を倚み猛擊するに對し、我護衞隊は道路狹く又賴るべき地物なく、行動意の如くならず、且密林の爲め五十米以上を透視するを得ず、目標發見に頗る困難を來し我が態勢漸次不利に陷りたり、玆に於て、一等兵は齋藤一等兵と共に獨斷敵の中樞部たる右高地の敵陣に向ひ突進し、以て我軍の士氣を鼓舞し敵線に動搖を生ぜしめたり、之に勢を得たる我軍は一齊に前進し、以て敵を潰走せしめ、輸送物件に一指だも觸れしめず、却て多大の損害を與へたり、然るに突擊の際一等兵は胸部に兇彈を受け壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり、一

等兵の獨斷身を挺して突入し、友軍の士氣を振張せしめ、以て一擧に敵を潰走せしめたる、行動は實に一等兵の旺盛なる責任觀念と犧牲的精神の發露にして、武人の鑑として永く靑史に赫々たるものあるべし、卽日步兵上等兵に進めらる。

功に依り功七級金鵄勳章並勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　齋藤博文

齋藤博文は千葉縣山武郡南鄕村下橫地の出身にして、昭和八年十二月一日、獨立守備步兵第七大隊第一中隊に入隊、直に滿洲事變に關する勤務に從事し、十二月十日より翌九年三月三十一日に亘る、共匪橫行する間島地區に於て、繁激なる教育の傍、京圖線の警備並間島地區の守備に服し、屢々事件突發せる情況下に酷寒を冒し、所有困難に堪へ斥候巡察或は列車警乘、驛警戒等の諸勤務に任じ、終始一貫積極的に服務し以て其任務を完ふせり、殊に二月十日より二日間に亘り、討伐隊に送付すべき、糧秣等の輸送掩護隊として、十餘輛の荷馬車を掩護し大荒溝口に輸送せり、特に圖們大荒溝口子間は常に共匪橫行し危險なる地區なりしも、警戒適切なりし爲め、共匪をして一指だに染めしめず其任務を完全に遂行せり、越へて六月三十日大荒氣嶺地の戰鬪に乘馬兵として參加し、前哈螟塘北方約二粁の地點に於て、匪賊約五十名目下掠奪中なりとの情報に依り、急進之を攻擊するや、猛烈果敢に行動し、敵に大打擊を與へ直に潰走せしめ、中隊をして其目的を容易ならしめたり、六月二十九日より八月二日に亘り、夏季討伐實施せらるや、乘馬兵として參加し、常に勇敢機敏に斥候傳令等要務に當り、本討伐をして最有利なる効果を擧げしめたり、八月二十一日掩盤溝附近の戰鬪並に二十一日大北溝及小荒溝附近の戰鬪に參加し、小數の兵力を以て、數倍の敵を克く掃蕩し以て討伐の目的を遂行せり、此間步兵一等兵に進めらる。

十月二十七日より十一月二十日に亘り圖寧線東方地區の討伐に際しては、乘馬傳令として、常に率先難局に身を處し、以て、貢獻する處大なるものあり、次いで圖寧線警備を終へ、翌十年一月十一日より十七日に亘り、冬季討伐並に四月四日より十三日に亘る、春季第二期討伐に參加し、常に積極的活動に依り討伐の目的を達成せしめたり、越へて十一年二月十一日明月溝——安圖守備隊間糧秣輸送自動車護衛兵として、兒玉上等兵以下九名に小銃手として參加し、安圖に向ふ途中安圖縣小英子嶺上に潛伏待機せる武裝匪約八十名の襲擊を受け、敵は急峻なる坂路の兩側高地の天嶮に地形の利と衆を倚み、猛擊するに對し、我護衛隊は道路狹く又頓るべき地物なく、行動意の如くならず、且密林の爲め五十米以上透視するを得ず、目標發見に頗る困難を來し、我態勢漸次不利に陷りたり、玆に於て一等兵は傍にありし大矢木一等兵と共に獨斷敵の中樞部なる右高地に向ひ突進し、以て我軍の士氣を皷舞し、敵線に動搖を生ぜしめたり、之に勢を得たる我軍は一齊に前進し以て敵を潰走せしめ、匪敵をして輸送物件に一指だも觸れしめず、却て多大の損害を與へたり、然るに突擊の刹那一等兵は腰部に二彈を受けしも、更に屈せず前進中再胸部を貫通せられ、玆に壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり、一等兵の獨斷身を挺して突入し友軍の士氣を振張せしめ、以て一擧に敵を潰走せしめたる行動は實に鬼神も泣かしむべく、一等兵の犧牲的精神の發露にして、武人の龜鑑として永く靑史を飾るべし、卽日步兵上等兵に進めらる。

功に依り功七級金鵄章並勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　津田義盛

津田義盛は、鹿兒島縣姶良郡福山町佳例川の人にして、昭和九年十二月八日獨立守備歩兵第二十大隊第二中隊に入隊し同日鐵嶺に到着して事變勤務に從事し、初年兵教育を受けつつ衛兵巡察等の勤務に服し、次で新設大隊編成並に移駐準備に關する業務に從事して精勵し勤勞尠からず。翌十年四月十四日中隊と共に海林に移駐し、濱綏線の警備を擔任し、僅少兵員と共に巡察斥候衛兵傳令等重要なる勤務に服し、該地附近の治安維持に貢献せる所多大なり。以上の功績優秀なりと認めらる。

同十年五月下旬より六月下旬に亘りては、中谷討伐隊長の指揮に屬して、大海浪河孟の討伐に參加し第二獨立守備及び第三師團の春季討伐に協力す。義盛此の間機關銃小隊第二分隊に屬し、分隊長を輔佐しつつ各地の討伐掃蕩を行ひ戰功あり。同年六月三十日より七月三日に亘れる蛤蟆塘附近の戰鬪に際しては築島小隊の乘馬分隊として之に參加し、勇敢機敏に動作して敵を攻擊し、又同年九月十日豆美溝附近の戰鬪には能く分隊長の命に樅ひて奮戰し、又九月二十六日より十一月一日に亘りては依蘭縣蓮花泡附近に出動し、王藤武匪約百を擊退し、永岡騎兵曹長の指揮下に乘馬追擊を行ひ、敵の副頭目以下十一名を殪したり。以上の功績優秀と認められたり。

同年十一月二日依蘭縣小百順溝附近に於て趙尚志李華堂滚地雷の合流匪約六百と遭遇し之を攻擊するに方り、義盛は乘馬手馬兵として分隊長の命に從ひ敵彈の飛來頻りなるため狂奔せんとする多數の手馬を巧に制御誘し、殊に手馬に向て敵匪二三十の襲來を受くること一再に止まらざりしも、自ら銃を執り淺井上等兵と協力し皆之を擊退したり。然るに敵の一部は地形を利用して手馬の位置に近接し蔭蔽したる地點より義盛に向て狙擊を爲したるため義盛は胸部を貫通せられて遂に名譽の戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

義盛性質溫順にして氣概あり。特に軍務に精勵して成績優良、上下皆其戰沒を惜しみたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　松田秀雄

松田秀雄は、東京市向島區寺島町八丁目の出身にして、父を信一、母をミスと云ひ、大正三年五月八日生なり。昭和四年寺島第一高等小學校を卒業し、昭和九年十二月一日獨立守備歩兵第四大隊第三中隊に入隊し軍事訓練を重ねつつ、滿洲事變に關する業務に從事し精勵にして功績あり。翌十年二月本溪縣下に於ける匪賊討伐に際し、光川小隊輕機關銃分隊射手として之に參加し、黃錫山朱海樂等の匪賊を掃蕩し、次で二月二十日以降東部三角地帶の討伐には趙慶吉苗匪を索めて各所に追及し、以上の功績顯著と認めらる。

同十年四月下旬より五月中旬に至る間、東邊道夏季討伐に方りては、光川小隊の井上輕機關銃分隊射手として之に參加

し、五月一日桓仁縣瓦子溝附近、同月五日蘿菜溝附近の戰鬪に於て勇敢に動作し、沈著正確なる射擊を以て敵に損害を與へ、又五月十三日頭道溝附近の戰鬪に參加して殊勳を奏したり。即ち此日秀雄光川小隊に屬し、午前十一時三十分最前線たる井上輕機關銃分隊射手として敵を攻擊す。敵は兵力の優勢を恃み、且天險に陣地を占領したる敵は、自動火器の威力を發揮して攻勢に轉じ、我に向て突擊し來りたり、秀雄分隊長の指示に從ひ沈著豪膽敵の接近を待ち我が前方十數米に到達したる時、急劇なる猛射を浴せたれば敵匪の斃るゝもの多く、遂に反轉潰走したり。然れ共此の激戰間秀雄も亦敵彈の爲頭部に貫通銃創を被りて壯烈なる戰死を遂げたり。秀雄殪るゝも尚ほ銃把を確く握りて之を放たず、其の最後に於ける勇敢なる動作は大いに小隊の士氣を皷舞し、東邊道に猛威を逞うせる楊司令の輩下たる匪群の跡を絶たしむるに至るの因を作したるものと謂ふべし。功績拔群と認められ、即日歩兵上等兵に進められ、後日左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

秀雄性資溫厚篤實にして氣慨に富み、責任觀念旺盛なり。入營以來特に軍務に精勵して成績優良、上下の信用淺からず皆其の戰歿を惜み深く之を哀悼したり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　加藤照雄

加藤照雄は愛知縣春日井郡小牧村大字小坂の出身にして、昭和九年十二月一日歩兵第六聯隊留守隊に入營、同十一日滿洲派遣の爲め名古屋出發、同十八日國境通過同二十日綏芬河に到着す、其間十二月一日入營と同時に編成改正業に當り、兵器被服の受領整理或は諸物品の梱包發送其他繁雜なる劇務に、晝夜兼行熱心精勵し以て之が進捗を容易ならしめ、其輸送間荷物の搭載卸下に或は列車及船内に於ける警戒に任じ、精勵以て輸送業務を滯なからしめたり、綏芬河に到着するや、直に該地附近の警備に任じ、猛烈なる初年兵教育訓練を受けつゝ、繁激なる警備諸勤務に精勵努力中、同二十三日不幸病に犯され直に入院、後哈爾賓衛戍病院に收容加療中翌十年七月十二日遂に病歿するに至たり、即日歩兵上等兵に進められる、出征後日尚淺く病魔の爲め斃る惜みても餘りありと謂ふべし。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　平川貞次

平川貞次は、佐賀縣杵島郡龍王村大字深浦の人にして、父を鹿一郎、母をスギと云ひ、大正三年八月二十六日生なり。昭和四年三月藤津郡久間村尋常高等小學校高等科を卒業、後家事農に從ひて精勵なりしが、昭和九年十二月獨立守備歩兵第十大隊第四中隊に入隊し、梨樹溝に在りて滿洲事變の業務に從事せしが、十年三月二十九日奉門に移駐し、同地の警備に任じ、衛兵斥候巡察等の要務に服して刻苦精勵其任を完うし、功績顯著なるものと認められたり。

昭和十年五月四日より七日に亘れる羅圈背附近の戰鬪に際しては、機關銃を有する約百五十の匪賊と對戰中なる縣警察隊を應援し、松花江中洲に於て柳樹の林綠を巧に利用して陣地を構成して頑强に抵抗せる敵を攻擊し、遂に之を擊破したるが、貞次本戰鬪に於て第一分隊小銃手として勇敢機敏に動作し、戰友を激勵しつつ奮戰し、其の功績を認めらる。次で同年八月十八、十九兩日船廠窩舖の戰鬪に於ては中隊の主力と共に匪賊數百を攻擊せるが、敵匪は堅固なる圍壁に據りて頑强なる抵抗を爲し、激戰十七時間の後敵は多數の死體を遺棄して西方に潰走せり。本戰鬪に於て貞次は機關銃手として

敵の猛火を冒して奮戰中、敵彈のため左大腿部に貫通銃創を受けたるも之に屈せず、尙ほ戰鬪を繼續せしが、分隊長の命に依り後退して傷所の手當を受けたり。以上の功績優秀と認めらる。

同十年十月四日加藤討伐隊（小銃二分隊輕機關銃二分隊機關銃一分隊重擲彈二分隊）は老古溝附近に於て匪首占江南保國九州九江好の合流匪約百三十名を攻擊す。敵は有利なる制高の陣地を占領して頑强に抵抗し、小隊長以下奮戰二時間にして之を擊退し、敵は死屍六を遺棄して退却す、貞次機關銃分隊に屬し、猛烈なる敵彈を冒して有利なる陣地に就き敵匪を猛射し次で追擊に移りたるが、此の時敵の一彈は貞次の左胸部に命中し、遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て卽日步兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉を授け賜はりたり。

貞次性質溫順にして剛勇、父母に至孝弟妹に友情を盡し、老を敬ひ下を惠み、美事善行少からず、鄕黨以て模範的靑年となし之を敬愛せり。入營の後は特に軍務に精勵にして成績優良、上下の信賴厚かりしが、終に戰場の華となりて散りたるは眞に惜しむべし。貞次一度戰傷のため新京衞戍病院に入院せしも、三週餘日の加療に依り治癒退院し、續いて各地に勇戰し、再度の戰傷は重くして遂に壯烈なる戰死を遂ぐ悼しい哉。然れ共軍人の本分を完了し、芳名は千歲に芳ばし、貞次以て瞑すべきなり。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　星野甲次

星野甲次は栃木縣足利郡名草村字中屋敷の出身にして、昭和九年十二月一日步兵第六十八聯隊留守隊に入營、同日第十一中隊に編入、十二日勇躍征途に就き、十九日原隊駐屯地たる拔河に到着し、直に猛烈なる敎育訓練を受け軍力の充實を期しつゝ、附近警備に任じたり、十年四月二十四日中隊は平陽鎭に移駐す、當時同市街及附近には通匪者及不穩分子多數潛在しありて、寸時も樂觀を許さず、殊に平陽鎭——梨樹鎭道は匪賊の橫行絕へず、斯かる狀況下に於て至嚴なる警備に或は峻烈なる掃蕩任務に參加し、常に不撓精勵以て、克く目的遂行に貢獻する處多大なり、其間步兵一等兵に進級す、然るに、該地方の掃蕩未だ全からずして治安の確立を見る能はず、玆に於て十二月二日より第二次討伐前後に引續き實施せられたり、一等兵は肌を刺す如き醜寒をも意とせず危險に身を挺し、衞兵に警備に或は連絡の任に當り續いて三月十五日より四月十五日に亘る北鐵接受俺護並春季討伐に又九月二十七日より十一月二十八日に亘る、秋季討伐に夫々參加し衞兵巡察連絡等繁劇なる勤務に任じ、熱心奮鬪を續け、以て其任務の達成に邁進せり。玆に於て掃蕩其効を奏し、敵匪は金廠溝附近に逃亡し其數百十數に達すとの情報に接し中隊は之が全滅を期し、大隊命令に基き一月二十九日金廠に向け出動し翌三十日前川中尉をして部下小隊及第二小隊を併せ指揮せしめ、金廠南方地區に於ける該匪の情況を搜索しつゝ前進し敵情偵察を終へ、愈々攻擊開始せられたり、一等兵は當時第一小隊石原分隊に屬し、搜索隊右火線として敵の左側方面より猛烈果敢に擊進し敵に多大の損害を與へたり、戰愈々進展するや、一等兵の屬する分隊は轉じて右翼に散兵し敵に猛擊を

加へつゝありしが、敵は遂次兵力を増加し、我右翼方面に近迫したるに依り、勢ひ衆寡敵せず頗る苦戰に陷入れり、此時一等兵は命に依り右火線田中分隊に加入し、最右翼にありて勇奮近迫せる敵數名を射殺する等我攻擊猛烈を極めしも、敵の火力は依然熾烈なり。一等兵は此集中火を受け不幸左側胸部に盲管銃創を受けたるも滿身奉國精神に燃ゆる一等兵は更に屈せず敢然射擊を繼續し敵の火線侵入を阻止し遂に之を擊退するや鼓に精魂盡き壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり。

此の戰鬪に於て我に三倍する敵の攻擊を受け、寡兵を以て能く之に當るや、小隊散兵として率先最後迄奮戰力鬪し戰果を有利に導きたる一等兵の功績たるや實に偉大なるものありて永に戰史に燦然たるものあるべし、即日步兵上等兵に進めらる。

功に依り金鵄勳章功七級並勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍步兵上等兵勳八等　村松本立

村松本立は靜岡縣磐田郡廣瀨村神增の出身にして昭和十年十二月一日步兵第十八聯隊に入營同月十四日滿洲派遣の爲め屯營出發、同二十四日方正に到着す、其間出動準備を完ふし、輸送に際しては荷物の搬送搭際卸下、並船內不寢番又は列車內警戒兵として献身的努力を以て克く其輸送業務を完ふせしめたり、駐屯地に到着するや、直に依蘭地區の警備に任じ醜寒を冒し教育訓練の傍ら、繁激なる警備諸勤務に精勵しつゝありしが、十一年三月四日不幸病に冒され佳木斯衛戍病院に入院鋭意加療の甲斐なく翌五日病急變遂に病歿するに至れり、即日步等兵に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

陸軍步兵上等兵勳八等　村瀨八朗

村瀨八朗は愛知縣名古屋市西區技鄕町の出身にして步兵第六聯隊服務中、昭和九年三月十七日編成下令同日第二中隊に編入せられ、同四月九日滿洲派遣の爲め名古屋出發同十七日綏芬河に到着す、其間渡滿準備に當り兵器被服の受領整理並梱包搬送等に精勵し以て其準備を遺憾なからしめ、又輸送に際しては荷物の搭載卸下及船車內の嚴戒勤務に献身的努力し以て輸送業務を滯滯なからしめたり、駐屯地綏芬河に到着するや、氣候風土異なる地域にありて步哨斥候又は巡察等に精勵し、或は兵營周圍の陣地構築等繁激なる諸勤務に日夜奮鬪努力し以て警備任務達成に邁進せり、四月三十日より五月六日に亘り、近藤特務曹長の指揮する鐵道敷設掩護小隊に加はり、平房附近に出動し、偷安を許さゞる四圍の情況下にありて日夜警戒勤務に努力し、五月十二日より葛西少尉の指揮下に入り、步哨巡察等繁激なる掩護勤務に奮鬪努力中、不幸にも五月十六日病に冒され、被河衛戍病院に入院の止むなきに至り、爾來鋭意加療中五月二十六日病急變し遂に病歿するに至れり、即日步兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

陸軍步兵上等兵勳八等　馬淵清

馬淵清は愛知縣名古屋市東區裏筒井町の出身にして步兵第六聯隊服務中、昭和九年三月十七日編成下令、四月一日第一機關銃中隊に編入せられ、同九日滿洲派遣の爲め名古屋出發豆滿江經由同十七日綏芬河に到着す、其間編成に當り兵器

被服の受領返納整理等に精勵し編成業務の進渉を容易ならしめたり、又輸送に際しては馬匹及荷物の搭載卸下に或は船車内の警戒等諸勤務に献心的努力以て輸送業務を完からしめたり、駐屯地綏芬河到着するや、直に該地附近の警備に任じ、國際的に複雑なる滿蘇國境に於て跳梁常なき匪賊を四圍に控へ、之が討伐に或は地形偵察掩護に、又糧秣監視、列車警乘等常に繁激なる各勤務に精勵せり、特に四月三十日より五月一日に亘り輕便鐵道敷設掩護の爲め大平嶺に出動し又五月十二日より六月十三日に亘りては穆稜部隊との連絡並に道路偵察の爲め三道崗方面に出動し、連日各地を馳驅し所有困難を冒して常に卒先難局に當り積極的行動に依り克く其任務を完ふせり、七月五日より九日に亘り小綏芬河附近討伐には木村小隊第二分隊銃手として之に參加し、各地匪賊の掃蕩を實施し治安維持に貢献する處あり、殊に七月八日小綏猛河北方約十五粁の地區に於ける匪賊の巣窟攻撃に際しては克く分隊長の指揮に從ひ、勇猛果敢に奮戰し敵の根據を覆滅し再起不能ならしめたり、又八月九日より十三日に亘り金廠寒葱河附近の討伐には、荻野部隊機關銃中隊指揮班要員並に馭兵として之に參し、各地の地誌調査並に治安工作に寄與する所大なるものあり、殊に八月十三日寒葱河東北方約二粁の地點に於て、匪賊を攻撃するや、指揮班員として所有危險を冒し各種連絡に任じ終始一貫積極的に行動し以て本戰鬪をして有利ならしめたり、次いで十月十三日より東寧及穆稜縣下秋季大討伐實施せらるるや、北鐵沿線警備並に國境封鎖隊として綏芬日河に位置し其間衛兵巡察連絡等繁激なる諸勤務に精勵し以て克く其任務を完ふせり、然るに不幸十月十七日病の爲め綏芬河分院に入院の止むなきに至り、後内地還送廣島衛戍病院に收容鋭意加療中十年六月二十六日病急變遂に病歿するに至れり即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　大塚福次

大塚福次は岐阜縣土岐郡土岐町の出身にして、歩兵第六十八聯隊服務中、昭和九年四月一日編成下令、同日歩兵砲中隊に編入せられ、同十一日滿洲派遣の爲め岐阜出發、十八日掖河に到着す、其間出動準備に精勵之を完ふし、又輸送に際しては荷物の搭載卸下及船車内の警戒等諸種の業務に献身的努力し以て輸送業務をして遺憾なからしめたり、掖河に到着するや、直に該地附近の警備に任じ、衛兵巡察斥候間繁激なる警備諸勤務に精勵せり、六月七、八兩日に亘り、磨刀石附近の匪賊討伐實施せらるるや、指揮班として各部隊間の連絡に任じ、酷暑を冒し泥濘雜路と闘ひつゝ、危險を顧みず疲勞困憊更に意とせず、連絡を確保し砲隊をして其機能を最高度に發揮せしめ、以て治安維持に貢献する處大なるものあり、次いで七月十二日より二十日に亘り、海林附近の討伐に際しては砲隊は該地附近の直接警備に任じ、小銃分隊として、連日連夜衛兵に直接警戒巡察等各種の警備勤務に積極的活動し、克く其任務を完ふせり、而して爾來梨樹鎮警備中不幸にも九月一日、病に冒され、梨樹鎮分院に入院、後内地還送の上鋭意加療中十年四月六日病革まり遂に病歿するに至れり、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　佐藤弘

佐藤弘は愛知縣名古屋市中區小針町の出身にして、歩兵第六聯隊服務中、昭和九年三月十七日編成下令、同日第九中隊

に編入され同九日滿洲派遣の爲め名古屋出發、同十九日東寧に到着す、其間出動準備諸勤務に精勵し以て之を完ふし、輸送に際しては船車内の警戒は勿論荷物の搭載卸下に至るまで、献身的努力を以て服務し、輸送業務をして遺憾なからしめたり、東寧に到着するや該地附近の警備に任じ、四月二十五日より五月二十三日に亘り、炊事當番として服務し、物資不足單一なる材料なるに拘らず能く創意工夫して給養を豐富ならしめる等努力せり、五月二十四日より六月十六日に亘り、鐵道第三聯隊鐵道建設掩護の爲め、竹下小隊と共に河沿に派遣せらるるや、人員僅少なるに抱らず、日夜積極的行動に依り克く其任務を遂行し、次いで六月二十三日より七月五日に亘り、東寧南方約六〇粁白刃山子附近に於ける、三角側測量班掩護に出動し、匪情穩ならざる情況下に於て嶮峻なる山岳地帶を踏破し奮鬪努力至嚴なる警戒裡に克く掩護の任務を完ふせり、而して再び東寧附近の警備に精勵中、不幸七月十九日病に冒され披河衛戍病院に入院爾來鋭意加療中九月二十四日病急變し遂に病歿するに至れり、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　北村重一

北村重一は岐阜縣加茂郡坂祝村酒倉の出身にして、昭和九年十二月一日歩兵第六十八聯隊第三中隊に入營、同十二日滿洲派遣の爲め屯營出發、同十九日披河に到着す、其間出動準備を完ふし、輸送業務の完成に貢献し、披河到着の日より直に該地附近の警備に任じ、猛烈なる教育訓練を受けつゝ、警備勤務に精勵せり、三月二十一日より四月七日に亘り、春季討伐實施せらるるや、第一小隊第三分隊に屬し之に參加す、當時恰も解氷期に入り泥濘膝を沈する難路を冒し、穆稜――勃利――依蘭縣境附近の山岳重疊嶮峻を踏破し、各地に勇戰奮鬪し以て討伐の目的を達成し、治安維持に貢献する處大なるものあり、續いて四月二十六日より二十九日に亘り、長春保附近の討伐に際しては、所有困難に堪へ士氣益々旺盛にして常に積極的行動に依り克く其任務を完ふせり、次いで五月二十五日寧安支隊編成せらるるや、第一小隊第三分隊列兵として寧安延吉縣下に出動し、連日連夜敵匪を追ふて人跡未踏千古斧鉞を入れざる密林を踏破し、泥濘馬背に及び濕地を跋渉し、各地を掃蕩し以て治安確立に邁進せり、殊に五月二十九日高麗井附近に於て、約百の匪賊と遭遇し之を攻擊するや、交戰約一時間半にして敵に多大の損害を與へ敗走せしめたり、其功績頗る偉大なるものあり、然るに不幸にも六月八日病に冒され披河衛戍病院に入院爾來鋭意加療中六月十九日病革まり遂に病歿するに至れり、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　近石照市

近石照市は、香川縣仲多度郡七箇村大字七箇村の人にして、昭和十年一月二十日現役兵として歩兵第十二聯隊に入隊、同年二月一日獨立歩兵第十二聯隊へ編入せられて、二月十九日山海關に到着せり。是より曩き獨立歩兵第十二聯隊の編成並に其後に於ける海陸長途の輸送間は、各種の業務に從事し、上官の命に從ひて精勵し、山海關到着の後は、直に同地の警備に任じ、酷寒を冒し、或は要地の哨兵となりて夜を徹し、又は巡察に服して晝夜の別なく危險地帶に出入來往し、常に至嚴なる警戒勤務に服して刻苦精勵其任務を完うしたり。以上の功績優秀と認めらる。

同十年四月十九日夜山海關北方約六里鐵廠堡附近の匪賊を討伐するに方り、照市は機關銃第二分隊の一番銃手として敵

彈雨飛の下を潜りつゝ所命の地點に銃を据へ、迅速機敏の動作を以て銃に裝塡し、敵に猛射を加ふるや、射彈正確、忽ち敵に大損害を與へ敵匪震駭す、此時不幸敵の一彈は照市の顏面に命中し壯烈なる戰死を遂ぐ。然れ共この勇猛なる犧牲的行動は痛く分隊全員の士氣を鼓舞し、一同奮然として攻擊前進に移り遂に敵を潰走せしめたり。昭市功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後日左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

照市父を直太、母をリカと云ひ大正三年十一月廿六日生なり。昭和二年三月鄉里に於て小學校を卒業し、後農業に從事せり。性質溫順にして氣概に富み、責任觀念旺盛なり。特に義俠的精神强く、他の爲め進んで難事に當ること稀ならず、昭和九年九月大阪市に於て大水害の際、溺死せんとする兒童二名を救助して表彰せられたり。入營以來軍務に精勵して成績優良、常に衆兵の模範とせられたり。四月二十四日陣中に於て照市の爲慰靈祭を行ふ、關東軍司令官守備隊司令官始め各團隊の長官隊長等弔電弔詞を捧ぐるもの多數、弔旗花輪等數十個に達し實に稀なる盛儀なりき。照市勇名を永く竹帛に垂れ、護國の神と祭らる、男兒の本懷にあらずして何ぞや、以て瞑すべきなり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　杉山軍次郎

杉山軍次郎は靜岡縣富士郡今泉村の出身にして、大正四年九月二十六日を以て生れ、父を作次郎母をマツと云ひ、昭和三年三月今泉村尋常高等小學校を卒業し、後同九年一月廿日現役兵として歩兵第三十四聯隊第六中隊に入隊、三月二十九日第一期教育終了、同四月一日編成下令、同十八日滿洲派遣の爲め屯營出發、十九日敦賀港出帆二十二日清津港上陸同日國境通過二十四日哈爾賓に到着し、四月二十七日より翌十年五月二十一日に亘り、一面坡警備に任ず、此間第一小隊第四分隊に屬し、到着以來長途輸送の疲勞慰する暇なく、日夜繁激なる警備諸勤務に精勵し、又屢々附近の討伐に出動する等、寧日なく常に積極的に活動を續け以て克く其任務を完ふせり、其間五月八日より十四日に亘り延壽縣匪賊討伐實施せらるゝや、新井小隊第三分隊に屬し參加す、時恰も連日降雨激しく、道路極めて險惡にして、行動頗る困難なりしにも拘らず、杉山は常に士氣益々旺盛にして、克く分隊長の意圖の如く、勇敢機敏に行動し、討伐任務達成に貢献する處大なるものあり、次いで六月一日より四日に亘り珠河縣西南部地方匪賊討伐に際しては、第一小隊第二分隊小銃手として、連日長途の難行軍に、警戒斥候連絡兵、及大行李の護衛兵等

に、專心努力し以て克く其任務を完ふせり、又七月十二日より八月三十一日に亘り烏吉密河に分駐し、連日連夜巡察衛兵並に鐵道沿線の警戒に努力し、又數次の示威行軍に參加する等、常に萬難を排し其任務達成に邁進せり、十月一日より十五日間珠河延壽縣の討伐に參加し、興隆屯東北方板石河附近に於て約四百の匪賊と遭遇し直に之を攻擊するや第一小隊中央火線分隊として、勇猛果敢に活動し交戰約二時間に渉り、遂に敵を潰走せしめたり、其功績偉大なるものあり、十月十九日より珠河五常縣地方の討伐に出動するや、連日十數里の雜行軍に更に屈せず、一面坡西南方約十五粁金沙河北方高地附近の戰鬪には、敵匪を追擊すること約四粁に亘るも、士氣益々旺盛、克く分隊長の意圖の如く行動し、又搜索斥候連絡兵歩哨等常に積極的行動に終始し、其貢献する處實に大なるものあり、十月十六日より約旬日に亘り葦河縣地方の討伐に偉功を奏し、十一月五日より烏吉密河賓縣地方討伐開始せらるゝや、服部小隊第二分隊に屬し、村落の掃蕩或は尖兵側衛等路上警戒斥候及部隊間の連絡兵に、又は大行李の掩護兵として、日夜危險を冒して酷寒と鬪ひ、連續九日間、疲勞困憊其極に達せしも、更に屈せず、奮鬪努力し以て討伐任務達成上寄與する處大なるものあり、然るに十二月廿七日不幸病に冒かされ哈爾賓衛戍病院に收容せられ、翌十年五月二十二日內地送還、留守隊第一中隊附となり加療中、八月十八日兵役免除となり、後十一月三十日病革まり遂に歿するに至れり。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　坂井義雄

坂井義雄は、神奈川縣横濱市中區井土ケ谷町大字高免の人にして、昭和九年十二月歩兵第三十八聯隊留守隊に入隊し、同月十五日屯營出發、同月二十一日齊々哈爾に到着、直に同地警備勤務に服しつゝ初年兵としての訓練を重ね、酷寒を冒して時々衛兵巡察等に服し刻苦精勵にして功績少からず。翌十年三月初年兵第一期教育を終了の後は中隊主力と共に齊々哈爾南兵營に駐屯し、引續き同地の警備を續け、刻苦精勵にして以上の功績優秀なるものと認められたり。

同十年五月十四日以降第二獨立守備隊の春季討伐に依り、聯隊主力出動するに方りては義雄中隊指揮班の一員として之に參加し、約四十日に亘りて吉林省京圖線沿線並に拉濱東方地區の討伐を行ひ、大密林大濕地を過ぎ嶮峻なる山地を越へ殆んど不休の狀態を以て奔走奮勵し、常に率先難事に當り決して勞苦を辭せず。同年六月下旬より七月下旬に亘りては、同隊の夏季討伐として舒蘭縣四道滴達に分駐し、近傍各地の掃蕩に出動すること數回、其の他糧秣輸送患者護送、集團部落建設設計並に假兵營改築の補助等に服し、又附近の治安肅正に盡瘁し、其功績も亦優秀なるものと認められたり。

同十年九月一日以降、秋季討伐に方りては、東曾家船口に分駐し、九月十四日伊藤小隊に屬して楡樹縣大干屯に移駐し爾後連日寢食を廢して匪賊の搜索掃蕩に從事し、同月二十五日夜は、東三道溝に在りし敵匪約四十を夜襲し、之に大なる損害を與へて兵器彈藥若干を鹵獲したり。越へて同月二十九日早朝大干屯西北地區より南下中の匪賊を攻擊する爲め、伊藤小隊長の指揮を以て午前五時四十分出發、西北臺端に於て敵の一部を擊退し、之を追擊し下旬子に於て猛擊を加へ、再び之を追擊して松花江支流を渡り細き柳楊雜草等の參差繁茂しある中洲の內を前進中背進し來れる約四十名の匪賊と衝突僅に六十米を隔てゝ交戰し、奮戰猛鬪敵に大なる損害を與へたるが、敵彈を腹部に受けて遂に名譽の戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

義雄性質溫順にして氣概に富み、責任觀念旺盛なり。入營以來軍務に精勵し、特に長上を敬ひ、同僚間の交際圓滑にし

て、上下の信用淺からざりしが、遂に戰場の華と散りたるは洵に惜むべきなり。特に其の冥福を祷る。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　南雲正芳

南雲正芳は、新潟縣中頸城郡高士村大字北京田の人にして、昭和九年十二月一日現役志願兵として獨立守備歩兵第二大隊第二中隊に入隊し、撫順守備隊に在りて初年兵教育を受けつゝ撫順線及奉吉線鐵道守備並に其他の警備勤務に服し兵匪便衣隊等の策動多き中に在りて恪勤精勵し、又時々近傍各地の討伐掃蕩に出動し、又は示威行軍等に參加し、酷寒を冒し又炎暑に堪へ半歲餘の長日月間、刻苦精勵一日の如く中隊の警備任務達成上貢献する所甚大なり。以上の功績優秀と認めらる。

同十年七月中旬より同年九月末日に亘り夏季東邊道討伐に方りては、鈴木討伐隊に屬し、鈴木小隊第二分隊小銃手として之に參加し、炎熱燒くが如き炎天下に於て連日に亘り匪賊の討伐掃蕩に從事し、殊に九月十日涼水泉子北方に於ける戰鬪に於ては敵火の下に於て嶮峻なる谷地を行動し、勇敢に敵を攻擊して遂に之を擊退し、同年十月一日以降秋季東邊道討伐に際しては、木村小隊第三分隊に屬し、古來斧鉞を加へざる大密林地帶を行動して猛烈なる紅軍匪の根據地殲滅を企圖し、或は尺餘の積雪を踏みて、連夜露營に僅少時間の休憩を爲し、幾多の困缺に際會するも常に元氣旺盛にして西南岔附近一帶に於ける紅軍を掃蕩肅正して本討伐の目的を達成したり。以上の功績も亦優秀と認めらる。

同十年十二月一日以降は冬季東邊道討伐として八道江に位置して、同地附近の掃蕩を行ひたりしが當時大板石溝正岔附近には紅軍自衛隊其他の合流匪約四百蟠居して勢稍々猖獗、八道江を襲擊せんとしつゝあるものゝ如し、此に於て八道江駐屯部隊はこの匪群を擊滅する目的を以て歩兵二小隊に滿洲國軍警を併せ約百三十名を以て尺餘の積雪を踏み零下二十五度の酷寒を冒して十二月十一日午前十一時半八道江を出發せり。次で午後一時頃禪襠溝高地に達し同地に陣地を占領しありし敵匪の第一線陣地を攻略し、第二線陣地の攻擊に移るや敵線よりの射擊漸次盛となり、殊に我左前方山腹に點在せる二三の獨立家屋より猛烈なる側射を受けたり。此に於て小隊長は第三分隊並に輕機關銃分隊をして該家屋の敵に向て攻擊を命ずるや、正芳第三分隊小銃手として敵彈雨飛の下を滑りて率先、手榴彈を投じつゝ敵に肉薄し、遂に此敵を擊退し、小隊も亦敵の第二線陣地を奪取し、次で敵を追擊中正芳敵彈のため頭部に貫通銃創を被り、遂に名譽の戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

正芳性質溫順にして剛勇、入營以來特に軍務に精勵して功績優良なりき。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　三上高尾

三上高尾は東京市深川區平野町一丁目の人にして、昭和九年十二月五日現役兵として獨立守備歩兵第十三大隊第三中隊に入營し、同日より綏化に在りて同地附近の警備に任じ、鐵道守備近縣各地に向てせる示威行軍或は治安工作に從事して勤勞多かりしが、翌十年三月三十日、三十一日兩日張繼屯驛の西北方小閻家窩堡に於て明利老來好の率ゆる合流匪約五十を攻擊せるが、敵匪は村落の圍壁を利用して頑强に抵抗したり。此の時高尾第一小隊第一分隊に屬して終始勇敢に敵を攻擊し、率先敵に肉薄して之に猛射を加へ、多大の損害を與へて遂に之を擊退したり。以上の功績優秀と認めらる。

同十年四月より七月に亘り、依然綏化附近の警備に任じたりしが、七月六日六道崗附近の戰鬪に方りては乘馬小隊に屬し、擲彈手として之に參加し、敵の占據せる圍壁の前方約七十米なる廟の側に位置し、小隊長の命に依りて圍壁内に手榴彈を投擲し、其彈着正確にして敵を震駭せしめたるが、暫くして自己携行の射彈全部を射耗したり。此に於て高尾は敵彈雨飛の下を潛りつゝ小銃手の携行せる手榴彈を集め、之を投擲して敵に大なる損害を與へたりしが、又もや射彈を投擲し盡したり。此時敵前僅々五十米に追接しあり敵彈雨霰の如く、全く遮蔽物なきを以て、一歩の移動をも困難とする狀態にありしが、熱烈燃るが如き高尾は忽ち身を躍らして疾驅し、第一分隊並に手馬の位置に就きて手榴彈を集め、再び前位置に至らんとして前進中、西南角望樓より狙撃を受け、鐵帽と共に頭部を貫通せられて戰死せり。功績拔群を以て、即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

高尾性質溫順にして剛勇なり、入營以來特に軍務に精勵して成績優良、特に長上を敬し同僚間の交誼厚く、上下の信用淺からざりしが、遂に戰場の華と散りたるは洵に惜むべし、特に其瞑福を禱る。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　富澤正太郎

富澤正太郎は埼玉縣北足立郡白子村大字白子の人にして、昭和九年十二月一日現役兵として獨立守備歩兵第八大隊第三中隊に入營し、威虎嶺に在りて滿洲事變に關する業務に從事しつゝ初年兵としての軍事訓練を重ね、此の間衛兵巡察其他の重要任務に服し、又近傍各地に出動して匪賊の掃蕩に從事し、常に分隊長の命令に從ひて勇敢に動作し、又進んで雜事に當りて勞苦を事とせず、以上の功績顯著なるものと認められたり。

同十年四月十五日威虎嶺西方約十二吉なる沙河掌附近の戰鬪に際しては、大武小隊の輕機關銃手として之に參加し、密林中に於て敵匪と遭遇するや、克く分隊長の意圖に從ひて機敏に動作し、迅速に火線を構成して敵に猛射を浴せ、遂に之を撃破したり。又五月四日より同月十四日に亘りては、五月二日哈爾巴嶺附近にて列車を襲撃せし匪賊團を追躡し、山岳密林濕地等の參差せる地形に於て連日連夜の行動を爲し、敵匪は遂に四散し、被拉致人民を解放するの止むなきに至らしめたり。次で同年五月二十九日中隊と共に梧松拉子溝に於て約百二十の匪賊を撃破し、爾後約半年間威虎嶺に在りて同地の警備並に鐵道守備に任じ、勤勉一日の如く常に熱誠なる服務に依り、其の與へられたる任務を完全に遂行せしが、翌十年六月下旬より九月末に亘りては穎穆索に分屯して同地の警備に任じ、同年八月下旬は哈爾巴嶺南方地區の討伐に方り、川名小隊第四分隊輕機關銃手として之に參加し、八月二十二日廟嶺附近に於て約四十の匪賊を撃滅し、九月十三日は柳樹屯附近に於て敵匪約百三十を攻撃し、敵を猛射して一時彈藥缺乏を告げたるも、勇戰敵陣地に突撃し、遂に之を撃退したり。以上の功績も亦優秀なるものと認められたり。

同十年十月一日より秋季討伐として穎穆索地區を討伐掃蕩し、酷寒を冒し嶮峻を越へ、幾多の困缺に堪へつゝ連日連夜の行動を爲したるが、十一月五日青溝子南方約三吉附近に於て約二百の敵匪と衝突するや、機敏に動作して迅速に有利なる陣地を占めて敵に猛射を加へ、大損害を與へたりしが、敵は衆多と地形制高の利を占めて逐次我を包圍し、飛彈雨の如し。正太郎更に屈せず毅然として身を挺し、尙も敵に猛火を浴せつゝ奮戰是れ勉めたるが、偶々敵の一彈は頭部を貫通し遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進あられ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

正太郎性質溫良にして剛勇なり、入營以來特に軍務に精勵し、其の成績優良なりき。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　森下隆

森下隆は、京都府天田郡川合村字大原の人にして、鄉里の小學校卒業の後は、家事農に從ひて精勵なりしが、昭和九年十二月一日歩兵第二十聯隊留守隊に入營し、滿洲派遣の爲同月十日屯營出發、同十二日朝鮮國境を通過して同月十三日新京に到着し、第十二中隊に編入せられて直に同地の警備に任じ、翌十年三月末に至り此の間初年兵としての教育を受けつゝ衛兵巡察其他の勤務に服し、酷寒を冒し、常に率先難事に當りて苦勞を事とせず、精勵努力にして功績多かりしが、十年三月末初年兵第一教育を修了し、翌四月五日以降第一次春季討伐に方り、第三小隊第一分隊に屬して延吉汪清縣下の共産匪討伐に從事し、主として百草溝に位置して同地の周圍數里に亘る間の治安工作集團部落建設掩護等の任務に服し、連續數十日の間殆んど寧日なく、又幾多の困缺に堪へ刻苦精勵共任務を完うせり。以上の功績優秀と認めらる。

同十年五月二十九日より六月一日に亘りては、中隊主力と共に陸地岩洞附近の匪賊を討伐するに方り、六月一日拂曉より匪賊の根據地を包圍攻撃す。此時隆は中隊指揮班の一員として中隊長の傳令に任じ敵火を冒して終始勇敢に動作し、主として中隊長と右第一線小隊との連絡を擔任し、同小隊長より敵匪漸次北方に移動しつゝあることを報告し來りたるや之を中隊長に報告し、次で中隊長の命令に依り之を右方約三百米の谷地を前進中なる坂小隊に傳達せんがため、奮然身を躍らして出發し、前進數歩、俄然敵の急射撃を受け、胸部を貫通せられて其場に仆れ、遂に名譽の戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

隆性質溫順にして沈勇責任觀念旺盛なり。入營以來特に軍務に精勵し、又克く長上の指示を遵奉し、諸規定の履行極めて嚴正、同僚間の交際も亦圓滑にして隊內將兵の敬愛を受けたり、其の戰死するや皆之を惜み、深く之を哀悼したり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　松田國義

松田國義は、高知縣高岡郡檮原村檮原乙三八三八の人にして、昭和八年十二月十日獨立守備歩兵第十六大隊第一中隊に入營し、鐵嶺に位置して同地の警備に任じつゝ初年兵第一期の教育を受けたりしが、翌九年三月第一期教育終了の上、平齊線泰來に移駐し、當時尙ほ兵舍の設けなく地方民家に起居し、不自由を忍びつゝ寡少の兵員と共に同地附近の警備に任じ、近傍各地の討伐掃蕩に出動して勇敢に動作し、又時々列車に警乘し、或は衛兵巡察等の重要任務に服して翌十年二月に至る約十月の間、終始一貫率先難事に當り精勵努力、中隊の警備任務達成に貢獻せる所多大なり。以上の功績優秀と認めらる。

同十年二月三日以降、獨立守備歩兵第二大隊に編入せられて奉天附近の警備に服し、同月七日より獨立歩兵第十二聯隊要員として同隊の編成業務に從事し、編成完結の上錦州方面に移り、阜新警備隊に在りて同地附近の警備に任じたり。當時同地附近は匪賊の跳梁と共に惡疫の流行するあり、且つ交通不便物資缺乏しある中に於て、危險を冒し、幾多の困缺に堪へて鐵道測量作業の掩護其他の重要任務に服したるが、同年三月二十五日は新立屯西方約二十四粁なる半家塔に於て、掠奪匪行中なる老梯子苑九占の合流匪約三百を攻撃するに方り、第二分隊長に代りて分隊を指揮し、遂に敵匪を撃退し戰

功少からず。爾後同年十月初旬に亘り依然阜新に在りて同地附近の警備に任じ、九月一日一分隊と共に新立屯に連絡の途中半家塔附近に於て匪賊團五十と遭遇せしも、迅速機敏の行動に依り機先を制して之を擊破し、以上の功績優秀なるものと認められたり。

同十年十月五日以降旅團の秋季討伐に際し、聯隊は朝陽縣南部地方に蟠居せる劉振東苑九占の合流匪を攻擊するに方り國義は中島小隊第三分隊小銃手として之に參加し、十月十一日中隊主力と共に羊山溝附近の匪賊を擊破し、之を追擊して七道嶺より羊山を經て十三日正午景家店に到着、次で楡樹溝附近の高地を占領せる敵の一團を攻擊す。國義第三分隊に屬して右第一線となり、分隊長と共に嶮峻なる岩山を攀登し、敵彈を冒して敵に肉薄し、遂に敵陣地を奪取したり。次で同月十九日劉綱の指揮する老頭四海の合流匪約五十双廟東南方約八粁華子溝に潜入せるの情報に接し、中島小隊に屬して之が討伐に向ひ同日午前四時華子溝に到着せしに、匪賊等は之を察知し同部落北側土壁を越へて遁走せんとせり。偶々月明により匪首の姿を目擊したる國義は敢然之に飛付き、之を捕縛せんとしたる刹那、劉綱の發射せる拳銃彈にて胸部を貫通せられたるも國義之を放たず、第二彈を頭部に受け人事不省に陷りたるも尚ほ放たず、幸に戰友の來援に依り之を生擒したり。敵匪遂に潰亂し、小隊は之を殲滅せり。國義遂に戰死、此日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

國義性質温順にして剛勇なり。殊に責任觀念旺盛、軍務の成績優良、殊に其の戰死當時の情況は勇猛無比、以て鬼神を泣かしむべく、帝國軍人の龜鑑とするに足るべし。隊内の將兵皆之を惜み深く之を哀悼せり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　細野　四郎兵衛

細野四郎兵衛は、埼玉縣北足立郡朝霞町大字根岸の人にして昭和九年十二月一日現役兵として獨立守備歩兵第八聯隊第三中隊に入營し、守備地威虎嶺にありて同地附近の警備に任じ、初年兵として教育を受けつつ、衛兵巡察等の勤務に服し酷寒を冒し其他多大の困厄に堪へて率先勞を辭せず、終始一貫努力精勵にして其功績を認められ、翌十年五月五日黄松甸救援のため「モーターカー」にて急行し同地南方約二粁の地點に於て匪賊の妨害を受けたるも、勇敢機敏に行動して之を擊退し、進んで高地を占めたる敵匪を攻擊するに方りては、沈着正確なる射擊に依り敵に大なる損害を與へ、次で之を退したり。以上の功績優秀と認めらる。

同十年六月下旬以降額穆索に分屯し、同地附近の警備に任じつつ乘馬部隊の教練を受け、同年八月下旬は、八月十七日苑兵臺附近に於て我列車を襲擊せし共産を追躍中の田中部隊の後方連絡に任じ、重疊せる山岳地帶並に大濕地大密林に行動し、哈爾巴嶺南方地區に於て、森林内の道路を糧秣輸送中、四五十名の匪賊と遭遇するや、迅速機敏に動作し、敵に機先を制して之に大打擊を與へ、糧秣其他の物品には一指をも染めざらしめたり。又九月十三日は柳樹屯に於て百數十名の匪賊を擊破し、同十五日は當石河子に於ては乘馬小銃手として敵の背後に迂廻し、其退路を遮斷して殆んど之を殲滅したり。以上の功績優秀と認めらる。

同十年十月一日以降秋季討伐に際しては、大武小隊第一分隊小銃手として之に參加し、額穆索附近の倭樹密生して行動困難なる雜樹林多き地方に行動し、終始奮勵本討伐の目的を達成せり。斯くて同月五日は手圈溝附近に於て優勢なる匪賊と對戰中なる滿洲國軍を救援し、敵を猛射して之を擊退し、越へて十一月五日老道溝の北方約六吉なる青溝子附近の戰鬪

に際しては、分隊長の意圖を受けて迅速機敏に動作し、適當なる地を發見し、銃を之に托して有効なる射擊を行ひ、敵に多大の損害を與へたり、追て敗走せる敵を追擊して谷地に入るや、新來の敵約二百と遭遇し、迅速に有利なる地點を占めて對戰せしが敵は衆多を恃み、且輕機關銃を猛射しつつ、遂次戰を包圍せんとし、小隊は苦戰に陷り死傷續出す。四郎兵衛敵彈雨注の下に在りて泰然自若益々敵に猛射を加へたるが、彈藥缺乏を告げたる時、偶々敵の飛彈は頭部を貫通し遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

四郎兵衛性質温厚にして剛勇なり、事に當りて熱心精勵、在隊間の成績優良、皆其の戰沒を惜みたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　鈴木平次郎

鈴木平次郎は、北海道上川郡名寄町字上名寄原町本通附九線六一の人にして、昭和九年十二月一日現役兵として獨立守備歩兵第八大隊に入營し、守備地敦化に在りて滿洲事變の業務に從事しつつ、初年兵第一期の教育を受け、教育の進歩に從ひて二年次兵と伍して衛兵巡察等の要務に服し、酷寒を冒して精勵し勤勞少からざりしが、翌十年三月下旬は劉家店附近の討伐に方り、歩兵砲砲手として之に參加し、沈着勇敢に砲を操作して敵を砲擊し遂に之を擊退したり。以上の功績優秀なるものと認めらる。

同十年四月一日以降は春季討伐に方り、歩兵砲砲手として之に參加し、又斥候或は夜間の哨兵等に服し、四月二日雙牙子附近の戰鬪に際しては、同じく歩兵砲砲手として有効に敵を砲擊し、四月三日玉樹川附近には輕機關銃々手として八日紅石砬子附近の戰鬪には小銃手として之に參加し、同月十一日以降は小銃手として勇敢に行動せしが、時恰も解氷期に入り、所々に深き大濕地あり行動頗る困難なりしも益々士氣旺盛に行動を續け、或は殆んど道路なき嶮峻なる山岳地帶を踏破して匪賊の搜索掃蕩に從事し、以上の功績も亦優秀と認めらる。

同十年五月中旬以降は第二次春季討伐として玉樹川西北方並に同地南方地區の討伐掃蕩を行ひ小銃手として活動せしが同年七月三十一日以降は中隊長の傳令として大石頭南方地區並に二道河子附近の討伐に參加し、屢々敵の猛火を冒して中隊長と各小隊長並に隣接各部隊間を馳驅して緊要なる命令報告の傳達に任じ、八月上旬頭道河子の戰鬪に際しては森田曹長の指揮を受け、中隊と離れて糧秣輸送を掩護し、同月中旬は二道河子附近同下旬廟嶺附近の討伐に方り、田中討伐隊の小銃手として共産匪三百を擊破し、八月三十一日大橋分遣隊附近九月七日同地西南方の戰鬪に方りては關小隊小銃手として勇戰し、以上の功績も亦優秀と認められたり。

同十年十月一日以降は中隊の秋季討伐として出動するに方り、歩兵砲隊砲手として有効に敵を攻擊して戰功あり。同年十一月十九日玉樹川西方高地の戰鬪に際しては關根軍曹の指揮下に於て小銃手として之に參加し、最左翼兵として率先高地の斜面を登りて敵陣地に肉薄したり。此時恰も前方百米の稜線上潤葉樹を縫ひつつ我に向て前進し來る十數の敵匪を發見し、機を失せず記號を以て分隊長に報告し、勇敢にも其位置に停止して敵を待ち、好機に之を猛射して立所に數敵を殪したり。分隊主力も相次で射擊を開始せしため敵は周章狼狽爲す所を知らず死屍を其ままに遺棄して潰走せり。平次郎獨斷之を追擊中、敵彈を下腹部に受けて遂に名譽の戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

平次郎性質溫順にして機敏なり。入營以來特に軍務に精勵して成績優良、戰鬪間特に選拔せられて中隊長の傳令となり勇敢機敏に戰場を馳驅し衆兵羨望の的なりしが、遂に敵彈の爲戰場の華と散りたり。隊內將兵皆之を惜み、深く哀悼せざる者無し。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　鈴木福松

鈴木福松は靜岡縣田方郡熱海町泉の人にして、昭和十年二月二日昭和九年軍令陸甲第十二號に依り、臨時編成部要員として獨立歩兵第十一聯隊第三中隊に轉屬せられ、二月十日編成完結、同月十一日東京出發、二月十三日大阪港出帆、大連港に上陸して二月二十六日熱河省圍場縣圍場に到着、直に同地の警備に任じ、圍場より赤峯又は承德間の自動車警乘兵として繁激なる勤務に服して精勵し、同年五月十日以後は六溝及盃杖子附近の警備に任じ、歩哨斥候巡察等の重要任務に服して精勵一日の如く、以上の功績優秀と認められたり。

同十年五月二十三日毛山附近の敵匪を包圍するや、福松小隊長の傳令として平田少尉と共に小西營に於て敵の東北方に退却するを阻止すべき任務を受け、午後七時半頃滦河橋を出發し、翌二十四日午前五時に至るも敵影を見ず。即ち再び中隊主力と合して敵を攻擊するに方り、福松敵彈を冒して隣接小隊長並に中隊長との連絡に任じたりしが、午前十時頃小隊長の命令に依り、敵の退路遮斷のため派遣したる杉浦分隊の狀況を確むるため同分隊の位置に至る途中に於て、山上より敵の集中火を蒙りしも勇敢機敏に動作して遂に松浦分隊に到着せり。然るに此時松浦分隊は退却中なりし五六十名の匪賊と對戰し苦戰中なりしかば、福松は獨斷を以て松浦分隊の戰鬪に加入し、忽ち數敵を斃したるが、敵は松浦分隊の兵力寡少なるを知り、遂次分隊を包圍し、分隊は辛じて現在地點を支へつつある狀況なり。此に於て福松は該分隊苦戰の情況を小隊長に報告せんとして自ら戰鬪を中止し、再び敵の集中火を受けつつ急峻なる山上に駈け上り小隊長の許に歸來して之を報告せり。此に於て小隊長は福松を先導とし宮本輕機關銃分隊を指揮して松浦分隊救援の爲め前進、松浦分隊の位置に到達するや、福松輕機關銃のため有利なる射擊位置を小隊長に指示報告し、又松浦分隊に向ひ大聲を以て「小隊長は此處に來たぞ」と告知し、同分隊長以下士氣頓に振ひしが、この刹那不幸敵の一彈は福松の胸部を貫きたり。福松更に屈せず左手にて自己の胸部を押へ、右手に小隊長を麾き「早く〳〵」と之を促しつつ敵を目視し得る稜線に匍ひ上り、之を小隊長に知らしめたるまゝ遂に無言となり、幽かに「萬歲」を呼び、三回目の聲も半にして遂に瞑目す。時に午前十時二十分なり。小隊長は輕機關銃を以て敵を斜方向より猛射し、敵は不意を打たれて大狼狽し、殆ど混亂狀態を以て或は斃れ或は遁れ四離滅裂せり。要するに福松の機敏勇敢なる行動と瀕死の重傷を以て尙ほ其の任務を繼續し、小隊の戰鬪を有利に導き、敵を殲滅するに至らしめたる功績は正に拔群とす。武功に依り即日歩兵等兵を命ぜられ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

福松性質溫厚にして氣概に富み、責任觀念最も旺盛なり。入營以來特に軍務に精勵にして成績優良、上下の信賴厚かりき。

陸軍歩兵上等兵勳八等　中根彌三郎

中根彌三郎は愛知縣幡豆郡平坂町大字中畑字小牛の出身にして、歩兵第十八聯隊第十一中隊服務中、昭和九年四月一日

編成下令、同十六日滿洲派遣の爲め屯營出發同二十日國境通過同二十八日佳木斯に到着す、其間編成下令あるや器材の手入及整理梱包等に精勵し、輸送間は荷物の塔載卸下等に努力し以て其重任を完ふせり、佳木斯に到着するや該地に駐屯し附近一帶の警備に任す、五月十五日より第一次大平川鎭附近の討伐開始せらるゝや第三有線班員として參加し、地形更に未知の地區に馳驅し、萬難を排し克保線及通信所の警戒並に連絡勤務に奮闘し、討伐行動に寄與する處頗大なり、次いで五月二十日より第二次駝腰子湖南營附近の討伐には、第三師團無線補助員として參加し、連日連夜通信所の警戒及連絡報告等、繁激なる傳令勤務に活躍し、續いて五月二十八日より八月六日に亘り北境地區防衛隊にありて、猛烈なる通信教育を受けつゝ、警戒勤務に任じ奮闘努力中、不幸にも病に冒され、八月六日佳木斯衛戍病院に入院の身となり、專心加療中十一月十日惜くも遂に病沒するに至れり、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　森田政一

森田政一は靜岡縣靜岡市柚木町の出身にして、歩兵第三十四聯隊第六中隊服務中昭和九年四月一日編成下令、同十八日屯營出發滿洲派遣の途に就き、同十九日敦賀港出帆同二十二日清津港上陸同日國境通過同二十四日哈爾賓に到着す、其間出動準準に忙殺され日夜精勵努力し、輸送間荷物の塔載卸下等諸勤務に服し、熱心以て其重任を完ふせり、哈爾賓到着後一面坡警備に服し、當時附近の狀況渾沌匪賊の横行頻繁にして寸偷を許さゞりしが、常に至嚴なる警戒裡に歩哨巡察衛生等又示威行軍に出動する等、積極的活動せり、而して附近一帶の治安確立に貢献しつゝありしが、不幸病に冒され八月三日哈爾賓衛戍病院に入院の身となり、後內地歸還靜岡衛戍病院に收容十月二日留守隊第一中隊に編入せられ、專心加療中十月十五日病革まり遂に沒するに至れり、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等瑞寶章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　飯室民平

飯室民平は山梨縣中巨摩郡御影村六科の出身にして、昭和十一年三月一日獨立守備歩兵第四大隊第二中隊に入營し、教育訓練の傍ら、駐屯地附近の警備精勵中、四月十九日より七月十五日の間、春季より夏季に亘り三角地帶の討伐に參加し、其間克く上官の意圖に從ひ、各地に勇戰奮闘し、以て三角地帶の治安肅正に貢献する等大なるものあり、特に七月二日紅軍匪程の指揮する百餘名は本溪桓仁縣境附近より安奉線南攻驛附近鐵道を横斷し、三角地帶に進入し來り、藤田小隊に擊破せられたり、爾後大隊は主力を以て此を急追す、飯室は其間にありて、克く困苦缺乏に耐へ他の部隊と共に絶へず此敵を念遂し晝夜兼行追跡すること十二日に及び、遂に本溪縣第八區大楡樹溝附近の峠に於て目的の地點に差懸るや、右方高地より突然敵匪の射擊を受け、我軍直に之に應戰す、飯室は直に附近の地物を利用して射擊を開始し、正確なる射擊を敵に浴せ、次いで分隊長の指揮に依り、側面の敵に向ひ攻擊を開始す、敵は多勢を恃み頗る頑强に抵抗し退却の模樣更になし、此時飯室は敵に近接し分隊の最右翼にありて勇敢に奮闘しありしが、敵主力より猛射を受け、躊躇せば危險益々增大するを察知し、獨斷以て敵に突入すべく猛然前進を開始の刹那匪彈飯室の上腹部を貫通し、玆に壯烈なる戰死を遂げたり、本戰闘に於ける飯室の勇猛果敢なる行動は、友軍の士氣を振作し、戰捷の素因を作爲したるものにして、其功績偉

大なりと云ふべし、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り金鵄勲章功七級並に勲八等日色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勲八等功七級　堀本此次郎

堀本此次郎は群馬縣邑樂郡大川村大字寄木戸の出身にして、昭和九年十二月七日獨立守備歩兵第十大隊第三中隊に入營し、同日より密山にありて、初年兵として教育訓練の傍ら、附近の警備に任ず、其間繁激なる警備諸勤務に精勵し、又林密――密虎線建設掩護の爲め沿線警備に或は飛行場警戒又は連絡警乘員として日夜奮闘努力し、以て治安維持に貢献する處大なるものあり、三月二十三日中隊密山より哈爾賓及新京經由前郭旗に移駐に際しては、輸送間萬難を排して、移駐業務を支障なからしめたり、當時京大線は路盤未だ堅固ならず、屢々脱線等の事故を惹起し、桃大線は不逞住民に依り、建築列車の運行妨害多く任務遂行上少からざる支障あり、又第二松花江島嶼附近には大小匪蟠居し、時々沿線附近に出沒する情況にして、殊に高粱繁茂期に入るや、守備區域内と雖も一般に彼等の行動敏活となり、遂時沿線に接近するの情況下にありて、建設掩護或は列車警乘、又示威行軍に出動する等常に積極的行動を以て、建設業務の完成、治安維持の爲め貢献する處大にして、其功績や頗る大なるものあり、十月十三日龍王廟戦闘に於ては、押中洋の率ゆる約七十の匪團を、兩字子、朝家驛間南側高地附近に攻撃し、猛射を以て之を南方に潰走せしめ、彼等鐵道破壊の企圖を挫折せしめ京白線の行進を容易ならしめたり、十月十四日より十六日に亘り松花江砂島の戦闘に際しては、當時該地附近には匪首振君、北山、九江龍九洲等の匪團、各地に蟠居しあり、中隊は滿洲國軍警を併せ之が討伐を實施し、中隊主力は扶餘對岸より乘船し、

江上小舟二十五舟に分乘し、夜暗を衝いて溯航し午後一時四十分七家子東北方砂島を猛烈なる攻撃を爲し、多大の損害を與へて潰走せしめ、翌十五日溯航を繼續し、午前十時四十分より攻撃し東南方に敗走せしむ、翌十六日八里營子北方中洲に前進中李文舉坨子北方中洲に約六十の匪賊を攻撃し何れも南方に四散潰走せしめたり、茲に於て松花江諸島の治安肅正を終へ凱旋せり、十一月三日乃蠢討伐隊は吳家粱房に蟠居しある匪首三江好四海の合流匪約六十を攻撃するや、堀本は中野小隊第二分隊小銃手として參加す、當時敵は一七八東方突角臺地に膝射散兵壕を構築し、十數名の警戒員を配置し、北及南方斜面に對し頑強に抵抗し、且つ吳家粱東北方附近に數次の立射散兵壕を構築し、南方に對圍壁を有し頑強に抵抗す、堀本は彈丸雨飛の間危險を冒し、猛烈果敢に前進し、或は分隊長を輔佐し、遂に敵の警戒陣地を奪取し以て討伐隊主力の前進を容易ならしめ、遂に敵の動搖を誘起せしめ、逃走を開始するや、機を失せず追撃以て多大の損害を與へたり、十月十八日より十一月二十二日に亘り秋季討伐實施せらるるや、第二分隊小銃手として參加し、各地に勇戦奮闘し以て克く討伐の目的を達成せしめ、次いで十一年三月四日より。京白線の守備並に乾安縣南郭爾羅斯前旗扶餘縣の治安維持に任じ、大小匪蟠居しある中に各地に轉戦し偉功を奏し、又警備に際しては巡察衛生斥候等繁激なる要務に連日連夜殆んど寢食を忘れて精勵し以て、中隊擔任地區の治安維持に大なる貢献をなしたり、七月十五、六日の肇州縣前敖木臺附近の戦闘に際しては、匪首九龍、老軍、四季好、武文の合流匪約三十は松花江中砂島に蟠居中なるを知り、山道大尉以下五十七名は十五日午後五時を期し之を攻撃すべく、同日午前四時扶餘南岸より警備艇二隻に分乘出發し、午後三時目的地に到りしも敵影を發見せず、爾後趙家店――三間窩堡附近に至る間の江中を掃蕩し、午後八時葛江溪に歸着し敵情を捜索宿營す、同日午後十一時に至り、該匪は肇州縣前敖木臺に伏在しあること確實となりしを以て、十六日午前三時出發同五時戦闘開始位置に航行するや、監視匪の知る處となり、匪賊は直に高地東端に散開し、我警備艇に一齊射撃を加へたり、中隊長は先づ

輕機を以て敵を猛射せしめつゝ濕地帶に上陸直に戰鬪を開始す、此時堀本は中隊長の傳令として、中隊長の左側にありて猛烈なる追擊射擊を反覆せしが、偶々逃走匪十數名は前方三十乃至五十米の地點に逐次停止し、中隊長及指揮班の障害地通過に乘じ狙擊す、玆に於て堀本は機を逸せず其出沒匪を巧みに捕捉して猛射し忽ち數名を射殺し、最後の突入點前方約二十米の地點に進出し、伏委を以て射擊せんとせしも適視を得ず、委勢を換へ膝射にて猛射せしが、敵の移動に伴ひ、適時適切なる射擊を實施しつゝありしが、偶々匪彈堀本の左前膊を貫通し左胸部に盲貫銃創を受け遂に立つ能はず、玆に壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり、堀本の勇敢機敏なる行動は、中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめ、敵の殲滅を速かならしめ、其功績や拔群なりと謂ふべし、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依に金鵄勳章功七級並に勳八白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　佐藤福正

佐藤福正は靜岡縣賀茂郡岩科村岩科の出身にして、歩兵第三十四聯隊第三中隊服務中、昭和九年四月一日編成下令、同十八日滿洲派遣の爲め靜岡出發同十九日敦賀港出帆、同二十二日清津港上陸同日國境通過同二十四日哈爾賓に到着し、同日より該地附近の警備に任じ、猛烈なる教育訓練に從事しつゝ繁激なる警備勤務に精勵し、他兵の模範的良成績を以て其任務を完ふせり、七月七日より賓縣に分駐し、附近警備中七月十六、七兩日に亘る徐裡河附近の戰鬪には、輕機關銃射手として、常に率先機敏に射擊準備をなし、分隊長意圖に從ひ、迅速有効なる射擊に依り、敵を潰亂敗走せしめ以て部落掃蕩に多大の効果を齎したり、又七月二十九日より三十一日に亘り、元寶河附近の戰鬪には、勇躍出動敵と遭遇するや、高地附近を占領し雜林中の敵を巧みに捉へ、猛烈なる射擊を指向し、追擊に當りては常に分隊長に追從側射の効果を現はし、敵をして四散潰走せしめ、次いで八月六日達子營附近の戰鬪に於て、達子營西北方高地の敵を攻擊するや丈餘の高粱畑にありて射擊困難なりしにも拘らず、巧みに位置を移動し敵を制壓し、小銃分隊をして谷地通過、及右翼包圍を容易ならしめ、且つ第四分隊該高地を占領するや、直に追及し敵の退却に多大の損害を與へ殆んど殲滅に歸せしめたり、八月八日刀切砬附近の戰鬪には第六分隊左火線射手として、勇猛果敢敵の主力を猛射し、直に之を潰走せしめたる等、以上の功績實に偉大なるものあり、然るに九月十四日不幸公務に依り變死を遂ぐるに至れり、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　榑松福次

榑松福次は靜岡縣小笠原郡笠原村字山崎の出身にして、歩兵第十八聯隊第一機關銃中隊に服務中、昭和九年十二月十一日滿洲派遣の爲め屯營出發、同十七日圖們江通過二十二日佳木斯に到着し、同日より該地附近の警備に任じ、日夜繁激なる警備諸勤務に精勵し、以て其任を完ふし、六月二十九日より七月九日に亘り、永豐鎭の守備に任じ終へて、八月二日より同十三日に亘り關東軍測量班掩護隊機關銃分隊に屬し、岡田掩護隊長の指揮下に入り、炎熱燒くが如き酷暑に耐へ、常に積極的活動を續け、晝間は追分峠の頂上に登りて螺集する蚊群に惱まされつゝ掩護に任し、夜間は警戒に或は歩哨に、所有苦難を意とせず、任務達成に專念し、以て側量班の行動を容易ならしめたり、翌十年三月十一日より四月十四日に亘り、北境地區春季討伐實施せらるゝや、榑松之に參加し、第三中隊に配屬せられ、積雪尺餘の中を連日十數里を行軍し、

途中各部落を掃蕩しつゝ前進す、又其間屢々匪賊と遭遇し、戰鬪開始するや、勇猛果敢克く其機能を發揮し、悉く敵匪を四散潰走せしめたり、樽松の逃日變らざる積極的行動は、友軍の士氣を鼓舞し、討伐任務達成上寄與する處頗る大なるものあり、四月十四日より六月九日に亘り春季討伐に引續き湯原地區討伐開始せらるゝや、時悅も解氷期に遭遇し、山岳地帶及濕地帶の行動甚だ困難なるにも拘らず、常に率先雜局に自ら當り、積極的に終始し、分隊長をして意の如く活動せしめたり、四月二十三日黑金河附近の戰鬪に際しては、同日午前三時大平川出發途中道路不良なるにも拘らず、克く分隊長の命に從ひ、澁滯なく前進し、午後四時三十分戰鬪開始さるゝや、小隊の右第一線として、前方約七百米の高地に據り、頑强に抵抗する敵に對し、敵彈雨飛の間克く自個の任務を遂行し、小隊の戰鬪を有利ならしめたり、續いて小隊の追擊並に黑金河西北方高地一帶に據り、逐次頑强なる抵抗を持續せる敵の攻擊に當り、克く分隊長の意圖に從ひ好機に乘ずる戰鬪を爲し以て戰捷を容易ならしめたり、七月十八日より二十八日に亘り、再び湯原縣下の討伐に參加し、勇戰奮鬪偉功を奏し、十月十日移駐の爲め先發として拔河に先行し、荒廢亂雜なる舊兵舍の掃除整頓或は防寒被服の分配整理等に從事し、克く熱心精勵以て其任務を完ふせり、十月二十四日より十一月四日に亘り東部地區討伐に參加し、常に積極的活動を以て其任務達成に邁進し貢獻する處偉大なるものあり、然るに不幸十一月四日病に冒され拔河衞戍病院に收容せられ、專心加療中十一月十四日病革まり遂に歿するに至れり、卽日步兵上等兵に進らる。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　宮原武雄

宮原武雄は、德島縣名東郡加茂名町島田字大古の人にして、父を九十九、母をソノと云ひ、大正六年四月十五日生なり。昭和七年三月加茂名小學高等科を卒業し、昭和九年十二月十日十八歲にして現役を志願し、獨立守備步兵第十二大隊第三中隊に入隊し、圖寧線及び東京城附近の警備に任じたり。當時同鐵道の沿線は匪賊の跳梁するもの多く、屢々建設工事を妨害せられ、或は工事人夫を拉致し、又は通信機關を破壞する等の事件續出する等、極めて接迫せる情況の下に在りて、屢々出動討伐に從ひ、常に勇敢機敏に動作し、功績顯著なり。以下戰鬪行動中主要なるものに就き、其の概要を記すべし。

昭和十年三月二十日老廟嶺附近に於て、匪首齊林の率ゆる約五十名を奇襲するに方りては、第三分隊小銃手として之に參加し、高地上を占領して頑强に抵抗する敵に對し、勇猛沈著攻擊を敢行し、敵に大なる損害を與へて遂に之を擊退し、又同年三月下旬より四月上旬に亘りたる鏡泊湖附近の討伐には、第二小隊に屬し、第三分隊小銃手として之に參加す。此行動地帶は大小の山嶽重疊し、密林多く人家に乏しく、寒氣凜冽の中に於て、數日間露營を續け、討伐行動に影響を受くること大なりしも、克く困缺に堪へ、率先難に當り、常に其の任務を達成せり。以上の功績優秀なるものと認めらる。

同十年四月十日鏡泊湖守備隊に連絡を取るべき任務を以て差遣せられたる北谷小隊は四月十日未明東京城を出發す。武雄同小隊に加はり尖兵分隊に屬にして小隊の前方約百五十米を大廟嶺に向て前進中、同地北方高地山腹の岩石突兀たる疎林內を通ぜる隘路に差かゝるや、突如三方の高地上並に道路兩側より射擊を受く、敵の銃數二百を下らず、天嶮を占め且つ制高の利を得て我を猛射し、勢益々熾烈となる。尖兵分隊は直に應戰し、分隊長以下匍匐して敵に迫れり。此間分隊長敵

彈のため重傷を負ひ、武雄も亦一彈を受けたるも之に屈せず、尚ほ決死の勇を鼓して奮戰し、敵に多大の損害を與へたり。然るに敵は頑强に抵抗しあるのみならず、其兵力の優勢を恃み、屢々逆襲に轉ずるの氣勢を示したるを以て、隘路内の前進中に在る小隊主力に危害を及さんことを慮り、分隊長と共に、斷然敵陣に突擊せんとするや、飛來せる敵の第二彈は武雄の頭部を貫通し、遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て直に歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

武雄性質溫順にして寡言、剛毅にして事に奮勵す。平素より男兒の死所は宜しく滿洲に於て之を求むべしと人に語るを常とせり。武雄其の言ふ所を現實にし、身命を國君の爲に捧げたり、壯なるかな平素の抱負、偉なるかな報國の精神特に其冥福を禱る。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　三嶽秋三

三嶽秋三は、神奈川縣中郡秦野町曾屋の人にして、父を作藏、母をセンと云ひ、大正三年九月二十一日生なり。昭和四年三月秦野町小學校を卒業、次で同地實業補習學校に入校、同九年四月同校卒業、兼て同地青年訓練所の業を修了す。其後家にあり父母を助けて家業に精勵す、性質溫厚にして孝心深く、青年訓練所入所中も成績優秀を以て屢々賞與せられたり。昭和九年十二月現役志願兵として獨立守備歩兵第四大隊第二中隊に入營し主として鐵道守備に任じ、又時に討伐に出動して戰功多く、翌十年二月十二日羊花嶺附近の戰鬪に參加、勇戰して敵五名を斃し、人質五名を奪還せしが、此戰鬪間秋三機敏勇敢に動作し、本戰鬪の成果を得るに貢獻せる所多大にして、功績顯著と認めらる。

同十年五月三十一日城門溝附近の戰鬪に參加して偉功を立てたり。是より曩き紅軍匪數百名は五月二十三日以來安奉線に近接せる草河口附近に侵入し、村公所の燒却電線の破壞等をなし暴威を振ひあり。依て中隊は五月三十日早朝出發、先づ寨馬集に向ひ前進せしに、敵は同夜城廠方向に東進せるが如く、中隊は三十一日早朝寨馬集を發し城廠に向て前進中、午前十時頃分水嶺に於て敵五百の匪賊團と衝突、中隊は猛烈に敵を攻擊せしが、敵は分水嶺の高地を占領して頑强に抵抗し、飛彈雨の如く、彼我殺傷相當、中隊の攻擊は一時頓挫の狀態なり。是に於て中隊長は辻小隊に擲彈筒及輕機關銃一分隊を附して敵の側背に迂回せしめ、藤田小隊に輕機關銃及手榴彈を附し正面より之を攻擊する如く部署し、兩面合擊更に士氣を鼓舞しつゝ猛進す。此時秋三辻小隊輕機關銃分隊に屬し、

彈藥手として敵火を冒して奮戰し、愈々敵に肉迫するや手榴彈を投じつゝ敵陣に突進し、小隊の全員皆之に應じて突擊す。此時不幸敵の一彈は秋三の胸部を貫き遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後日左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

辻小隊長より遺族に寄せられたる報告書簡の一節を左に摘錄す。

秋三君は入隊以來至極眞面目に軍隊教育に專念せられ第一期の成績良く殊に第二期に入りては名譽ある乘馬兵に選拔せられ一意優良なる乘馬兵たるべく努力せられ(中略)高地攻擊のため小隊長が中隊長の許に至りたる時初めて秋三氏の戰死を知り候噫々彼秋三は既に身體剛直し呼べども答へず、只口邊に微なる笑をたへて靜かに瞑目しあり。(下略)秋三平素より毅然として覺悟する所ありしことを覗ふに足るべき此最期の樣子は以て軍人の範とすべきものなり。遺族の健在を禱る。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　倉田庄一

倉田庄一は、靜岡縣濱名郡伊佐見村佐濱の人にして、父を次之吉、母をひさとと云ひ、大正三年十月十五日生なり。昭和三年三月伊佐見尋常高等小學校を卒業、次で縣立中泉農學校に入學し、昭和六年三月同校を卒業し、昭和九年十二月歩兵第十八聯隊留守隊に入隊、同月第六中隊に編入せられて、十二月十一日屯營出發、同月三十日富錦に到着し、直に同地の警備に任じたり。

昭和九年十二月以降富錦の警備に任じて翌十年八月下旬に至り、此間衞兵巡察等の要務に服すること其幾何回なるを知らず、酷寒炎暑を冒し、給養の粗惡に堪へ、恪勤精勵賞に一日の如く、所屬部隊の警備任務達成上貢獻せる所甚大にして、其功績優秀たり。然して此期間屢々各地の討伐に出動し、常に率先して難局に當り、且勇敢機敏に動作して戰功勳かるす。以下其の戰歷の概要につき逐次之を記すべし。

昭和十年三月四日中北境地區春季大討伐に方りては、丸地少尉の指揮下に入り、集賢鎭を根據として附近に點在せる小匪群を擊攘し、三月二十六日兩羊毛附近の戰鬪に際しては興隆鎭に於て農民を拉致したる騎馬匪約六十を追躡し、之を擊破して農民を奪還し、同月二十八日小平川附近を占領せし匪賊約二百を攻擊するに方りては、庄一第五分隊に屬し、中央火線に在りて奮戰し、尺餘の積雪を踏みつゝ前進せるに、敵は圍壁に據りて我に猛火を送り、庄一等は遂に雪中を匍匐して敵に肉迫し、激戰の後遂に敵を擊退せり。又同年五月下旬より六月中旬に亘りたる羅北縣內の討伐に際しては、第二小隊輕機關銃分隊第一彈藥手として之に參加し、八月十一月に後藤部隊に屬し、大久保小隊第四分隊輕機關銃手として、延興鎭中ノ島に潛伏せし匪賊約百五十を剿討のため同月未明洗興鎭を發し、帆船を以て河口中ノ島に向て前進し、同島を距る約五百米に近接するや、島の叢中より射擊を受け、小隊は船中より輕機關銃を以て應戰し、敵彈の飛來すること雨の如し。庄一敵の猛火を潛りつゝ彈藥補充を爲し、又

小銃を執りて敵を殪すこと少からず、偶々飛彈共の左肘に命中し鮮血迸るも意に介せず、尚ほ奮戰中、敵の第二彈は左上膊部を貫き腕を擧げ能はざるに至りしが、尚ほ第一線を下るを肯ぜず、小隊長の嚴命に依り應急手當を受けしむ。斯くて敵を擊退し、日沒頃洗兵鎮に歸還、庄一佳木斯衛戍病院富錦分院に入院し、左手切斷の大手術に堪へ、爾後經過良好なりしも、同月二十四日容體俄に革まり、同日遂に戰傷死せり。功績拔群を以て、即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

庄一性質溫順にして頭腦級密、責任觀念旺盛なり。家計豐にして相當の教養を有せるに拘らず、愼重己れを持し決して驕風なく、鄕黨模範的青年として之を推奬せり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　櫻井高一

櫻井高一は、埼玉縣秩父郡金澤村の人にして、父を治三郎、母をナカと云ひ、大正二年四月十一日生なり。大正十四年三月鄕里の小學校尋常科を卒業し、後家業農に從事して精勵なりしが、昭和八年十二日一同現役兵として獨立守備歩兵第八大隊第一中隊に入隊し、熊岳城に在りて滿洲事變に關する業務に從事せしが、同年十二月十七日熊岳城を出發し、同十八日蛟河に到着して同地の守備に任じたり。

昭和八年十二月十八日以降京圖線の警備を擔任し、各派遣部隊並に歸還部隊の輸送に際しては、酷寒を冒して之れが掩護に任じ、又は輸送の業務を補助して功績あり。翌九年四月より同年十一月に亘る間は、依然京圖線警備を續け、穎穆敦化兩縣下には多數の殘存兵匪跳梁し、絶へず京圖線並に主要村落を窺ひある情勢下に於て、屢々巡察斥候列車警乘等常に繁劇なる勤務に服し、鐵道の運行に支障なからしめ、各部落の治安上遺憾なきを得しめ、以上の功績優秀と認めらる。尚ほ本期間に於ける討伐行動の主要なるものを左に記す。

同九年九月七日新站西南地區の討伐に際しては小銃兵として若林小隊に屬し、同地方の地形は一般に密林地帶にして行動頗困難なりしも、進んで斥候に加はりて敵匪の情況を偵察し、又は傳令となり危險を冒し機敏に動作して緊要なる命令報告を傳達し、中隊の任務達成に貢献するもの多し。又同年十月中秋季討伐に方りては歩兵砲手として之に參加し、十四日は增水せる拉林川を徒涉の後三人班兒四合川附近の匪賊を攻擊し、十一月中穆稜穆稜旬縣下各地に於て匪賊を掃蕩し、以上の功績も亦優秀と認められたり。

同九年十一月十五日夜暖木條子溝に在りし敵匪を夜襲するに方りては、高橋小隊に屬して馳驅奮戰し、翌十六日拂曉より續いて敵を攻擊するに際しては、仮島分隊に在りて率先山上に走せ上りて善戰し、次で同小隊は高地より前方の斜面を下りつゝ續いて敵を攻擊す。此時高一小隊長の側近に在りて傳令に任じたりしが、約三十米前方より敵の射擊を受けて一時停止せんとするや、小隊長は敢然突擊を命ず。高一小隊長の聲に應じ身を躍して猛進せる時、不幸敵彈の

ため右大腿部を貫通せられたり。高一の勇猛なる動作は小隊全員の士氣を振起し、一同敢然敵に向て突入し、大なる損害なく敵を撃退、以て小隊の危機を脱することを得たり。高一の功績抜群と認めらる。高一拉法衞戍病院に入院加療中、二月十六日歩兵上等兵に進められ、同日戰傷死せり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

高一性質温順にして氣概に富み、事に當り熱心精勵なり。入營後の成績優良、上下皆其戰歿を惜み、之を悼みたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　安藤房次郎

安藤房次郎は、東京市赤坂區青山南町五丁目の人にして、昭和八年十二月一日現役兵として獨立守備歩兵第七大隊第一中隊に入隊し、間島地區に於て滿洲事變の業務に從事し、八年十二月三日より翌九年三月末に亘りては京圖線の警備に當り、酷寒を冒して或は斥候となりて匪賊の情況を偵察し、又は線路巡察、列車警乘の勤務に服して勤勉大に努め、指揮官の意圖を體して終始一貫誠實に服務せり。同年四月以降九月中旬に亘りては中隊と共に大吐川の守備に任じ、汪清縣下の治安、並に圖寧線の建設掩護に任じ、史忠恒柴世榮等の抗日義勇軍と稱する匪群の頻々たる襲來を撃攘し、以て其任務を完全に遂行したり。以上の功績優秀と認めらる。

同九年五月九日廟後溝附近の戰鬪に際しては迫撃砲手として勇敢に行動し、天嶮に據れる敵に對し有効なる射撃を行ひ、遂に之を撃退四散せしめたり。又同年七月中は鏡泊湖及び哈爾巴嶺附近の討伐に大隊本部乘馬傳令として參加し、機敏に行動して戰功あり。九月十四、十五兩日大小汪清河谷の戰鬪には、乘馬分隊輕機關銃手として勇戰し、殊に十五日大灣子南方山麓附近に陣地を占領しありし約五十の匪賊を攻撃するに方りては、有利なる陣地を迅速に占領して敵に猛射を浴せ、其根據地を覆滅したり。以上の功績も亦優秀と認めらる。

同九年九月十九日小汪清馬村附近の戰鬪に際しては、東畑小隊に屬し、乘馬分隊輕機關銃手として之に參加す、即ち小汪清河谷を遁走中の敵匪を急追して十九日馬村附近に達するや、敵は同地東北方臺上を占領しあり。小隊は直に之を攻撃せしが、敵は地の利を恃み抵抗頗る頑強なり。房次郎敵火の下を猛進して左前方の高地に進出し、敵の右側面に向て猛射を加ふ、敵匪震駭、小隊は機を逸せず全線突撃に移り遂に敵陣地を奪取せり、然るにこの激戰中、敵の一彈は房次郎の腹部に命中し、再び起つ能はず、翌二十日三道溝驛に於て療養中戰傷死せり。要するに房次郎沈着大膽特に獨斷左前方の高地に陣地を進め、不意の猛射に依り敵匪は極度の狼狽を來し、小隊戰勝の因を爲したること明なり。房次郎功績抜群を以て歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

房次郎父を豐吉、母をコウと云ひ、大正二年八月十五日生なり。大正十五年三月澁谷第一尋常小學校を卒業す。性質温厚篤實にして義務心强く、入隊以來特に軍務に精勵して成績優良なり。房次郎養母チョ子あり、遺族一同の健在を祷る。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　渥美環資

渥美環資は、靜岡縣榛原郡中川根村上長尾の人にして、父を林平、母をとらと云ひ、大正二年二月十日五生なり。昭和二年三月上長尾尋常高等小學校高等科を卒業し、後家業農に從事せしが、昭和九年一月歩兵第十八聯隊第六中隊に入隊、同年四月一日臨時編成下令に依り第六中隊に編入せられて、四月十六日屯營を出發し、圖們江を渡りて、五月一日富錦に到着し、同地の警備に任じたり。

昭和九年五月一日より富錦附近の警備に任ず。時未だ餘寒去らず、近傍各地の治安は概ね維持せられあるも、城外十里を隔つれば、小匪群各地に蟠居蠢動しあるのみならず、城内にも不逞徒輩の潜入せるあり、民心安定せず、常に至嚴の警戒を必要とする狀況下にあて、日夜繁劇なる勤務に服して精勵し、衛兵巡察其他の要務に當り、又は富錦大黑河間の陸軍定期船に警乘し、又十月中秋季討伐の爲大隊主力の出動中、殘留員として少數兵員と共に各種の勤務に服して殆んど不眠不休の狀態を續け、翌十年一月及二月は初年兵教育期中更に兵員の不足を感じ、分遣隊勤務等繁劇を加へたるが、旺盛なる士氣と體力とを以て終始精勵率先難に當りて恪勤精勵し、爾後約四十日間は富錦西側地區に於ける關東軍測量班の測量作業を掩護し、以上の功績も亦優秀と認められたり。

同九年五月中旬下旬の間は隊大主力と共に樺川集賢鎭附近に於て黄沙會匪及紅槍會匪約七百を討伐し、又五月十六日夾信子附近に於て約二百名の匪賊を擊破したり。尙同年三月四月の交北境地區に於ける春季大討伐に方りては、三道林子頭道林子硯砲山等各地の掃蕩を行ひ、連日難行軍の後目的を達成して富錦に歸還す。此の間環資は第二分隊小銃手として勇敢に行動し、又糧秣車輛の監視に任じて濕地多き惡路の行動を督勵し、刻苦精勵其與へられたる任務を遂行し、以上の功績優秀と認めらる。

同十年五月以降は關東軍測量班の掩護に任じ、龍頭山大孤山附近の測量作業を掩護し、又附近に於ける匪情を搜索して隔を未然に防止し、又夜間は徹宵の哨兵として宿營間の警戒に當る等、不斷の精勵を以て、其任務を達成しつゝあり。然るに七月十六日樺川縣甬子勾に於て、服部測量手以下七名の測量作業中、突如匪賊より射擊を受け、掩護隊は直に之を攻擊す、環資輕機關銃第二彈藥手として此戰鬪に參加し、彈藥搬送の間合には小銃を執りて敵を射擊し、奮戰十二時間に亘りて彈藥の大部を射耗したり。漸く日沒に近くや敵匪漸次近接し車輛積載の物品を奪掠せんとしたり。此に於て分隊長以下決然銃劍を揮ふて敵中に突入して匪首を刺殺し、次で得意の銃劍術にて猛猛格鬪中遂に敵彈を被り壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

環資性質溫順にして沈勇、特に軍務に精勵して諸成績優秀なりき。

陸軍砲兵上等兵勳八等　市橋文男

市橋文男は岐阜縣岐阜市四屋町の出身にして、大正二年十二月三日生、父を鐵太郎、母をさくのと云ひ、昭和三年三月京町尋常高等小學校を卒業し、昭和九年十二月一日現役兵として、野砲兵第三聯隊留守隊に入營し、同十二日滿洲派遣の爲め名古屋出發勇躍征途に就き、同二十日哈爾賓に到着し、原隊に入り第四中隊に編入せられ、同日より該地の警備に任じ、氣候風土異なる土地に於て、零下三十餘度の酷寒を冒して、一意上官の命を奉じ常に積極的行動を以て、哈爾賓附近一帶の警備に邁進し、治安上毫も遺憾なからしめたり、續いて八月二日以降尙哈爾賓警備に任じ、主として通信手として日夜奮鬪努力し、以て通信連絡を確保し、指揮機關をして其行動を容易ならしめたり、而して八月二十日より九月二十五日に亘り、國境守備要員として綏芬河に派遣せられ守備に任ずると共に、補備教育に任じ、常に所有困苦缺乏に堪へ、或は陣地の設備諸施設に或は教育訓練に碎心精勵し、以て克く其任務を完ふせり、四月二十一日より奉天附近の警備に任じ五月十四日其任を終へ、再び綏芬河に移駐し、國境守備中、六月二十六日中隊長の命に依り、守備勤務に關する事項報告の爲め、午前七時加藤一等兵引率の下に、支部本部に傳令として派遣せられ、綏芬河大直街北十字路より約五十米北方露人官舍前に差懸りし際、突如隣家屋方向より射擊を受けたり、玆に於て市橋は加藤一等兵と共に直に之に應戰し、奮戰力闘中胸部貫通銃創を受け再び立つ能はず、直に救急處置を受け病院に收容せられ、戰友の手厚き看護も甲斐なく、約一時間にして、悲壯なる戰死を遂げたり、即日砲兵上等兵に進めらる。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

市橋性温厚にして氣慨あり、生來趣味多く特に運動競技に巧にして、野球水泳マラソン角力等の技倆は一際目立ちたりと、此好男子今や亡し、惜むべきなり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　井手保治

井手保治は、愛媛縣越智郡乃萬村大字神宮の人にして、父を茂平、母をサキと云ひ、大正二年二月二十四日生なり昭和二年三月乃萬尋常高等小學校を卒業し、後家業農に從事せしが、昭和八年十二月獨立守備歩兵第十大隊第二中隊に入營し、連山關に位置して事變に關する業務に從事し、次で掖河に到着して同地の警備に任じ、翌九年一月下旬より掖河部隊の冬季討伐に參加し、同年三月上旬に亘る間に於て、山石磨刀石海林寧安並に密占河海浪河兩河谷の討伐に、小銃手として各地に轉戰し、克く上官の命に從ひて勇戰し、此間の功績優秀なるものと認められたり。

昭和九年四月一日より五月中旬に亘り寧佳線の建設工事を掩護し、小匪群の出沒頻繁なる間に在りて比較的長大區域の警戒を擔任し、此の間衛兵斥候巡察等各種の要務に服し、專ら工事の進捗を幇助したり。然して同年五月十四日以降横道河子の守備、九月三十日以後は梨樹鎭附

近の守備に當り、大隊本部の位置にありて日夜至嚴の警戒を行ひ、又翌十年五月以降は双城子附近の守備に任じ、南部北濱線の接收後、特に勤務の繁劇を來したるも衛兵巡察列車警乘等各種の重要任務に服し、刻苦精勵せり。以上の功績も亦優秀と認められたり。

同十年八月十四日小八號自衛團は五省天邦天助等の合流匪約百名の包圍を受け、苦戰中なるの報に接し、横井少尉の指揮する部隊は之を救援するに方り、保治第二分隊機關銃彈藥手として之に參加す。卽ち急行軍の後午後七時十分小八號東端に達し、土民より情況を聽取中、突如約三百米を距てたる高粱中より十數發の射擊を受け、之を驅逐して同部落の北端に進出するや、敵匪は約六十米前方の高粱畑前端の線を占領しありて、不意に我を猛射せり。小隊は直に之に應戰し、次で攻擊前進に移り、歩々敵に肉薄せしに敵匪は高粱中に逃走す、此に於て我部隊は之を追擊して前進すること約二百米、再び前方約二百米より敵の射擊を受けたるも、又之に猛射を浴せ、敵匪は死屍八を遺棄して潰走したり。この激戰中、保治敵火を冒して勇敢に動作し、絶へず彈藥を補充して輕機關銃の威力發揚に遺憾なからしめたるが、此の追擊間、銃の位置を高めて射擊に便ならしめんがため、膝射應用姿勢を以て輕機關銃の脚を兩手にて差上げて射擊中、敵彈を胸部及び腹部に受けて遂に壯烈なる戰死を遂げたり。保治功績拔群を以て、卽日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

保治性質温順にして氣慨に富み、事に當りて熱心勉勵、入隊後特に軍務に精勵して成績優良、上下の信用淺からず、皆共戰歿を惜み、深く之を哀悼せり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　若井田武夫

若井田武夫は栃木縣鹽谷郡大宮村大字大宮の出身にして、大正五年十二月十四日生、父を正母をヤイと云ひ、昭和六年三月大宮尋常高等小學校を卒業し、越へて昭和十一年三月六日現役志願兵として、獨立守備歩兵第二十四大隊第四中隊に入隊し、直に佳木斯附近の警備に任じ、初年兵として猛烈なる教育訓練を受けつゝ、傍ら、人員僅少の爲め繁激なる警戒諸勤務に日夜精勵し以て克く其任務を完ふせり、六月十六日より滿鐵踏査隊綏佳線の測量班援護に任じ、至嚴なる警戒裡に測量班の行動に支障なからしめ、爾後第一特設游擊隊と任務を交代し、湯原に位置し該地附近の警備に服し熱心精勵以て其任務を完ふせり、特に六月二十二日大平川分遣隊（湯原東北方六里）より、患者護送の爲め兵員の要求ありたるを以て、湯原警備隊より松尾上等兵を長とし岩井田外總員十名自動車と共に大平川分遣隊に派遣し、大平川分遣隊よりは更に八名の警乘を增加し、十八名を以て午前九時大平川分遣隊を出發、途中午前十時頃復路屯に差懸りし際、該部落より射擊を受けたるを以て、直に下車、此敵を攻擊せんとせしに敵は漸次兵力を增加し、約二百名に達し、且つ敵は該部落の支那家屋を占領しありて、頑强に抵抗するに依り、我軍益々

士氣を鼓舞激勵し敵に多大の損害を與へしも、敵は衆を恃み益々頑强に抵抗し、午前十一時頃に至るや、彈藥漸く盡きんとせしを以て、湯原、大平川兩分遣隊に之の狀況を報告せんとせしに、自動車は敵彈の爲め故障を生じ、已むなく徒步傳令を以て報告せしめたり、玆に於て最早彈藥盡き肉彈に依るの外なしと悲壯なる決心の下に自個の銃劍に信賴し、分隊長を中心として群がる敵中に突進中身に數彈を受け壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり、分隊長を中心として全員斃れて後已みたるは軍人の龜鑑にして、攻擊精神の極致と稱すべく其の武勳拔群なりと謂ふべし、即日步兵上等兵に進めらる。

功に依り金鵄勳章功七級並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり、

若井田性質溫厚篤實にして、頭腦明晰現役志願兵として入營後の學術教練共に優秀の成績を示し、前途を囑目せられたり。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　小暮秋太郎

小暮秋太郎は埼玉縣北足立郡小谷村大字前砂の人にして、父を倉吉、母をたつと云ひ、大正五年十一月三日生なり。昭和四年四月小谷高等小學校に入學、同年十二月家事の都合上中途退學し、後農業に從事して精勵なりしが、昭和九年十二月一日現役志願兵として、獨立守備步兵第八大隊第三中隊に入營して、同日より守備地虎嶺に到着して、直に事變に關する業務に服し、初年兵として必須なる軍事訓練を受けつゝ、衞兵其他の要務に服し、恪勤精勵其功績顯著なるものと認められたり。

同十年三月二十一日より黃泥河南北地區の討伐に方りては小隊小銃手として之に參加し、嶮峻なる地形を踏破し密林地帶を過ぎて匪賊の討伐掃蕩に從ひ、同月二十二日道泉子附近の戰鬪には第二小銃手として之に參加し、敵匪の根據を急襲して之を潰走せしめ、又同月二十五日成牆砬子附近の戰鬪に於ては、密林中にて匪賊約五十名と遭遇し、機敏に動作して機先を制し、遂に敵匪を潰走せしめたり。以上の功績優秀と認めらる。

同十年四月一日以降春季討伐に方りては連日大濕地大密林又は山岳地帶を行動し、士氣旺盛に各地の掃蕩を行ひ、四月十五日沙河掌附近の戰鬪、五月四日より沙河掌附近の討伐に參加し、困缺に堪へつつ連日敵匪を追躡し遂に之を四散せしめて被拉致民を奪還し、爾後虎嶺に在りて鐵道守備並に同地附近の警備に任じ、翌十年六月下旬に至りたり。爾後同年九月末に亘りては額穆索に分屯し、此間八月下旬哈爾巴嶺南方地區の討伐に際しては、川名小隊第二分隊小銃手として之に參加し、廟嶺附近の密林地帶に於て糧秣輸送中襲來せる匪賊約四百を擊破し、又九月中柳樹屯、及び當石河子附近の戰鬪に於て敵を猛擊して之に大打擊を加へ、以上の功績も亦優秀と認められたり。

同十年十月一日より額穆索地區の秋季討伐に方りては大武小隊第一分隊に屬し、各所に蟠居する大小の匪賊を掃蕩しつつ連日連夜の行動を爲し、十月五日は牛圈溝附近に於て滿洲國軍と交戰中なる敵匪の右側に進出して敵に猛射を加へ、遂

に之を潰走せしめ、次で十一月五日青溝子の南方約三粁附近の戰鬪に於ては、中村小隊輕機關銃銃手として之に參加して敵匪約五十を攻擊し、次で之を追擊中約二百の敵と衝突し、沈着機敏に動作して敵に大なる損害を與へたるも、敵は其數の優勢を恃み、且つ制高の地利を占めて我に輕機關銃の猛火を送り、然も漸次我を包圍する狀態となり小隊は戰況不利に陷らんとせり。此時秋太郎敵の彈雨を冒して之に肉薄しつつ猛擊し、敵の心膽を寒からしめたりしが、偶々飛彈顏面に命中し、遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日步兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

秋太郎性質溫順快活にして志操高潔、人と交るに誠實を旨とし、鄕黨の敬愛する所たり。入營以來特に服從の道を守り軍務に精勵して其成績優良なりき。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　石川新太郎

石川新太郎は、神奈川縣橫濱市中區元町三丁目の人にして、父を安次郎、母をテフと云ひ、大正三年八月二十七日生なり。昭和四年三月元街小學校夜學科を卒業し、後松屋呉服店々員たりしが、昭和九年十二月一日步兵第三十八聯隊留守隊に入隊し、同月七日留守隊出發、同月十五日齊々哈爾に到着し、步兵第三十八聯隊第十中隊に編入せられて、直に同地附近の警備に任じ、翌十年五月に及びたり。此の間初年兵敎育を受け、敎育の進むに從ひ漸次重要なる勤務に服し、酷寒凜冽の中に在りて衞兵巡察等に服し、兵員僅少のため勤務は益々繁劇を加ふるに至るも決して勞苦を辭せず、却て自ら進んで難事に當り、率先奮勵、此の間の成績優秀なるものと認められたり。

昭和十年五月中旬より中部吉林省に於て實施せられたる匪賊討伐に際し、第三小隊第一分隊の一員として之に參加し、五月十七日蛟河を出發以來京圖線南方の大密林高山地帶並に拉賓線東方の德林匪を索めつつ、之れが討伐に從事すること二十數日。屢々山中に露營し、匪賊の足跡を辿りて連日の追擊を爲し、五月二十五日は額勒赫に於て匪賊を猛擊し、其の心膽を寒からしめ、六月十三日は重病患者護送の任を受けて敵匪の散在する地區を通過し、然も十餘所の嶮難を蹈破して其任務を完了し、爾後山河屯に移り、得平小隊に屬して附近一帶の警備討伐に從事し、常に小隊長分隊長の命を遵奉して献身的に奮勵せり。斯くて六月十六日山河屯西方約二粁の地點に匪賊數十名侵入し、炊爨中なる情報を得て、得平小隊は拂曉之を奇襲するに決し、午前二時出發、新太郎勇躍之に從ひ、午前三時十分頃山河屯西方一粁の森林附近に於て、敵の監視匪二三名より射擊を受けたるも直に之を驅逐し、森林の西端に達するや、前方約四百米の家屋附近より猛烈なる射擊を受け、小隊は直に散開して該敵を攻擊し、漸次敵を包圍する如く前進す。此時新太郎磯本分隊の最左翼に位置し、率先勇敢に躍進又躍進、然も沈着正確なる射擊を以て敵に大なる損害を與へたりしが、敵線より約二百米に達せし時、不幸敵の一彈は頭部を貫通し、遂に壯烈なる戰死を遂げたり。敵は死屍三を遺棄して潰走せり。新太郎功績拔群を以て、即日步兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

新太郎性質溫順にして篤實、基督敎を信じ、孝心特に深く常に其の母を慰藉せんがため苦心の跡歷然たり。軍隊入營の後は特に軍務に精勵して成績優良、上下の信用厚かりき。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　稲木信行

稲木信行は、東京市淺草區榮久町四十五の人にして、父を貞二、母をたけと云ひ、大正三年九月一日生なり。昭和二年三月市立淺草精華尋常小學校を卒業し、次で日本大學第一中學校に入學、昭和七年三月同校を卒業し、昭和九年十二月現役兵として歩兵第三十八聯隊に入隊し、同月七日留守隊を出發し、同月十五日齊々哈爾に到着、初年年教育を受けつつ同地の警備に任じ、衛兵其他の勤務に服して、終始熱心誠實に服務し、以上の功績顯著なるものと認められたり。

昭和十年五月十四日以降、聯隊主力が第二獨立守備隊奉季討伐に參加出動するに方り、留守隊として齊々哈爾兵營に駐まり、僅少なる兵員と共に日夜繁激なる警備勤務に服し、精勵努力以て警備の重任を完うしたり。又同年九月中旬より十月中旬に至る間、第二獨立守備隊の秋季討伐に參加し、中隊と共に吉林省舒蘭縣東曾家船口に分駐し、匪賊討伐並に治安工作に從事し、九月二十九日は伊藤小隊救援のため中隊主力と共に長途楡樹縣大干屯に急行同附近掃蕩のため寢食を忘れて活動すること數日、該地附近一帶の肅正を完うせり。又十月三日は德惠縣家店附近に於て匪賊と交戰し、雨飛する敵彈を物ともせず勇敢に勤作して遂に敵を擊退し、同月四日は九臺縣橡子貝附近に於て匪賊約二百と交戰、之を擊破して兵器彈藥若干を鹵獲したり。以上の功績優秀と認めらる。

尙ほ同十年十月十八日午後六時德惠縣小董家駝子附近の敵匪を夜襲するに際しては、信行第一小隊機關銃分隊七番彈藥手として之に參加し、大濕地帶に於て百難を排して彈藥の搬送を爲し、戰鬪酣なるに及びては敵彈雨飛の下を潜りつつ、迅速に彈藥を補充して機關銃の射擊威力發揚にの些の遺憾なからしめたり。次で射手藤原上等兵戰死するや直に之に代り其他死傷相次ぐに至るも信行更に勤ぜず益々勇を尅し沈着正確に銃を操縱して敵に猛火を浴せ、敵の逆襲を二回まで擊退せしが偶々敵の一彈は信行の腹部及び太腿部を貫き、遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

信行性質溫厚篤實にして然も剛勇なり。特に忍耐克己の氣象に富み、入營以來諸規定の履行確實、服務熱心眞面目にして其の成績極めて良好、上下の信用淺からざりしが、遂に戰場の華と散り、隊內一同痛く之を哀悼したり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　伊藤史典

伊藤史典は岐阜縣稻葉郡鵜沼村の出身にして、大正四年十一月十日生、父を桑三郎母をしげと云ひ、大正十一年四月鵜沼尋常高等小學校へ入學昭和五年三月卒業、同月鵜沼農業補習學校へ入學同八年三月優良の成績を以て卒業し、進んで同校研究科に入り同十年十一月一學年修了せしが、同十二月一日現役兵として、歩兵第三十五聯歩第十中隊に入營、同十四日滿洲派遣の爲め宇品港出帆勇躍征途に就き、同十八日大連上陸、關東洲通過同十九日遼陽に到着し、同日より翌十一年二月二十七日に亘り、遼陽にありて兵器被服其他多數荷物の搬送及開梱等に勵め、爾來繁激なる警備諸勤務に從事し、日夜精勵以て其任務を完ふせり、二月二十八日より春季討伐實施せらるゝや、同日遼陽出發以來數十里に亘る長途の行軍に依り、清原縣南雜木、興京縣境、桓仁縣境を經て、三月五日拐磨子に到着し、僅少なる人員を以て繁激なる警戒並に兵舍の設備等に任じ、終始一貫熱心に努力し以て克く其任を完ふし、鼓に出動の準備爲り、二月十一日友枝大尉指揮下自動車警乘輕機關銃手として、午前八時頃拐磨子出發、南雜木に向ひ前進中午前十時三十分頃、欠石嶺（旺清邊門南方約八吉）

附近に於て不意に紅軍匪約二百名と遭遇したるを以て、友枝大尉指揮の下に交戰す、當時縣公署より滿洲國警察員及地方人乘客を搭乘せしめたる共榮公司の自動車一臺と同行す、該自動車欠石嶺盆地に入るや、敵は不意に四方の山地より急襲射擊を開始せり、警乘隊は暫時車上より應戰しつゝ前進せり、然るに我が前進する方向前面の高地上にも敵匪陣地を占領しあるを認めたるに依り、玆に欠石嶺部落入口附近にて自動車より下車交戰す、攻擊開始するや東方より約七十名の敵は我に向ひ前進し來るを以て、射手たりし二等兵は直に此の敵に猛射を浴せ、多數の敵を殪したり、然るに尙敵は我前方二百米附近に近迫し、特に輕機關銃分隊に對し猛射を注ぎたり、此時警乘隊長は地形我に不利なると、四圍の敵情よりして西方家屋を據點として戰鬪するに決し、小銃及輕機關銃分隊に對し移動を命ず、輕機關銃分隊長は先づ小銃分隊移動の掩護射擊を爲すべく號令せるに、射手たる伊藤二等兵は益々沈着にして射擊を實施し、小銃分隊の家屋占據を迅速ならしめたり、然れども敵は多數を頼み愈々近迫し來りしに依り、二等步は勇敢にも敵彈雨注の中に半身を起して、敵情を視察し敵陣中匪群を指揮しある匪首らしきものを發見し、駿敏射向を轉じ正確なる點射を浴せたるに射彈に命中して其指揮者轉倒す（戰場掃除の結果匪首林綠好にして頭部爆創にて卽死しあり）然して一部の敵は近迫を續行せしも、他の大部は指揮者を失ひ、戰線混亂しある狀況に陷るを見るや、此の有利なる戰況に乘じ、二等兵猶も猛射を續行しありしが、不幸敵彈飛來殆んど同時に右胸部及左大腿部に命中す、然れども剛毅なる二等兵は更に屈せず射擊を續行す、時恰も左後方臺上より更に約七十名の匪敵前進し來り、小銃分隊は該匪に猛射中なるを知る、二等兵は既に身に二彈を受け鮮血に染まりながらも、前面の敵は輕機關銃にて殲滅すべき旨、大聲以て小銃分隊に通報し、依然として前面の敵に對し射擊を繼續せり、分隊長は二等兵の負傷を知るや、直に輕機關銃の猛射に依る銃の反動に堪へ兼ぬるを察し、澤田二等兵と交代せしむ、平素沈着にして剛膽なる二等兵は再び澤田二等兵の小銃を執り、尙も敵を狙擊中亦もや匪彈頭部を貫通し、流石剛毅の二等兵も戰運盡き玆に壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり、二等兵の勇猛果敢なる行動は實に鬼神も泣かしむべく、友軍の士氣を振作し、敵の匪首を斃して敵線を混亂せしめ、遂に友軍戰捷の素因を爲さしめたるものにして、其功績たるや眞に赫々たるものあり、卽日步兵上等兵に進めらる。

功に依り功七級金鵄勳章並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

史典責性溫厚にして剛毅の氣性に富み、父母に仕へて至孝、隣人と交りて情誼厚く、鄕黨の敬愛する處なりしが上下擧つて其戰歿を悼みたり。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　大須賀正榮

大須賀正榮は、香川縣大川郡小田村の人にして、父を熊三郎、母をヨネと云ひ、大正二年一月十九日生なり。昭和二年三月小田尋常高等小學校高等科一學年を修了し、後家業農に從事せしが、昭和八年十二月二日獨立守備步兵第十二大隊第三中隊に入營し、同日より滿洲事變に關する業務に從事し、九年四月一日より五月十七日に亘りては新站附近の警備に當り、此の間司令部警戒列車警乘等繁劇なる諸勤務に精勵し、又第三、第十兩師團の輸送を掩護し、四月中は馬鞍山附近及び六家子附近に出動して匪團の討伐に參加し、以上の功績優秀なるものと認められたり。

同九年五月十八日以降春季討伐に參加し、恰も雨期に際會せしため、道路泥濘河川氾濫し行動困難を來し、又惡疫流行せる間に於て、志氣旺盛にして勤務に精勵せり。然して其の主要なる行動を擧ぐれば、海林東京城間の糧秣輸送、鏡泊湖東岸地區の討伐、和尙屯三魂石附近の奇襲、二道溝の肅淸、頭道河子、三道河子、圍山子等各地附近の掃蕩等各地附近の

掃蕩等なりとす。又九年六月十五日は四吉通及び山咀附近に集結しある匪賊の巣窟を討伐するに方り、第二小隊に屬して連日連夜豪雨を冒し行動し、匪賊を擊攘し、爾後圖寧線並に東京城附近の警備を爲して翌十年四月に亘りしが、此の間に於て十年三月二十日老廟嶺附近に於て匪首齊林の率ゆる約五十名を攻擊するに際し、正榮は第三分隊小銃手として、頑強なる敵に對し沈勇勇猛に動作して、攻擊を强行し敵に大損害を與へて之を擊退したり。以上の功績も亦優秀と認めらる。

同十年四月十日鏡泊湖守備隊に連絡の任務を有する北谷小隊に屬して同日未明東京城を出發し、尖兵たる藤本分隊に屬して小隊の前方約百五十米を大廟嶺に向て前進中、高地山腹の岩石重疊せる隘路内に差かゝるや、突如三方の高地を占領しありし約二百の敵匪より射擊を受け、尖兵は直に之に應戰せしが、敵は敵制の利を占め兵力の優勢を以て我を猛射し、我尖兵は苦戰の狀態に陷りたり。此時正榮奮然として敵に肉薄を企圖したるも敵火熾烈にして意の如くならず、已むを得ず匍匐して步々敵陣に向て前進しつゝ敵を猛射せしが、遂に分隊長以下數名の死傷者を出し、正榮も亦敵彈を被つて遂に悲壯なる戰死を遂げたり。然れ共この尖兵の勇敢なる犧牲的動作に依り小隊は戰鬪準備を爲すの餘裕を得て遂に敵を擊退せり。正榮の功績拔群を以て即日步兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

正榮性質溫順にして氣慨に富み、事に當りて熱心精勵なり。入營以來特に軍務に勉勵して成績優良、上下皆其の戰沒を惜みたり。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　渡邊千一

渡邊千一は德島縣麻植郡牛島村大字牛島の人にして、父を亮、母をタメと云ひ、大正四年六月二十四日生なり。昭和五年三月縣師範學校附屬小學校高等科を卒業、次で德島簿記學校に入校し、昭和六年三月同校卒業、同八年十二月獨立守備步兵第十二大隊第三中隊に入營し、新站附近の警備に任じ、翌九年一月二十四日以降、中隊主力は冬季討伐に出動の留守勤務として警備を續行し、少數兵員と共に至嚴の警戒を行ひ、從て頗る繁劇なる勤務に服して刻苦精勵せり。以上の功績顯著なるものと認めらる。

同九年四月一日より五月中旬に亘りては南部拉賓線の守備に任じ、此の間第三、第十兩師團の輸送、馬鞍山六家子附近の掃蕩を行ひ、同年五月六月の間は春季討伐に參加し、鏡泊湖東岸地區の討伐、和尙屯三魂石附近の奇襲等に加はりて勇戰す。即ち鏡泊湖東岸北湖頭附近に於ては、第八大隊と策應し、豪雨を冒し泥濘地を渡りて敵を攻擊し、和尙屯附近に於ては双山匪の根據を急襲して之を潰走せしめ、次で六月十五日四吉通及び山咀附近に於ては連日連夜の降雨を衝きて、匪賊の巣窟を襲ひ、遂に之を覆滅したり。以上の功績優秀と認めらる。

同九年六月下旬より七月下旬に亘れる夏季討伐に方りては小銃手として之に參加し、勇敢機敏に動作して戰功多し。即

ち六月中は東西青溝子松乙嶺附近の掃蕩、七月十五日五道溝南方密林地帶の共産匪巣窟を急襲し、同十七日房身溝東側高地、十八日二道溝、十九日三道溝、二十一日小チヤーチー溝、二十二日大チヤーチー溝等の討伐に參加し、常に志氣旺盛に率先奮鬪し、以上の功績も亦優秀と認められたり

同九年八月以降北部國境線建設掩護、六道河子附近の戰鬪、遼陽の守備を經て、十年三月下旬林口に移駐し、同地附近の警備に任じたりしが、同十年六月二十六日奎山分遣隊長指揮の下に、小銃、輕機關銃各々一分隊自衛團員七名を以て、奎山北方部落にて掠奪中の匪賊を攻撃し、之を追撃して馬匹三頭を鹵獲せしが、敵は增援を得甚しく優勢となりて我を反撃し來り、我部隊は決死奮戰中、輕機關銃手小林一等兵戰況報告のため出發するや、千一之を受繼ぎて敵を猛射し敵に大なる損害を與へたるが、既に彈藥を射耗するも敵勢衰へず、遂に隊長以下敵中に突入し、悲壯なる戰死を遂げたり。千一功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

千一性質温厚篤實、事に當りて熱心精勵なり。其郷に在るや親に仕へて至孝、陣中よりも屢々書を父に寄せて慰撫たしり。父よ加餐健在なれ、千一の遺靈は永く父母の身邊を護り、家運を隆昌に導かん、遺族一同の自重を願る。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級

小島清一

小島清一は新潟縣北魚沼郡吉谷村大字西吉谷の人にして、父を萬吉、母をヨシと云ひ、大正三年二月二十日生なり。大正十四年三月二俱尋常小學校を卒業し、次で同地青年訓練所に入所して修業す。昭和九年十二月歩兵第七十四聯隊に入營し、惠山鎭に於て國境守備の任に在りしが、後編正改正に依り歩兵第七十五聯隊に轉屬せられ、昭和十年五月十日會寧出發、同日琿春に到着、間島臨時派遣隊琿春支隊機關銃隊に編入せられて、琿春附近の守備に任じ、衛兵巡察傳令等の諸勤務に服し、又土門子鎭安嶺守備隊に對する糧秣補給掩護に任じ、克く其任務を完うせり。以上の功績優秀なるものと認められたり。

同十年六月下旬より七月上旬に亘りては關東軍測量隊の掩護として連日連夜勞苦を意とせず、或は斥候となりて匪情を偵察し、又は警戒のため微宵の哨兵に服して精勵し、殊に六月三十日金蒼附近の掃蕩に當りては連日の降雨に因る惡路を跋渉して活動し、以て小隊の任務達成を容易ならしめたりしが、同年八月十八日より同月二十二日に亘れる長嶺子附近の戰鬪に際しては不眠不休の活動を爲し、殊に二十二日は內田軍曹以下五名の斥候に加はり、小隊の進路上に先行し、斥候長を輔佐して勇敢機敏に行動し、敵の歩哨を急襲して之を刺殺し、次で攻撃戰鬪間は小隊の最左翼に在り正確なる射撃を以て敵を制壓し、遂に敵を撃退するや、先頭に立ちて追撃に移り、敵の一部反轉して我小隊の左側に迫らんとするを知り機を失せず之を小隊長に報告し、且つ此の敵の先頭にありしものを射殺し、敵の企圖を挫折し小隊をして危殆を免れしむ

ることを得たり。然れ共此の間不幸敵彈を頭部に受け貫通銃創に因り戰死せり。滑一功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

滑一性質溫順にして沈毅、事に當りて熱心奮勵す。其の鄉に在るや、父母に孝養を盡し、人と交りて圓滑、殊に朋友間に人望あり。入營以來服務極めて眞面目にして、些細の表裏なく、特に長上を敬し同輩に信義厚く、諸成績優良にして上下の信賴厚かりき。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　桂川富雄

桂川富雄は岐阜縣惠那郡加子母村の出身にして大正三年十月七日を以て生れ、父を喜之助母をていと云ひ、昭和四年三月惠那尋常高等小學校卒業後、父母の膝下にありて、家業に精勵せり、資性溫厚篤實、父母に孝養を盡し、隣人と交りて情誼厚く、鄉黨皆之を敬愛せり。昭和九年十二月一日現役兵として、歩兵第六十八聯隊留守隊第八中隊に入營し、同月十二日滿洲派遣の爲め屯營出發、十四日宇品港出帆、釜山を經て十九日拔河着原隊に入り、酷寒並危險を冒して、教育訓練を受けつゝ傍ら克く上官の命に從ひ諸勤務に精勵し、該埠附近の治安維持並北鐵の掩護に多大の貢獻する處あり、北鐵讓渡調印の期迫るや、彼我の風雲隱かならず、此時に當り接受前後、十年三月十五日より約一ヶ月に亘り、磨刀石掩護隊として、之に任じ日夜極めて繁激なる諸勤務に精勵せり。尙此間春季討伐に參加し、積雪膝を沒する、大密林中に敵の足跡を訪ね、或は根據を索めて追匪すること一週間、戰を交ゆること一回、根據を燒くこと九ヶ所に及ぶしが克く困苦に耐へ終始積極的に奮鬪し、以て遺憾なく其任務を遂行せり、續いて再び拔河附近の警備を終へ、七月三日より寧安東南方地區の警備並國道建設掩護の任に就き、常に積極的掩護に努力し、此間討伐に參加すること五回、殊に七月十日中隊主力が、平南洋、占中華匪、約二百を盧家屯、北方高地に包圍攻擊するや、左包圍部隊に屬して、敵の背後より猛烈に攻擊し、遂に敵をして同高地を捨てゝ敗退するの已むなからしめ、續いて新官地方面に追擊し、敵の退路遮斷の任務を受くるや、長驅挺身、既に新官地北方高地の陣地に據れる、敵に對し猛烈果敢に攻擊し、敵をして殲滅に歸せしめたり。其功績たるや偉大なりと謂ふべし、此間歩兵一等兵に進めらる。

十年九月廿八日より秋季討伐開始せらるゝや、一等兵亦之に參加し、連日連夜酷寒と戰ひ、困苦缺乏に耐へ、常に勇敢に活動し、戰鬪二回討伐七回の多きに及び、就中十月十四、五日馬廠南方地區の戰鬪に際しては、第一小隊第一分隊として之に參加し、危險を冒して、占中華愛民天好匪約百名の潛伏せる、家屋を包圍し、狼狽せる敵匪に對し、沈着勇敢に攻擊し、敵の敗走に乘じ之を終夜腰嶺子南溝方面に追擊し、遂に全滅に歸せしめたり、次いで、前日來我討伐を巧みに逃避せる、占中華は西扁嶮子西方納八紆東北岔に、本據を新築し跳梁極まりなき情報に接し、十一月五日、之を奇襲し、占中華の副官以下二名を捕虜とし、五名を斃し、阿片其他多量を鹵獲し、凍結期を控

へたる、彼等に致命的大打撃を與へたり。後東京城附近の警備に任じ、克く其任務を完ふせり、十一年二月二十八日午前八時平南洋匪約二百五十名東蓮花泡に蟠居しあるを偵知し、中隊は之か討伐の爲め直に出動し、東蓮花泡西南方約四吉の地點に於て、敵匪を捕捉し、交戰三時間にして之に殲滅的打撃を與へたり、一等兵又第一小隊第一分隊として參加し、最初より火線にありて勇戰奮鬪せしが敵は陣地内岩盤を巧みに利用し、頑强に抵抗す、我軍益々正確なる射撃と、果敢なる突撃とを反覆互用しつゝ、敵陣深く突入し、敵最後の據點と待む、陣地に對し、至近距離に近迫し、正に突撃に移らんとす。時恰も第一分隊直前の岩穴を利用し、猛射しある數名の敵あるを知るや、一等兵は奮然として敵中に突入せり、此時戰運拙なくも、敵彈頭部を貫通し重傷を負ひ、其場に倒れたり、直に看護兵に依り、應急手當を受け、病院に收容されたるも、手當の甲斐なく翌二十九日午前三時十分偉名を青史に遺し遂に戰傷死を遂ぐるに至れり、即日歩兵上等兵に進められる。

功に依り金鵄勳章功七級並勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　大野由春

大野由春は、埼玉縣大里郡武川村大字上原の人にして、昭和八年十二月獨立守備歩兵第十四大隊第二中隊に入隊し、翌九年一月二十一日より中隊と共に凌南縣の警備に當り、巡察斥候自動車連絡警戒援護等繁劇なる警備勤務に服し、又同年二月三月の間は奉山線の警備として綏中山海關興城等に在りて服務し、又黑河國境警備のため興安嶺の雜路を踏破して急進し、以上の功績顯著なるものと認められたり。

同九年四月より翌十年一月末に亘りては、北黑線建設掩護並に黑河附近の警備に任じ、松樹溝瑷琿七土杆小興安等の各分遣隊に服務し、屢々斥候巡察に任じて危險地帶に出入往來し、中隊の任務遂行に貢献せる所多大なり。同年十一月三日南二龍に襲來せる匪首占國領以下を邀撃して之を潰走せしめたり。然して十年二月中編成改正の業務に從事し、傳令兵器被服の梱包諸材料等の輸送を爲し、編成完結の上獨立歩兵第十一大隊第七中隊に編入せられ、第四分隊に屬して興隆附近の警備に任じたり。

同十年三月七日警備區域たる半壁山及び其附近部落に匪首孫永勤の率ゆる約百五十襲來し、掠奪中なる情報に接し、之れが討伐の爲出動するに方り、由春輕機關銃第四分隊射手として之に從ひ、嶮惡なる山道谷地を急進して匪情を捜索し、三月八日匪賊の大洞沟附近に在ることを偵知し、同地に向て前進中、同部落端に於て匪賊隊と遭遇開戰するや、由春勇敢機敏に動作して敵を攻撃し、之を潰走せしめたり。然るに越へて九日午前十一時五十分滿洲軍隊は大洞沟北方に於て不意に匪賊と衝突し、苦戰中なるの通報に接し、小隊と共に急速之を救援し、敵の猛火を冒して嶮峻なる岩山を攀登し、午後一時五十分有利なる陣地を占領して敵匪に猛火を浴せ、遂に敵を撃破して滿洲國軍の危急を救出し、次で左前方高地の要點を占領せんとし、敵火の下に在り沈著勇敢に射撃中、敵彈の爲左胸部より右大腿へ盲管銃創を被り、遂に壯烈なる戰死

を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

由春は父を丑五郎母をナミと云ひ、大正二年生にして、大正十五年郷里の小學校を卒業す、性質溫良にして責任觀念强く、又勤儉の美風あり、在營中官給の手當を節用して百金餘の貯金あり。母は由春の入營前死亡し、父は武川村の家に現住す。筆者は特にこの遺族の將來に多幸ならんことを願る。

陸軍騎兵上等兵勳八等功七級　本多康市

本多康市は長崎縣高來郡小濱町の出身にして、大正四年二月二日生、父を平造母をシカと云ひ、昭和四年三月小濱尋常高等小學校を卒業し、直に滿鐵工場見習養成所に入り、昭和八年四月十五日右卒業、同廿六日滿鐵に入社し、服務精勵中同十一年三月七日獨立騎兵第十一中隊に入營し、第一期教育訓練の傍ら、繁激なる警備諸勤務に熱心精勵し、以て克く其重任を完ふせり、所屬中隊は六月十六日より治安肅正の爲め、警備地區内に潜入せる、周永久を匪首とする合流各匪の徹底的殲滅を期し討伐に出動す、此時本多は大行李掩護の機關銃分隊要員として參加し、酷熱百度餘の炎暑を意とせず、大行李自動車と共に、連日連夜道なき處を辿りて萬難を排しつゝ、中隊主力への糧秣彈藥等の補給に支障なからしめたり、就中六月二十九日喇嘛前山附近の戰鬪に於ては、機關銃分隊一番銃手として機敏なる機關銃の卸下陣地侵入並に迅速なる積載に任じ、機關銃をして戰機に合せる威力を發揮せしめつゝありしが、吳同花附近に達せるとき、敵匪團の韓家窩堡方面に東走するを發見し、分隊は該匪の退路を遮斷せんと欲し、敵匪の主力を超越し約五、六十の匪團と同時に韓家窩堡村落に突入す、此時敵彈一齊に我自動貨車に集注され、瞬間に自動貨車の車體に數發を受けたり、玆に於て本多は拳銃を以て率先至近距離の匪團に猛射を浴せ忽ち數名を射殺す、時遇々自動貨車は其進路の前方小地隙の爲め、方向轉換の暇なく全速にて之を跳飛し大衝擊を受け急停止す、戰友本能的に相扶け危く轉落を免れたり。此時敵匪の猛射益々烈しく自動貨車に注がれ、本多亦た數彈を受けたるも更に屈することなく、能く猛射を續行し敵匪をして車體に近接せしめず、此機に乘じ分隊は安全に村落を突破し敵匪の退路を遮斷し、遂に敵をして殲滅に歸せしめたり、然るに本多は更に一彈頭部に命中し再び起つ能はず、玆に壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり、本多の勇猛果敢なる行動は皇國軍人精神の發露にして、武人の龜鑑として永く戰史に赫々たるものあるべし、即日騎兵上等兵に進めらる。

功に依り金鵄勳章功七級並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

本多資性溫厚篤實にして父母に仕へて至孝又交友に情誼を盡し鄕黨皆之を敬慕したり、嘗つて父平藏渡滿したる際に於ける本多の父に對する周當なる孝養振りは他の兄弟の遙かに及ばざる處なりと云へり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　狩集俊夫

狩集俊夫は鹿兒島縣川邊郡笠砂村大浦の出身にして、大正三年二月二十八日生、父を彌右衛門母をハツゲサと云ひ、郷里小學校を卒業し後昭和九年十二月八日現役兵として獨立守備歩兵第二十大隊第一中隊に入營し、同日より翌十年四月八日に亘り、鐵嶺に駐屯し、初年兵として猛烈なる教育訓練を受けつゝ、附近の警備に服し日夜繁激なる警備諸勤務に精勵し以て、警備任務を遺憾なからしめたり、四月八日大隊移駐の命に接するや、全員協力一致兵器被服其他各種物品の梱包並に輸送業務に邁進し、濱江省濱綏線横道河子移駐業務を遺憾なからしめたり、而して移駐後翌十一年四月二十日に亘り濱綏線沿線の警備に任ず、其間十年六月一日歩兵一等兵に進めらる、當時濱綏線沿線は北鐵接收直後にして、治安未だ確立するに至らず、匪首趙尚志、仁義、海龍、心順、等の大小匪群各所に蟠踞し、或は列車襲擊を企圖し又沿線部落を襲ひ良民の拉致物質の掠奪等其兇暴なる行爲は枚擧に遑らず、玆に於て十一月十六日より十二月六日に亘り、第二十大隊勃利以西地區秋季討伐實施せらるゝや、一等兵之に參加し、牡丹江出發以來連日殆んど不眠不休の努力を續け、人員寡少を以て貨物の輸送に任じ、時々酷寒積雪を冒し、又道路なき山間僻地を踏破し、所有困苦と闘ひ、常に積極的行動に依り、以て大隊作戰行動をして計畫遂行に貢献する處大なるものあり、十一年四月二十日より第二特設遊擊隊か三江省依蘭縣二道河子及大平鎭附近の討伐を行ふに當り、一等兵は中隊指揮機關に屬し參加す、其間各地に轉戰し、命令通報、報告の傳達、友軍各部隊間の連絡等に活躍せしが、五月十一日中隊依蘭縣西湖景附近高地に蟠踞せる趙尚志匪約二百を包圍攻擊するに當りては、尚も中隊指揮機關に屬し、前日來の疲勞困憊も更に意とせず、敵彈雨下危險を冒し、傳令として命令通報を傳達する等、最も敏速確實に活躍せしが、偶々中隊主力が一方高地の敵を擊退し其陣地を占領し、前んで前方高地の敵を攻擊せんとするに當り、敵匪は中隊の猛射追擊の爲め、退却の機を失し中隊の南側反射射面死角内に潜伏しありしが、彼等は其南方高地よりする、敵の猛射に勢を得、陣地の奪還を企圖するもの丶如く、各銃を構へ猛烈に逆襲し來れり、此時中隊長の左後方にあり機關銃小隊との連絡に活躍中の一等兵は、中隊長に向ひ肉迫し來れる敵匪に對し、猛然突進し直に敵匪二名を射殺し、續いて前進攻擊中不幸敵彈命中し、玆に壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり、此迅速機敏なる行動に依り、敵匪の逆襲を挫折せしめ、中隊爾後の戰鬪をして最も有利ならしめ、且つ中隊長をして事無きを得せしめたり、其功績たるや實に偉大なりと謂ふべし、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り金鵄勳章功七級並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　中知守

中知守は福岡縣三井郡大城村大字稻數の人にして、父をメ吉、母をタケヲと云ひ、大正三年九月二十四日生なり。昭和

四年三月大城尋常高等小學校高等科を卒業し、其後農業に從事して勤勉せり。性質溫順にして至孝なり。家素より富裕にあらず、守弟妹を勵ましつゝ家業を營み、又時に筒後川改修工事の人夫として勞働に服し、以て父母を助け家計を補助したり。隣人皆之を感賞し、常に之を敬愛したり。守昭和九年十二月獨立守備歩兵第十一大隊第三中隊に入隊、雙城堡に位置して北滿鐵道の守備並に同地附近の警備に任じ、恪勤精勵此間の功績顯著なるものと認めらる。

同十年三月下旬より四月末に亘れる春季討伐に際しては、兵力僅少なる討伐部隊内に在りて克く上官の命令に遵ひ、繁劇なる警戒勤務に服し、小城子四家房等の分遣隊に服務し、又は裝甲列車の勤務に服し、或は巡察に又は斥候歩哨等に服して晝夜兼行、各地に於ける匪賊を討伐掃蕩し、又治安工作に盡瘁し、以て本期討伐の目的を達成せしめ、同年六月下旬より八月末に亘りては夏季討伐として、德林匪を索めて之を擊滅せんとし峻嶺を越へ、密林を過ぎ、又は深さ膝を沒する泥濘を渡り、炎熱燒くが如き中に於て宿營給養の粗惡に堪へ、幾多の困缺を忍びつゝ行動するもの約二箇月、此間刻苦精勵にして中隊の任務遂行に貢獻せる所甚大なり。以上の功績優秀なるものと認められたり。

同十年十月八日德林匪約三十名四家房東南方約三里の谷地に在るを知り、第三中隊長は之を討伐せんが爲め出動するに方り、守は第一小隊第一分隊に屬して午前九時六道嶺驛に前進し、次で中隊の尖兵となりて前進し、倭樹雜草の繁茂し行進困難なる地形を跋涉して目的地に進出し、匪群の情況を偵知して之を中隊長に報告し、中隊長は直に此敵匪を攻擊するため所要の部署を定む。此の際守は獨斷手榴彈を出し、匍匐して潛行漸く敵に近接す。敵匪は中隊の猛擊を受け家屋に據りて頑强に抵抗し、守挺身家屋に迫りて手榴彈を投ず。轟然たる音響と共に黑煙立ち上り、中隊の各員は之を機として一齊に猛進したり。守は更に家屋内に突入し忽ち數敵を斃したるが、敵匪首の拳銃彈に中りて遂に名譽の戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

守性質溫順にして沈勇なり。入營以來特に軍務に精勵して成績優良、上下皆其の戰歿を惜みたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　中村勇次郎

中村勇次郎は靜岡縣富士郡須津村中里の人にして、父を豐作、母をとめと云ひ、大正二年四月一日生なり。大正十四年三月須津尋常高等小學校を卒業し、後大工職徒弟となりて精勵中、昭和九年一月現役兵として靜岡歩兵第三十四聯隊に入營し、同年四月一日編成下令、同月十八日靜岡を出發し、敦賀清津を經て四月二十四日哈爾賓に到着し、第四中隊に編入せられて同地の警備に任じたり。

同九年四月二十五日より同年十一月末に亘りては哈爾賓の警備を繼續し、此の期間に於て帽兒山北方地區其他の匪賊討伐に出動し、或は賓縣派遣隊の爲彈藥護送に任ずる等、終始一貫繁劇なる勤務に服して精勵し、又連日降雨のため道路泥

際深く行動極めて困難なる間に於て幾多の困缺を忍びつゝ活動し、殊に十月中師團の秋季討伐に際しては大隊本部傳令として之に參加し、又濱江地區の秋季大討伐に參加し、終始積極的に活動して本期討伐の目的達成に貢献せる所鮮少にあらず。以上の功績優秀と認めらる。

同十年二月十三日より同年三月中旬に亘りては、二層旬子附近の討伐肅清に從事し、就中三月二十七日拉子溝附近、三月六日牛角溝附近、三月十四日頭道河子附近並に翌十五日馬家店附近の戰鬪に際しては、率先陣頭に立ち、勇敢機敏に動作して敵を攻擊し、又同年四月下旬より同年六月下旬に亘りては、五常縣附近並に十二號附近の戰鬪に於て第二分隊に參加して奮戰し敵に大なる損害を與へたり。殊に六月二十日第二分隊に屬し大荒勾西南方高地に於て兵匪の一群を認め、之を攻擊せしに敵は輕戰の後退却せしを以て、小隊長の命に依り勇次郎外三名は第一分隊と共に之を追擊せり。然るに其後方に約三百名の敵匪あるを知り、小隊長は之を攻擊するに決し、森軍曹をして第六分隊に勇次郎外三名を併せ指揮し、敵の右翼を包圍せしめたり。森軍曹の部隊敵の右翼に近接するや、敵の猛射を受けたるも勇次郎沈着剛膽に動作し、且つ正確なる射擊を以て敵を制壓せしが、敵は兵力の優勢を恃み、抵抗頗る頑強なり。森軍曹以下益々奮戰敵陣に迫り、其陣地前約二百米に達したり。此時不幸敵の一彈は勇次郎の右鎖骨附近を貫通し、鮮血迸るも之に屈せず、尚ほ十數歩進みて其場に仆れ、遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

勇次郎性質溫順にして剛毅、寡默にして事に當り熱心勉勵す。又孝心深く自分の小使錢を節して母に贈呈せしこと屢々なり。又勤儉の美德あり、戰死後鄕里に送還せられたる遺留品と共に約五十金の貯金あり。之れは勇次郎の遺言に依り小學校靑年會其他に寄附せられたり、眞に奇特と謂ふべし。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　吉田金藏

吉田金藏は東京市大森區南千束町三五〇の出身にして、父を安五郎、母をふくと云ひ、大正元年十二月七日生なり。大正十四年三月赤松小學校を卒業し、昭和八年在滿洲部隊へ入隊の爲、同年十一月二十九日東京驛を出發し、十二月十一日公主嶺に到着、同日獨立守備歩兵第十三大隊第一中隊に入營、滿洲事變に關する業務に從事し、昭和十年二月獨立混成第十一旅團歩兵第十一聯隊に轉屬、第六中隊に編入せられて、豐寧縣大灘に到着同地の警備に任じ、同年三月二十五日同地出發豐寧に至り、同地の警備に任じたりしが、同年五月二十四日歩兵上等兵に進められ、中華民國河北省遵化縣毛山附近の戰鬪に於て名譽の戰死を遂げたり。以下其歷歷中主要なるものに就き其概要を記すべし。

同十年二月下旬以降豐寧附近の警備に任じ、屢々要所の哨兵として徹宵の警戒勤務に服し又は巡察斥候に從ひて危險なる地帶に出入行動して敵情を偵察し、常に繁劇なる勤務に服して精勵せり。同年五月四日より第二小隊第一分隊に屬して

熱河省西北地區承德縣南部の兵匪討伐並に同地附近の警備に任じ、常に分隊長の指示を嚴守して各種の重要なる勤務に服したりしが、五月十三日は金寶河附近の匪賊を討伐し、勇敢機敏に行動して戰功を立て、爾後高杖子二道城等の警備に服して五月二十一日に至り、此の間の功績優秀と認められたり。

同十年五月二十四日河北省遵化縣毛山附近に陣地を占領せる兵匪を攻撃するに方りては、金藏第六中隊第二小隊第一分隊に屬し、沈勇正確なる射撃を以て敵を制壓しつゝ之に肉薄し、遂に分隊長熊切軍曹と共に突撃を敢行して、敵陣地の一部を突破して陣地の後端に達し、敗走する敵に猛射を加へて之を殲滅し、次で分隊長の命に依り更に前方なる突出高地に向て攻撃す、高地の陣地たる、其の正面は幅狹くして僅々五六米を出でざるも、山頂にして兩側は殆んど絶壁狀をなし、我は敵陣地の正面に於て巨岩の間を縫ふ如くして前進せざるべからざる狀況なりしが、金藏敵の猛火を冒して、手榴彈を敵に投じつゝ逐次に敵に肉薄し、遂に分隊の諸員に先ち、挺身敵中に突入し、立所ろに二敵を刺殺したるが、此時敵彈の爲め頭部に貫通銃創を被り、遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

金藏性質溫順にして剛勇なり。入營以來特に軍務に精勵、又服從の道を守り、同僚間の交誼厚く、上下の信用淺からざりしが、勇戰奮鬪遂に戰場の華と散りたるは可惜、然れ共其本分を完了して護國の神と祭らる、之れ男兒の本懷にあらずして何ぞや。金藏たるもの又地下に瞑すべきなり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　內山烈雄

內山烈雄は靜岡縣磐田郡龍川村横山の人にして、父を又次郎、母をよしと云ひ、大正三年十月二十三日生なり。昭和四年龍川尋常高等小學校を卒業、次で同地實業補習學校を卒業、青年訓練所の業を修了して、昭和九年十二月現役兵として歩兵第十八聯隊第二機關銃隊に入隊し、十二月十一日滿洲派遣のため屯營を出發し、圖們江を越へて同月三十日富錦に到着し、直に同地の警備に任じたり。

同十年一月一日より富錦の警備に任じつゝ軍事訓練を重ね、酷寒の下日夜精勵し、三月中旬優秀なる成績を以て第一期檢閲を修了し、數々衛兵巡察其他の諸勤務に服し、殊に三月四月の間は北境地區の春季大討伐に參加す、即ち輕機關銃第二分隊銃手として三月十五日富錦を出發し、寶清縣內の討伐掃蕩を行ひ、三月三十日凉水泉子附近にて匪賊の一隊を擊破し、爾後暗夜を衝き積雪を踏みて、三道林子二道林子硯臺山等の各地を掃蕩して四月九日富錦に歸還せり。以上の功績優秀なるものと認めらる。

同十年五月下旬より六月下旬に亘りては、同江方面に於て奉天好寶山等を匪首とせる約百五十の匪賊に向て討伐を實施す。本討伐間烈雄は機關銃第一分隊四番銃手として之に參加し、又六月十九日二十日七星崗附近の戰鬪に際しては、曉く

が如き炎暑の地を強行軍の後歩兵一小隊機關銃一小隊と共に敵を猛撃し、遂に敵を撃退し、又同年八月七日より同月十三日に至る間は、綏濱縣西北方地區にありし中夾五省の合流匪を攻撃するに方り、烈雄機關銃小隊第二分隊二番銃手として

同十年六月十一日延興鎮附近の戰闘に參加して偉功を立てたり。即ち七月下旬以來中夾匪等約百數十名綏濱縣西部に蟠居し、兇暴限りなく多數の犠牲者を出すに至る。玆に於て守備隊長は後藤大尉をして第八中隊二小隊缺第六中隊の輕機關銃一分隊機關銃一小隊を率ひて之を撃滅せしむ、烈雄機關銃手たり、八月七日綏濱に上陸、匪賊を追ひて延興鎮附近に至る。匪賊は船に依りて島に逃れ、之に據りて頑強に抵抗す。部隊は一舉殲滅を期し、風船に乘じ、以上に攻撃進出すれば敵彈飛ぶ雨の如し、我は重輕機關銃を以て之に應戰し敵前約二百米に達したる時、敵の一彈は將に彈丸を裝塡せんとして右手を擧げたる烈雄の上膊に命中し、鮮血迸るも烈雄屈せず、分隊長の命に依り射手を交代して自ら手當を施したり、斯くて遂に敵を撃退し得たるも、烈雄出血甚しく翌十二日戰傷死せり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

烈雄性質温順にして剛勇、其郷に在るの日父母に仕へて至孝なり。入營以來特に軍務に精勵して成績優良、上下の信頼厚かりき。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　宮野正作

宮野正作は、千葉縣香取郡本大須賀村松子の人にして、昭和六年三月津富浦高等小學校を卒業し、後家事農に從事せしが、昭和九年十二月現役志願に依り奉天舊東北大學内なる獨立守備歩兵第二大隊に定員外として入營し、第一期教育を受けて、翌十年二月第一期教育終了と同時に獨立混成第十一旅團獨立歩兵第十一聯隊第六中隊に編入せられて、二月二十三日奉天を發し、同月二十七日豐寧に到着し、爾後同地附近の警備に任じたり。

昭和十年二月下旬より同年五月初旬に亘れる豐寧附近の警備に當りては、近傍各地に示威行軍を行ひ又は衛兵巡察斥候等の諸勤務に服し、常に熱心精勵して中隊の警備任務遂行に貢献せる所多大なりしが、同十年五月初旬中は旅團の熱河省西地區承德縣地方の兵匪討伐に方り之に參加し、五月十日老梁附近の戰闘に際しては第二小隊第一分隊に屬して率先敵に肉薄し、我軍より投ぜる手榴彈の爆裂を機として敵陣地に突入し、忽さ敵匪三名を刺殺したるに敵兵狼狽大に動搖するや中隊小隊の全線一齊に突撃に移り、遂に敵の陣地の半部を奪取したり。然るに尚ほ敵陣地の右翼高地に側防洞窟現存し、同地點より我に向て猛火を送りたるため、爾後中隊の攻撃停頓し更に進捗を見ざるに至れり。此に於て正作は中隊長の命に依りて、巧に地形を利用し、前記の洞窟に向て匍匐近接し、洞窟の開口部に手榴彈を投入し敵を震駭せしめたり。中隊主力は此の機を利して敵陣地に突入し敵を撃退して其全部を占領することを得たり。然るに正作洞窟の敵を撃壊の後、高

地の稜線に出でて敗走する敵に向て追撃射撃を施行中、不幸敵彈のため右大腿に受傷し、翌十一日承德衛戍病院に入院せしが、同日歩兵上等兵に進められ、遂に戰傷死せり。功績拔群を以て左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

正作父を又太郎、母をぬいと云ひ、大正五年十一月二十七日生なり。性質溫順にして氣概に富み、事に當りて熱心精勵なり。入營以來特に軍務に精勵して、諸般の成績優良、特に上長を敬し同輩に信義深く、有爲なる下士官候補として隊內敬愛の的なりき。其の負傷當夜は夢の中に「君が代」を低唱し、又將に敵陣に向て突擊せんとするが如き言を發し、其の平素の心掛けと共に旺盛なる攻擊精神の一端も偲ばれて、聞くもの皆感動欽慕せりと云ふ。特に其の冥福を禱る。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　重富勝喜

重富勝喜は、福岡縣浮羽郡江南村大字江南の人にして、父を林太、母をシゲルと云ひ、大正五年十二月二十六日生なり。昭和六年三月江南尋常高等小學校を卒業し、昭和九年十二月三日獨立守備歩兵第十一大隊第三中隊に入隊し、初年兵教育を受けつゝ同地の警備に任じ、專ら北鐵線並に拉賓線の守備を擔任し、次で配備變更のため中隊と共に舒蘭に移駐し、爾後小城子四家房上營等の各分遣隊に服務し、又は裝甲列車の帶務に服し、常に勇敢に動作し、恪勤精勵にして其任務を完うせり。以上の功績優秀と認めらる。

昭和十年三月四月の交春季討伐に際しては舒蘭縣南部地區並に東部地區の討伐を擔任し、僅少兵員と共に比較的廣大なる地域に亘り討伐掃蕩を行ひて戰功あり。同年六月三十日は上營附近に蟠居せる德林匪を討伐するに方り奮戰して偉功を立てたり。卽ち德林匪は本春以來其兵力を分散して拉賓線の西部地區に侵入し、然も上營の西方牛心頂子より西干溝太平溝附近には多數の匪群蟠居しあり、近く上營附近及び拉賓線の襲擊を企圖しあること確實なる情報に接したる上營分遣隊司令來島軍曹は、部下九名を率ひ之を殲滅する目的を以て六月三十日駐屯地を出發し、上營驛の西方約三粁の一軒家に到着するや、前方の高地より射擊を受け、直に之に應戰、約十分間にして敵匪は西方に退却、其數約三十名なり、之を追擊するや、更に前方四五十米の高地より再び敵匪の射擊を受け、分隊は直に此敵を攻擊せり。然るに敵匪は密林の林緣を占領し、相當の防禦設備を施しありて抵抗頗る頑强なり。來島軍曹は部下を激勵しつゝ之を攻擊し、輕機關銃を以て之に猛火を注ぎ戰鬪愈々激烈となる。約二三十分の後敵線動搖せるを認め、益々勇を鼓して攻擊を續行せしに、敵は其戰線の兩翼に各々七八十名を下らざる兵力を增加延伸し我に向て猛火を送り我戰況稍不利に傾き二名の死傷者を出したるも、全員協力奮戰是努めたりしが、敵勢衰へず、來島軍曹以下決然敵の猛火を潛りつゝ敵中に突入し、遂に全員悲壯なる戰死を遂げたり。勝喜功績拔群を以て卽日歩兵上等兵に進められ後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

勝喜性質溫厚篤實にして責任觀念强く、熱心精勵にして成績優良、上下の信賴厚く隊內模範的兵士なりき。殊に其の最後に於ては、分隊長の命を遵奉して數十倍の敵に向て飽くまで攻擊を敢行し、力渴き矢折れ、遂に隊長を中心とし、全員枕を並べ、笑つて國事に殞れたるは、日本帝國軍人の代表的動作として萬丈の氣燄を吐きたるものなり。偉なるかな壯なる哉。其の勇名は竹帛に垂れ、千古之を仰かむ。勝喜以て瞑すべきなり。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　井上良藏

井上良藏は、奈良縣吉野郡下市町大字下市の人にして、父を辰三、母をキヨと云ひ、大正三年十月八日生なり。大正十年四月下市町尋常小學校に入校、大正十五年三月同校卒業の後は家業農に從事して精勵なりしが、昭和九年十二月一日奈良市なる步兵第三十八聯隊留守隊に入營、次で滿洲派遣の爲留守隊出發、同月十三日鴨綠江を通過して、同月十五日齊々哈爾に到著し、第三機關銃中隊に編入せられて、軍事訓練を重ねつゝ警備勤務に服し、酷寒を冒して奮勵努力、諸成績優良なりしが、翌十年三月第一期終了と同時に、中隊主力と共に同地南兵營に移りて、專ら警備の任に當り、恪勤精勵功績顯著たり。

昭和十年五月十四日以降は第二獨立守備隊第二次春季討伐として聯隊主力の出動するや、第三小隊に屬して之に參加し吉林省京圖線附近並に拉濱東方地區の討伐に從事し、大密林大濕地を行動し、連日不休克く疲勞を忍び困缺に堪へ、終始熱心精勵し、同年六月下旬以降夏季討伐に方りては舒蘭縣四道滴達に分駐し、同地方の掃蕩に從うと共に、假兵舍の改築補修、糧秣輸送、列車警乘、戶口調査の業務を擔任又は幫助し、日夜勤勉以上の功績優秀なるものと認められたり。

同十年九月一日以降は同守備隊の秋季討伐に方り、舒蘭縣東曾家船口に分駐し、九月六日機關銃上西分隊の一員として第十中隊に配屬せられ、同月九日楡樹縣大于屯に到着、同地に分駐して、比較的廣大地域の掃蕩を行ひ、同月十六日より伊藤小隊長の指揮を受け、九月二十五日は東三道溝に蟠居せる匪賊約四十を夜襲し、最後に機關銃を以て猛射を加へて大損害を與へ、兵器彈藥若干を鹵獲せり。越へて同月二十九日拂曉大于屯西北地區より匪賊の一隊南下中なりとの確報に接し、伊藤小隊長以下出動、西豪端に於て敵匪を擊退し、之を追擊し、下甸子に於て再び之に痛擊を與へ、更に敗敵を急追して松花江支流を越へ、同江本流の線に達するや、有力なる匪團と衝突し戰鬪愈々激烈となる。此時良藏分隊長の命に依り敵火の下を迅速機敏に行動して、機關銃を有利なる地點に据へ、猛火を注ぎて敵に大損害を與へたるが、午前八時十分携帶彈藥の全部を射耗し、遂に分隊長と共に敵中に突入し、立ろに數敵を殪したるも、敵彈を頭部に受け、遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日步兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

良藏性質溫順にして剛勇なり、殊に責任觀念强く在隊間の諸成績優良なり。入營後間もなく母死歿の報を受くるや、心中痛く之を悲めるは勿論なれども、良藏之に對し「私は日本男兒である個人の悲みのため御奉公を怠つてはならぬ葬式其他宜しく依賴す」との意味を返信せりと云ふ。其の決意の存する所も偲ばれて床し。特に其冥福を禱る。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　橋本龜一

橋本龜一は德島縣美馬郡口山村字宮內の人にして、父を浪次、母をイシと云ひ、大正三年九月十日生なり。昭和三年三

月宮內尋常高等小學校を卒業し、爾後家に在りて農業に從事せしが、昭和九年十二月獨立守備歩兵第十二大隊第三中隊に入營し、直に國寧線鐵道及び東京城附近の警備に任じたり。當時該地附近は匪賊群各地に蟠居し、鐵道工事の妨害、通信機關の破壞等を行ひ、最も至嚴なる警戒を要する狀況下に於て、危險を冒し少數兵員と共に分遣隊の勤務に服し、或は徹宵の衞兵巡察等常に重要繁劇なる勤務に服して精勵し以上の功績優秀なるものと認められたり。

同十年三月二十日老廟嶺附近の戰鬪に際しては、匪首齊林の率ひる約五十名を擊破し、同年三月下旬より四月上旬に亘れる鏡泊湖附近の討伐に際しては第二小隊第三分隊小銃手として之に參加し、山岳重疊せる密林地帶を行動し、嚴寒を冒し宿營給養の粗惡に堪へ、幾多の困苦と缺乏に堪へつゝ、旬日餘りの間殆んど不眠不休の狀態を以て活動をつづけ、然も龜一は克く分隊長の意圖に從ひ、進んで難局に當り、刻苦精勵にして、常に其任務を完うしたり。以上の功績も亦優秀なるものと認められたり。

同十年四月十日鏡泊湖守備隊と連絡の任務を有する北谷小隊は四月十日未明東京城を出發す。龜一は同小隊內の藤本分隊に屬し、此日尖兵として小隊の前方約百五十米に在りて前進せしに、大廟嶺北方高地山腹の岩石重疊せる疎林內の道路兩側高地上に岩石を疊み上げて掩體とし、巧に陣地を占領したる敵二百名の匪賊より猛烈なる射擊を受く、是に於て直に尖兵は應戰し、戰鬪漸く激烈となる。然るに敵は三方面より集中火を送り分隊は稍々苦戰の狀態に陷らんとす。此の時分隊は分隊長を中心に制圧して歩々敵に近迫せんとせるに、不幸分隊長は敵彈のため右股部を貫通せられ、龜一も亦一彈を受けたるが、兩名共に屈することなく、尙ほ攻擊前進を續行し、決死の勇を振ひて敵を猛射したり。敵兵少しく逡巡の色あり、分隊は斷然突擊に移らんとしたる一刹那、敵彈は龜一の右腋部を貫き、遂に壯烈なる戰死を遂げたり。然れ共尖兵分隊の勇猛果敢なる攻擊は、我小隊に隘路を進出して戰鬪展開を行ふの餘裕を得しめ、遂に敵を擊退したり。龜一功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

龜一性質溫順に氣概に富み、入營以來特に軍務に精勵して成績優良、上下皆其戰沒を惜み悼まざるはなし。鄉里に於ては盛大なる慰靈祭を擧行し、縣知事以下多數官民の禮拜あり。餘榮も亦大なりと謂ふべし。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　稻葉源吾

稻葉源吾は、奈良縣南葛城郡大正村楢原の人にして、昭和九年一月歩兵第三十八聯隊に入營し、同年三月十七日軍令に依り第三機關銃中隊に編入せられ、同月十七日屯營出發、同月二十五日齊々爾に到着し、直に同地の警備に任じ、衞兵巡察其他の陣中要務に服し、終始一貫熱心誠實に服務して其功績を認められしが、同年十月初旬より十一月中旬に亘れる第三師團秋季討伐に方りては、第一小隊第一分隊銃馬駄兵として之に參加し、吉林省濱江地區の討伐を行ひ、嶮峻を冒し、困厄を忍び、連日連夜殆んど不休の活動を爲し、以上の功績優秀なるものと認められたり。

昭和九年十一月より翌十年五月に亘り齊々哈爾附近の警備に任じ、五月六日の交は第二獨立守備隊の第二次春季討伐、七月末に亘れる夏季討伐に際しては、吉林省舒蘭縣四道滴達に分駐し、爾後引續き同年十月中旬に至る迄、第二次夏季討伐、秋季討伐に參加し、常に上官の命に從ひ、勇敢に動作し、殊に九月二十九日中隊主力と伊藤小隊救援のため吉林省楡樹縣大干屯に急行するに際して、勇躍之に加はり、常に率先勞苦を辭せず、遂に其目的を達成したり。以上の功積も亦優秀と認められたり。

次で同年十月德惠縣馬家店附近に於て匪賊の一隊を擊破せる際、及び九臺縣樣子貝附近に於て約二百名の敵匪を擊破したる際は、源吾小隊長の傳令として活動し戰功あり。然して同月十八日小董駝子に蟠居せる匪賊約二百五十名を夜襲するに方りては、源吾小隊長の傳令として戰線を馳驅し、敵の彈雨を潛りつつ、小隊長の命令を各分隊長に傳達し、又各分隊間の連絡を幇助して、小隊の戰鬪指揮を容易ならしあたり。此時小隊長敵彈の爲左腿部に受傷し行動の自由を缺けるに際し、敵は屢々攻勢に轉せんとして戰鬪益々激烈なり。源吾小隊長の傍に在りて之を守護し、且つ小隊長の戰鬪指揮を補助しつつ勇戰したりしが、偶々飛來せる敵彈のため、右腕及び左太腿部に重傷を負ひ一度其場に仆れたるが、其の時敵匪逆襲に轉じ來りしたため小隊長の部下を叱咤激勵せる聲にて再び覺醒し猛然厥起して、近接せる敵匪一名を刺殺し、尙ほ前進格鬪中、又もや頭部並に腹部に各々一彈を受け、壯烈極まれる戰死を遂げたり。功績拔群を以て、即日歩兵上等兵に進められ、後日左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

源吾父を吉太郎と云ひ早く沒し、母シマの養育する所大正二年二月生なり。性質溫順にして剛勇、殊に責任觀念旺盛なり。其の鄕に在るや母に仕へて至孝昭和元年小學校を卒業、後賣藥出稼を爲して家計を助けたり。渡滿の際も能く母を慰撫して出立せり。其の戰沒の日隣人皆母を慰問せるに母は「兼て覺悟はして居りました、出征の際村の方々より國旗を頂きたる際、是を先頭に思ふ存分働こうと云ひ、又老いたる母を宜しく賴みますと村の方々へ依賴して出立しました、剛氣の半面に現はれたやさしい心根が嬉しく思つて居ります」と語れりと云ふ。母よ健在なれ源吾の勇名は千古を輝し、その遺靈は永く母を守護せん、幸に自重せよ。

陸軍歩兵上等兵勳八等　瀧澤淳治

瀧澤淳治は、秋田縣雄勝郡三關村關口の出身にして父を儀男と云ふ。現役兵として秋田歩兵第十七聯隊に勤務中、偶々昭和七年四月五日滿洲派遣編成下令せらるゝや、同九日派遣隊に編入せられ同十三日秋屯營を出發し大連に上陸同廿一日溝帮子に到着し直ちに同地の警備に任じて同六月廿四日に亘りしが此の間日夜危險を冒し溝帮子停車場或は鐵路を警護し熱心忠實に精勵刻苦優秀なる功績を擧げて任務を完うせるのみならず、屢々討伐に出勤して偉功を奏したり。殊に五月十七日に於ける大桑林子、六月二日北沙嶺附近の各戰鬪に當りては、尖兵中隊として第一線の警戒に任じ苦熱を忍び有らゆる困難を排除して任務を達成し、遂に沙嶺を占領し中隊の目的達成に至大の貢獻を提したり。次いで全二十四日より、は所屬隊に從ひ東邊道掃蕩に出動、數日に亘り輸送、行軍、警備等に於て炎天と風雨を冒し困苦缺乏に堪へ、討伐の目的を達成して同年七月五日溝帮子に歸還し、前任務に從ひ同地の警備に復して同地停車場或は匪賊の橫行著しき青堆子驛等の警備に當り屢々潛伏斥候等に服し治安を確保せしが、此の期間に於ても北鎭、盤山線胡家窩棚驛附近、北鎭其の他に出動して匪賊の掃蕩に參加し功を樹て、同十月一日よりは北鎭に駐屯して依然溝帮子附近の警備に當り同八年二月廿五日に及びしが、此

の間亦屢々附近の討伐に從事して閔家甸子、法庫康平等に匪賊を掃蕩せり。次いで同年二月廿六日よりは熱河作戰に入り廿六日溝帮子を出發、朝陽に集中、川原挺身隊の一員として、或は葉壽、紅石轎桑其の他の戰鬪に參加、彈丸雨飛下に能く分隊長を輔佐して勇戰堅壘を奪取し、或は承德、豐寧等の警備に當りて不眠不休、飛行場の警戒又は自動車援護其の他治安の維持に精勵努力以て完全に任務を達成し優秀なる功績を認めらる。警河作戰了るや、翌五日一日以降は河北作戰に轉じ、中隊と共に金山庄南側隘路口附近を占領し密雲平谷道を警戒するため、同十九日午後六時金山庄西北方約千米の地點に達するや、金山庄南方高地に機關銃二を有する二百名内外の敵陣地を占領中なるを目擊し、其の左翼を包圍する如く攻擊前進せり。敵の抵抗頗る頑强なりしも肉薄又肉薄、遂に突擊を敢行し午後九時十分完全に全陣地を攻略し爾後一意其の確保に努めしが、此の間淳治は第一小隊第三分隊（輕機關銃）長として部下分隊を指揮し常に率先陣頭に立ちて勇戰し、殊に敵左側背の一要點を占領すべき命を受くるや、分隊を指揮し小銃一分隊と共に猛烈なる敵の側射を受けつゝ勇壯なる遭遇戰を惹起して敵左側背の一高地を占領せしも敵は此の要點に對じ再度の逆襲を試みたり。然れども淳治は紛戰亂鬪の中にあり毅然として陣地を固守し敵側背に猛射を加へつゝありしが、雨霰の如き敵彈の一は不幸淳治の右下腿部に命中し右下腿部貫通銃創を蒙りしも責務の重大なるを思ひ、依然猛射を繼續せり。之れが爲め敵は遂に抵抗を斷念し左翼方面より退却の兆を確せり。中隊主力は之れに乘じて突擊を敢行し遂に全陣地を攻略するを得たり。淳治の適切なる射擊は敵退の一大素因たるべく、特に其の負傷に屈せず中隊主力突入に至る迄射擊を繼續して之れを成功せしめたる功績は實に拔群なりと謂ふべきなり。斯くて淳治は翌五月二十日第八師堂密雲衞生班に收容せられ後鐵嶺病院に入院、同七月廿五日治癒退院、再び平原附近の警備に當り同年八月廿日に及ぶ間、屢々附近匪賊の討伐に出動し或は警乘勤務に從ひて治安の維持に効め任務を完全に達成せり。然るに偶々疾病に犯され同年八月二十日胸膜炎にて平泉衞生班に入班、同九月十八日内地に還送秋田衞戍病院に收容せられ加療中、同九年七月一日遂に病歿せり。然れども其の赫々たる偉勳は千載不朽なり。功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　藤原精一

藤原精一は、岡山縣倉敷市沖の人にして、父を齡太郎、母を佐代野と云ひ、大正三年七月二十二日生なり昭和四年三月倉敷市大高高等小學校を卒業し、次で大高農業補習學校後期第一學年修了、同地青年訓練所の業を修了して昭和九年十二月歩兵第七十八聯隊に入營、十二月十四日安北道新義州守備隊に到着、翌十年六月二日新義州を出發し、同日輯安縣外岔溝に到着し、同地の警備任じたり。

昭和十年六月三日より同年七月十三日に亘り、外岔溝守備に在りて同地附近の治安維持並に國境警備に仕じたりしが、當時該地附近には匪賊の横行出沒頻繁にして、民心極めて不安なる中に於て警備の任に服し、時々近傍各地に出動して匪賊を討伐掃蕩し、僅少兵員と共に連日連夜至嚴の警戒を爲し、屢々潛伏斥候其の他の勤務に服し、同地方一帶の治安維持に貢献せる所甚大なり。殊に七月五日匪首占林の率ひる匪賊三十名外岔溝北方高地附近に潛伏しある情報を得て之を攻擊殲滅せんとし、土岡小隊に屬して前進中、午前四時頃外岔溝北方約四粁なる頭道河子附近に於て該賊群を發見し、急遽之を攻擊するや、賊も亦直に應戰し、戰鬪漸次酣となる。此時精一分隊長の命に從ひて敵彈雨飛の中にありて勇敢に動作し猛烈に敵を攻擊せしに、賊は大損害を受けて潰亂敗走したり。精一功績優秀なるものと認めらる。

同十年七月十二日大齋軍曹の指揮下に潛伏斥候として外岔溝東方約千二百米なる大通天溝に位置して、當時約百名の匪

賊は外岔溝北方約二十粁なる水筒溝附近に侵入しありて外岔溝襲撃を企圖しあるに對して警戒す。然るに十三日午前三時頃敵匪數名前進し來るを發見し、之を斥候長に報告し該賊を包圍刺殺せんとし、斥候長の命に依り率先敵を包圍して、突然敵に向て突進し、忽ち敵の一名を刺殺したり。此の殺那他の匪賊より槍にて腹部を刺突せられ一度其場に仆れたるも之に屈せず、再び立上り戰鬪を繼續せしが、傷重くして遂に立つ能はず、分隊は敵を撃退せり。精一功績拔群を以て翌十七日歩兵上等兵に進められ、同日楚山病院に於て戰傷死せり。

功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を授け賜はりたり。

精一性質温順にして氣概に富み、責任觀念旺盛なり。遺骨郷里に到着するや倉敷市葬を以て篤く之を葬る。會葬者者一千餘名稀なる盛儀なりき。一門の榮譽も亦大なりと言ふべし。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級

牧野喜作

牧野喜作は新潟縣刈羽郡高柳村大字岡野町の出身にして、昭和八年十二月一日獨立守備歩兵第二大隊第一中隊に入營し

同日より奉天に駐屯し、猛烈なる教育訓練を受けつゝ、警備に服し、繁激なる警備諸勤務に日夜精勵し、翌九年四月二十六日第一期教育修了後、尚奉天に位置し以南十里河に至る間の滿鐵本線、蘇家屯以南姚千戸屯に至る間の安奉線、渾河、楡樹臺間の撫順線の守備並に瀋陽縣第一、二、四、五區の治安維持及奉天西南地區の警備に任じ、終始忠實積極的に行動し以て克く其任務を完ふせり、六月一日歩兵一等兵に進められる、十年一月三十日より三月五日に亘り冬季東邊道討伐開始せらるゝや、仲村小隊第一分隊に屬し之に參加し、濛江、臨江、撫松、金川縣の重大なる地域に亘り、連日連夜然も嶮峻なる山岳地帶を踏破し、所有困苦缺乏に耐へ、匪賊を索めて東奔西走し、各地の戰鬪に於ては常に率先勇猛邁進し貢献する處大なるものあり、終へて奉天に凱旋し再び鐵道守備に服し、沿線一帶の治安維持を完ふせり、七月十六日より八月二十日に亘り、東邊道夏季討伐に參加す、一等兵は所屬中隊が安東省通化縣第五區大泉源に位置し、同縣第四、五、六區の治安肅正及維持に任ずるや、選ばれて第二分隊の一員として之に從事せり、出動の途次稀有の大洪水に遭遇し、諸河川は共增水一丈五尺餘に達し、土砂の崩壞、電柱電線至る處打倒埋沒、又家屋の浸水流失、道路の破壞甚敷中隊の位置全く孤立狀態に陷りたるも、共間一等兵は克く分隊長の意圖の如く、日夜寢食を忘れ之等復舊工事に奮鬪努力せり、尚此間各地の掃蕩に活躍し、又通匪者の逮捕或は示威行軍又は糧秣

補給等常に積極的活動を續け、以て中隊の任務達成に貢献する處大なるものあり、續いて八月二十八日大泉源西南約十五粁小二道溝、小三道溝に紅軍匪首韓司令を主體とする、朝鮮獨立黨、愛民軍、愛國軍、登局好、西來好、金邊好、綠林好等の合流匪約二百蟠居跳梁中なりとの報に接し、小隊は中隊命令により直に該匪情偵察並に在富爾紅滿軍と連絡の爲め大泉源を出發し、龍鳳溝に到達し、小二道溝小三道溝の匪情を偵察するに依然蟠居し、匪首韓司令は該地附近の鮮人部落に獨立黨の組織を命ずると共に、日本軍の配備狀況を偵察し、日本軍來らば彈藥裝備優良兵力多きを以て、一戰を交へるも日本軍恐るに足らずと豪語し居るとの情報を得たり、玆に於て小隊は直に之を攻擊の目的を以て、砬子溝に向ひ前進す、當時一等兵は小野分隊に屬し、小二道溝背後の標高四八一高地上より、速に小二道溝前端に進出し、敵主力の標高三二八高地上に移動中を猛射し、爾後小隊右側を掩護すると共に敵牽制の任に當り、勇躍嶮峻なる山上を前進し、頑强に抵抗する敵を挾擊して之を擊退せしめ、此處に小隊主力と合し、更に依然火線にありて、敵彈雨の中敢然適確なる射擊を以て逐次敵を壓迫し、小隊戰捷の端を開きつゝ、敵前約百米に肉迫するを得たり、當時敵は地の利と衆を頼み益々猛射以て我軍に抵抗す、然るに分隊長の指揮下にありし、滿警は前進を逡巡するのみならず、地物に固着し後方に殘らんとするの風あり分隊長切齒扼腕怒號するも更に其甲斐なし。時恰も其最右翼にありし一等兵は直に敵彈雨を冒し、言語相違せる彼等を叱咤し、身振を以て彼等を前進せしめ之が監視に任じ、依然前方の敵に對戰す、然るに彼等尙遲々として期待に添はず、遂に彼等の彈藥を以て分隊彈藥の補充に任じ、數度往復の際不幸敵彈命中し、壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり、一等兵の勇猛果敢なる行動は滿警の火力增加を得ざりしも、敵をして我兵力を過大視せしめ、且つ適切なる彈藥補充は分隊の戰鬪力を增進し最後迄威力を發揮せしめ、遂に小隊の戰捷に基礎的素因を成すに至りしもにして、其功績たるや實に偉大なりと謂ふべし、即日步兵上等兵に進めらる。

功に依り功七級金鵄勳章並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

喜作は大正四年二月七日を以て生れ、父を寅吉、母をノイと云ひ、小學校卒業後高柳青年訓練所及高柳農業補習學校を卒へ、資性溫厚篤實、盡忠報國の念禁ずる能はず、滿十八歳にして現役志願せし、前途有爲の青年なりしが、惜しくも玆に名譽の戰死を遂げ、昭和十年十月二日村葬に依り盛大なる慰靈祭を執行せらる。

陸軍步兵上等兵勳八等　今龜藏

今龜藏は北海道空知郡美唄町字美唄の出身にして、昭和八年五月十八日、服役延期者交代要員として、混成第十四旅團に派遣の爲め、同十九日札幌出發、同二十日小樽港出帆、二十六日大連上陸、六月四日夏店着、直に混成第十四旅團第二十五聯隊第六中隊に編入されたり、中隊は六月十八日より九月十七日に亘り、建昌榮及遷安青龍縣の警備並遷安、擡頭營間の糧秣輸送監視に任じ、今一等兵又之に配屬され、雨期の候炎熱燒くが如く、加ふるに鐵道に遠隔しあり、給養意の如くならず、加之非衞生的なる支那民家にありて、長期間各種の困苦に耐へ其任務を完ふせり、續いて九月二十日より十一月十一日に亘り、錦熙警備並灤東地區の討伐に參加し、旅團長護衞及飛行場野戰倉庫衞兵等繁激なる勤務に任じ完全に之を遂行し、特に十月二十三日灤東地區討伐に際しては、連日連夜長途の難行軍且非衞生的生活等幾多の困苦缺乏に堪へ、勇敢機敏積極的行動に依り、中隊討伐に貢献する處大なるものあり、一等兵の士氣益々旺盛にして、爾後一等兵に期待するものありしも、不幸右濕性胸膜炎の爲め、混成第十四旅團衞生班に入班、十二月十一日內地送還、廣島衞戍病院に收容さる、此間步兵上等兵に進めらる。後本籍地に於て銳意加療中なりしも、病革まり十年三月三日遂に病歿す。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等　都築卯之吉

都築卯之吉は愛知縣幡豆郡一色町大字大塚字長池の出身にして、昭和七年十二月一日獨立守備歩兵第六大隊第三中隊に入隊、教育修業の傍鞍山附近の警備に任じつゝありしが、十二月十三日より中隊主力三角地帯討伐に出動するや、滿鐵沿線の配備兵力僅少なるに乘じ、匪賊の跳梁勃興し、鐵道運行妨害の續發に鑑み、依命直に少數の二年兵に伍し沿線守備に任じ、各驛並櫻桃園、首山水源地、立山水源池等の警備及蘇家屯、南臺間の警乘等繁激なる勤務に服し、晝夜不眠不休以て克く其任務を遂行せり、越へて八年一月二十三日主力部隊討伐を終へ歸還するや、守備勤務を交代し、續いて教育修業の傍鞍山附近の警備に任じ、次いで再び滿鐵沿線の守備に就き、屢々討伐に出動せり、三月十一日柳壕子附近の戰鬪に於ては、第三分隊に屬し參加す、我山砲分隊の攻擊に依り、敵匪逃走を開始するや、敵の頑強なる猛射の中を、直に自動車に依り急追し、自動車の路外行動不能となるや、泥濘中をも屈せず勇猛邁進し、迅速機敏なる行動を以て克く敵を追擊し遂に匪首奎首海龍等を斃し、賊匪をして潰滅に歸せしめたり、五月十一日より東邊道新賓警備に任じ、當時縣下に暴威を振ひ居たる匪首仁義軍、鐵血狹等の率ゆる合流匪約四百名、永陵街東北山地に集合し、近く新賓縣城を襲擊せんと企圖しあり、之を探知せし中隊は直に討伐實施す、此時二等兵は中隊長代理後藤中尉の指揮に屬し、安藤小隊第二分隊輕機彈藥手として參加す、夜半屯營を出發し、强行軍を爲す專數里嶮峻なる山地を迂廻し、敵の退路を遮斷し、之を包圍攻擊し勇敢に敵陣中に突入し、獅子奮迅の勇を振ひ、激戰の後敵に多大の損害を與へ、遂に潰滅に陷らしめたり、續いて平頂山附近の討伐、新賓縣東南方地區の討伐等各地の討伐戰鬪に參加し、常に率先身を挺して勇敢奮鬪し、以て克く其任務を完ふせり、特に十月十八日小石溝東南側高地附近の戰鬪に際しては、中隊長以下三十六名は、十月十五日以來占東邊の指揮する約二百名を急追すること四日、遂に小石溝東南側高地に於て敵を捕捉す、敵は比高五百米の突兀たる岩石の山頂に鹿砦を以て防禦しあり、加ふるに兵力著數優勢なりしを以て、頑强に抵抗したるも、二等兵等精鋭は克く勇敢機敏に奮鬪し、稜線を逐次占領し、遂に敵の本據山頂を陷落せしめ、敵逃走開始するや、愈追擊急にして、徹底的打擊を與へ潰滅に歸せしめたり、本討伐を終へ凱旋するや、十一月十三日より翌六年三月二十一日に亘り鐵道守備に任じ、克く其任務を完ふし引續き三月三十一日に亘り奉山驛並新民縣守備に就き、克苦精勵以て治安維持に貢献する處大なるものありしが、嗚呼天晴勇士も二豎に抗する術なく遂に入院の身となり內地送還歩兵上等兵に進められ、廣島衞戍病院に於て加療中、昭和十年五月二十六日病革まり遂に長逝せり、惜みても餘りありと謂ふべし。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　夏目一夫

夏目一夫は、靜岡縣引佐郡金指町の人にして、父を久吉、母をぶんと云ひ、大正二年月日其長男として生る。性質溫順にして質實剛健の氣に富み、事に當りて誠實、成就せざれば止まざるの慨あり。大正十四年三月金指尋常小學校を卒業し、次いで引佐農林學校乙種入學、昭和五年三月之を卒業し、靜岡縣農會地方技手を拜命し精勵中、昭和九年一月歩兵第十八聯隊第三中隊に入營し、同年四月一日臨時編成下令に依り、四月十六日屯營を出發し、同月二十八日佳木斯に到着、直に

同地附近の警備に任じたり。

昭和九年四月下旬より翌十年七月上旬に亘り佳木斯の警備中、謝文東を頭目とする匪團は駝腰子五道崗鐵嶺河附近一帶に暴威を恣にし、我が永豐鎭移民團は全く其包圍の中にあり、該地附近の秩序紊亂其極に達し、執拗なる敵匪は屢々襲撃を企圖し、匪賊密偵の横行、流弾の飛來等頻繁なりしかば、之れが掃蕩のため連日連夜の行動を爲し、勞苦を事とせず、日夜至嚴なる警戒姿勢を保ちたり。然して此の間九年四月二十九日、三十日横道河子附近の戰鬪には第二小隊第二分隊員として之に參加し、火線に在りて敵彈雨飛の下嶮峻なる高地に攀登して、猛烈果敢に敵陣地に突入し遂に之を奪取せり。以上の功績優秀と認めらる。其他戰鬪動作の主要なるものを左に記す。

同九年五月中旬より同下旬に亘り依蘭佳木斯富錦附近の討伐に参加、率先機敏に行動し匪賊の巣窟を襲撃して之を壊滅せり。同年九月下旬より十一月中旬に亘り師團の秋季討伐に方りては、師團通信隊無線小隊に配屬せられ、賓縣下帽兒山無線所員として通信業務に精勵し、以て討伐隊の行動を容易ならしめ、又三月四月の交北境地區の春季討伐に參加し、主として通信業務を擔任し、四月七日夾信子玉黑子八虎力等各部落の掃蕩に際しては、小銃第三分隊員として勇敢に行動し、十年五月六月の交湯原地區に於て夏雲楷匪約二百を第二小隊第一分隊員として日夜捜索警戒に任じ、黑金河西方山地に於ては匪賊の巣窟を急襲し、猛射を加へて之を破摧せり。以上の功績も亦優秀なるものと認めらる。

斯くて十年六月以來太平川附近の匪賊は轉々各所に出沒遊動し、湯原派遣隊長は約一週間に亘り、太平川屯附近討伐の後湯原に歸還せんとするに方り、重要なる報告書類提出のため酒井伍長以下十一名を七月七日午前太川屯を出發富霍屯、連江口を經て佳木斯守備隊に派遣せり。一夫亦選ばれて勇躍之に加はる。折柄百十度の炎天下、四里强を行軍して午後零時富霍屯部落に入るや、兩側の民家に隱れたる二百餘名の匪賊は突如此部隊に猛射を浴せ、次で民家を出て我を包圍せり。我兵勇戰一以て二十數名に當る激戰を演じ、包圍突破に努め敵十數名を倒したるも、此時敵の一彈は一夫の足先を貫通せり。沈勇剛膽なる一夫は之に屈せず尙ほ猛烈なる射撃を續行して敵を殪したるも、第二彈は又もや此勇士の頭部を貫通し遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日步兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍工兵上等兵勳八等功七級　山口亟一

山口亟一は神奈川縣高座郡大澤村大島の出身にして、父を蓊作母をタキと云ふ、大正十五年四月大澤尋常高等小學校を卒へ、直に大澤村立實業補習學校に學び昭和六年一月大澤村立青年訓練所に入所、同九年三月同修了後同十年一月廿日徵兵として、近衛工兵大隊に入營、二月一日編成下令同十一日出發征途に就き三月五日承德へ到着直に同地警備に任じ訓練に衞兵に寧日なく、又鐵條網或は銃眼構築等繁劇なる勤務に精勵し、中隊任務達成に貢献する處大なるものありき。

十年五月十日正午頃大營子附近に敵匪百餘出殁し、柳河嶺附近糧秣集積所襲撃せられんとの報に接す、當時歩兵部隊は他方面討伐中の爲め、直に村山中隊に該匪討伐の命ありしに依り、中隊は應急の準備を整へ同日午後七時半承德出發貨物自動車に依り、目的地柳河嶺に前進し十一日午前一時同地に到着せしに、敵は既に大營子を去り、東方に移動の形蹟あり中隊は玆に追撃殲滅を期し、密偵を同方面に先遣し暗夜肅々として前進す、其の間山口二等兵は三分隊に屬し斥候及傳令の任にあり、暗夜險惡なる道路にも拘らず、主力との連絡を密にし以て前進に支障なからしめたり、爾後路上斥候となり最前方を前進しつゝありしに、午前十時北溝部落に入らんとするや、敵の監視兵より射撃を受けたり、中隊は玆に陣容を整へ全寶河を包圍する如く前面の敵を攻撃するや、敵は山岳地帶の天險を利用し頑強に抵抗す、當時山口二等兵は中隊主力前方五十米を前進しつゝありて、分隊と共に敵より

瞰制せられ三方よりする敵の集中火に對し、應戰しつゝ、敵の占據地點高地に向ひ、迂回登攀中の中隊主力掩護の爲め、分隊長以下最も勇敢に應射し、爲めに主力部隊は一兵の損傷なく、敵彈下に高地の一角を占領するを得たり、是より先分隊は斜坂に散開し敵を攻撃しつゝありしが、山口二等兵は中隊長に對し、分隊の狀況急なる旨を、彈丸雨飛下に自若として大聲傳達し中隊長をして迂回攻撃の決心を斷行せしむる、基礎をなさしめたり、爾後二等兵は部隊長の下に奮戰中十一時四十分頃、左前方より飛來せる敵彈咽喉部を貫通し、顏面血潮に染まりしも、毅然として彈藥の裝塡を終り遊底を閉ぢ手當を受くる間と雖も、强く銃を握りて放さず遂に其の場に名譽の戰死を遂げしが、最後に至るまで主力部隊の迂回攻撃を容易ならしめたる行爲に對し隊長以下感激し士氣益々旺盛ならしめたり。功績優秀卽日工兵上等兵に進めらる。

功に依り功七級金鵄勳章勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　勝山正一

勝山正一は、奈良縣吉野郡四鄕村大字狹戸の人にして、昭和九年十二月歩兵第三十八聯隊留守隊に入隊し、滿洲派遣の爲同月九日留守隊を出發し、鴨綠江を通過して同月十五日齊々哈爾に到着し、直に同地の警備に任じ、酷寒を冒して、初年兵としての教育を受けつゝ各種の勤務に服し、熱心勉勵にして、其の與へられたる任務に向て邁進し、この間の功績顯著なるものと認められたり。

同十年五月中旬より六月下旬に亘りては第二獨立守備隊春季第二次討伐に際し、中隊第一小隊の一員として之に參加し十五日蛟河に到着、直に京圖線南方の大密林高山地帶より黃松甸附近の大濕地を經て窩瓜站柳樹河子七道滴達沙河子老黑頂子に亘り、連日連夜搜索掃蕩を行ひ、該地區に在りし匪賊を四散せしめ、徹底的に德林匪の根據地を覆滅せしめたり。正一此の間常に率先活動献身的努力を爲し、以上の功績優秀と認められたり。

上記の討伐に引き續、同守備隊の夏季討伐を行ふや、中隊主力と別れて、七道滴達南方約十粁殆んど人煙を絶ちたる奥地に分駐して、附近一帶の掃蕩に任じ、酷熱に堪へ缺乏を忍び、刻苦精勵一日の如くなりしが、七月二日突如德林匪出現

之を擊退次で追擊して老臺溝に至る、正一率先勇戰して功あり。又八月二日より六日に亘りては、遠く柳樹河子より老黑溝方面に出動し、同方面一帶の掃蕩に從事して奮勵前に同じ、以上の功績も亦優秀と認められたり。

同十年九月一日以降秋季討伐に方り、中隊は吉林省楡樹縣方面に跋扈せる匪賊の討伐に任じたるが、正一は三木小隊に屬して、長途行軍の後同縣西部大于屯に分駐し、直に同地一帶の掃匪に從事す。而して九月十日夜大于屯北方約四粁の八岔溝子に蟠居せる匪賊約百名を夜襲したるが、敵匪は既に遁走の後なりしを以て、翌十一日午前十一時より中隊長の指揮する部隊と協力して、一部落の家屋に據れる敵を攻擊し、激戰の後之を擊退したるが、正一本戰鬪間第一彈藥手として、彈丸雨飛の下に於て勇敢沈着に行動し、輕機關銃の威力を發揚したり。偶々敵彈の爲瓦甲筒を損じて射擊不能となるや、正一憤然拳銃を取り出し、圍壁上並に銃眼の敵を狙擊して立ろに副將奎勝以下數敵を殪したるが、左方の銃眼より飛來せる敵の一彈は正一の頭部を貫通し、遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日步兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

正一性質溫順にして沈勇責任觀念旺盛なり。入營以來特に軍務に精勵し、諸般の成績優良上下の信用厚かりき。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　近藤由藏

近藤由藏は、愛知縣寶飯郡御油町字美世賜の人にして、父を吉平、母をよしと云ひ、大正三年三月三十日生なり。昭和四年三月鄕里の小學校高等科第一學年を修了して豐橋東海速算學會に學び算數術を修む。昭和九年十二月現役兵として步兵第十八聯隊留守第一中隊に入營し、同聯隊第二機關銃中隊要員として滿洲派遣のため、十二月十一日屯營出發、圖們江を通過して、十二月三十日富錦に到着し、初年兵として教育を受けつゝ警備勤務に服し、精勵にして其功績を認めらる。

同十年三月四月の間は、富錦地區の大討伐に方り、北村部隊に配屬の機關小隊銃手として之に參加し、三月中旬は興隆鎭附近に在りし平東匪を擊攘し、同月下旬より四月上旬に亘りては柳樹河子附近に陣地を占領しありし天元匪を掃蕩し、四月上旬中旬の間同江縣青龍山附近の討伐に方りては、融雪の水滿々たる大濕地を渡り、又は深さ馬腹に及ぶ水流を亂し、士氣極めて旺盛に率先活動して、討伐の目的達成に貢献せる所多大なり。以上の功績優秀なるものと認めらる。

同十年八月中は綏濱縣蕭北縣の討伐に從ひ、第八中隊の約半部に第六中隊の一部及び機關銃一小隊を以て編組したる後藤部隊に屬し機關銃小隊四番銃手として之に參加し、八月十一日鴨蛋河々口附近に在る匪賊を討伐せんが爲前進し、名山鎭附近より道路狹隘にして車馬を通ぜざるに因り、機關銃を臂力にて運搬し、河口附近の一軒屋に在りし匪賊を急襲するや、匪賊は帆船を準備しありて、延興鎭東南方の島に逃避せるを以て、後藤部隊は順風に帆を張りて同島に向ひしに、島より五六百米に近接するや、島の密林內に匿れたりし敵匪は俄に出でて我を猛射せり。我部隊は船上より機關銃を以て敵に猛火を送り、暫くして戰鬪は愈々激烈

となり彼我の銃聲轟々河水沸かんとする狀況なり。由藏沈著機敏に動作して彈藥の補充を行ひつゝ兼て敵情を監視しありしが、偶々飛來せる敵彈のため頸部及び頤部に重傷を被り、遂に名譽の戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日步兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

由藏性質溫順にして沈勇、孝弟の道を盡し交友に情誼厚し。其の青年訓練所入所中の如き、成績優良にして特に上下の敬愛を受けたり。渡滿出發に隨し先輩朋友等に語りて言ひけるは、自分は再會の時必ず胸間金鵄勳章を帶びん但し靖國神社に祭られての後なりと。由藏の言遂に實現せられたり。兼て覺悟の程も偲ばれて床しく、朋友故舊皆深く之を哀悼せり。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　飯塚清

飯塚清は、埼玉縣兒玉郡七本木村大字七本木の人にして、昭和九年十二月現役志願兵として獨立守備步兵第八大隊第三中隊に入營し、同日より守備地虎嶺に在りて事變に關する業務に從事し、初年兵教育を受けつゝ警備勤務に服して精勵し翌十年三月二十一日より黃泥河南北地區の討伐に際し、小坂小隊の小銃手として之に參加し、嶮難なる地形並に密林地帶に於て連日連夜の活動をなし、又同月下旬中隊が五道家子並に城牆砬子附近に於て匪賊の一團を攻擊するに際し、勇敢機敏に動作して中隊の戰鬪を有利ならしめたり。以上の功績優秀と認めらる。

同十年四月一日以降春季討伐に參加し、四月十五日威虎嶺西北十二粁なる沙河掌附近の密林中に於て敵匪と遭遇するや機關銃分隊彈藥手として分隊長の意圖に從ひ、敵火を冒して彈藥を搬送し、五月上旬再び同地に於て敵匪の一團を擊破し曩に拉致されたる人員數名を奪還し、同月下旬梧桐砬子溝に於て輕機關銃手として約百二十の敵匪を猛射して之を潰走せしめたり、然して同年六月下旬より九月下旬に亘りては額穆索に分屯して同地附近の警備に任じ、八月中は川名小隊に屬して、亮兵臺附近に於て列車を轉覆襲擊したる匪賊を追擊し、同月二十二日廟嶺附近の密林中にて匪賊約四十を擊滅したり。以上の功績も亦優秀と認めらる。

同十年九月十三日柳樹屯附近の戰鬪に於ては乘馬小銃手として之に參加し、勇戰して敵匪約百三十を擊破し、同月十五日當石河子附近に於ては敵匪約六十に對し、乘馬にて快速に行動、敵の背後に迂回し其退路を遮斷して之に殲滅的打擊を與へたり。次で同年十月より十一月に亘れる秋季討伐に際しては大武小隊小銃手として參加し、大小匪賊各所に蟠居せる中に於て、連日連夜寒冷を凌き困缺に堪へ、討伐掃蕩に從事し、該地方の治安確立に貢獻する所多大なり。殊に十月五日牛圈溝附近に於ては滿洲國軍と交戰中なる匪賊の側背に進出、之を猛擊して大打擊を與へたり。以上の功績も亦優秀なるものと認めらる。

同十年十一月五日老道溝の北方約六吉米なる青溝子附近の戰鬪に方りては中村小隊小銃手として之に參加し、青溝子南方約三吉附近にて敵匪約五十を擊退し、之を追擊して谷地を前進するや、新なる敵匪約二百と遭遇し之を攻擊するに際し清分隊長の意圖に從ひ沈著機敏に有利なる陣地を占めて敵に猛射を加へたるが、敵は人數の衆多と地形制高の利を恃みて逐次に我を包圍せんとし、且つ輕機關銃の猛火を送り、我は漸く戰鬪苦境に陷り、戰友相次で死傷するも毅然として敵に猛火を浴せ其の心膽を寒からしめたるが、衆寡遂に敵し難く、又彈丸を全部射耗し、身に數彈を受けて立つ能はず。「天皇陛下萬歲」を唱へつゝ戰友田島一等兵と互に刺違へ從容として瞑目せり。斯く寡兵を以て數十倍の敵匪を惱まし剛勇不撓

終始攻擊を斷行し皇軍の眞價を遺憾なく發揮して瑩れたるは正に軍人の龜鑑たるに足るべし。即日歩兵上等兵に進められ後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

清性質温順にして沈毅なり。事に當りて熱心精勵す。入營以來特に軍務に精勵し成績優良、上下皆其の戰歿を惜みたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　中川一雄

中川一雄は富山縣東蠟波郡青島村上村の出身にして、父を助太郎母をまついと云ひ、大正四年七月十五日を以て生る、大正八年四月一日青島尋常小學校に入り、大正十五年三月同校卒業同四月一日東山見尋常高等小學校に入り、昭和三年三月高等科を卒業す、爾來木材流送人夫として家庭の柱石となり精勵努力中、昭和十年十二月一日現役兵として歩兵第三十五聯隊第一機關銃隊に入營し、四月十四日滿洲派遣の爲め、宇品港出帆勇躍征途に就き、大連港を經て十九日鐵嶺に到着同日より翌十一年四月十日に亘り、駐屯地鐵嶺附近の警備に任じ、專ら初年兵として教育訓練に精進し、優秀なる成績を收め、傍ら繁激なる警備諸勤務に精勵せり、後北海移駐に際しては、準備並輸送業務に熱心服務し以て移駐業務をして支障なからしめたり、次いで四月十二日より部隊主力と共に山河屯に位置し、警備並附近討伐に活躍せしが、南部游擊隊編成せらるるや、機關銃小隊長尾崎少尉の指揮に入り、五常縣下の游擊討伐に參加し、各地に勇戰奮鬪偉功を奏したり、特に、五月四日五常縣第二區七個頂子附近の戰鬪に際しては、同日午前零時所屬尾崎小隊は、長岡附近の匪團を求めて、之を撃滅すべき任務を帶び、同方面に行動す、當時中川二等兵は機關銃第二分隊四番銃手として其任務に就き、午前四時林家橋西北方約二粁の二軒南測に於て、前方七百米の地點を東北に移動しある約百二十名の匪群を森林間隙より發見するや直に之を小隊長に報告せり、小隊長は之を撃滅すべく、機關銃隊は現在地に於て匪群を射撃せしめ小隊主力は左前方に進出し敵の退路を遮斷すべく決心し、迅速に部署を命じ攻撃を開始せり、小隊主力前方稜線に進出し射撃を開始するや、機關銃分隊亦敏速に陣地を變換す、當時銃脚を搬送しありし二等兵は、敵彈雨飛の下毫も屈する處なく、行動困難なる密林、濕地或は坂路等を踏破し率先陣頭に立ちて迅速機敏に躍進し、第二次陣地に於て適確なる射撃を可能ならしめ、以て小隊戰鬪を有利に導きつゝ、猛射を浴せ、午前四時三十前敵匪の後退開始すると見るや、分隊は機を逸せず難路を克服し協力一致遂次敵匪に窮追し之を猛射す、前進すること六七百米にして林空南端に達するや、約百米前方林空北端に於て、敵匪は頑強に抵抗し、且其の一部二十數名は小隊の最右翼にありし、小銃分隊長（以下七名）に對し必死の逆襲を敢行せんと前進しつゝあるを認めたり、玆に於て二等兵は直に敵逆襲部隊を猛射す、而して其射撃迅速正確、之が爲め敵匪は至近の距離に於て多大の損害を受け、遂に逆襲を斷念し、南方に潰走し、之と同時に小隊前面の敵匪も亦た抵抗頓に衰へ、遂に全線擧つて潰走するの狀態となれり、今や友軍全般

の士氣頓に擧り、追擊すること約二千米此間毫も疲勞の氣色なく益々勇敢に追擊を續行し、敵潰走を看破するや分隊は左方高地に向ひ、約四十米躍進中、二等兵は敵主力退却方向を確認し、直に機關銃射擊位置を、已のある位置最も有利なりと判斷し、分隊長に大聲にて急報せる時敵彈胸部を貫通す、然れども二等兵は毫も屈せず、小十字鍬を以て脚位置を堀開し敵情を監視しつゝ銃の到着を待ちありし際、更に第二彈飛來し之が爲め頭部貫通銃創を受け、惜しくも玆に壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり、本戰鬪に於ける二等兵の勇猛果敢なる行動は、全友軍の士氣を鼓舞し戰捷の素因を爲したるものにして、其功績や偉大なりと謂ふべし、即日步兵上等兵に累進せらる。

偉功に依り功七級金鵄勳章並勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

一雄性質溫厚篤實剛毅にして、職務に忠實なり鄉黨常に衆の模樣として推賞せり、父は日露戰後に出征し各地に勇戰奮鬪し偉功を樹てたる名譽の勇士にして、此父ありて此子ありと謂ふべし。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　早川吉三

早川吉三は、愛知縣幡豆郡吉田町大字乙川の人にして、父を三藏母をしんと云ひ、大正三年三月五日生なり。昭和三年三月吉田尋常高等小學校を卒業し、次で吉田國民學校研究科に入りて修業、靑年訓練所の業を卒りて、昭和九年十二月步兵第十八聯隊留守隊に入隊、同月十一日屯營を出發、同月十七日圖們江を通過し、翌十年一月二日依關に到着し、直に同地附近の警備に任じ、軍事訓練を重ねつつ衞兵其他の陣中要務に服し、常に精勤にして、三月八日第一期檢閱を優良成績にて終了せり。

昭和十年三月十一日より北境地區の春季大討伐を施行するに方りては、吉三第一小隊第二分隊に屬して之に參加し、三月十三日大隊が同賓附近の掃蕩を行ふに際しては、次で揚木頂子附近に於て墨林匪を攻擊するに方りては、先遣小隊に加はりて通河に前進し、常に分隊長を輔佐して、其の任務遂行に遺憾なきを得しめたり。然して三月十五日敵情偵察の爲夾皮溝屯に先遣せられては、膝を沒する積雪を踏みつつ密林中の小徑を過ぎ、危險を冒し、困厄に堪へ、以て其の任務を完うしたり。以上の功績優秀なるものと認めらる。

同年三月十六日通河北方瑪瑙河上流揚木頂子附近の戰鬪に於ては、吉三尖兵に屬し、天明と共に夾皮溝屯を出發し、午前十時頃敵の警戒陣地を突破し、次で第一陣地を攻擊するに際しては火線分隊內に在りて奮戰中、小隊の右前方高地より敵の猛射を受けたるを以て小隊長は主力を以て右方に迂廻するに決し、分隊長丸野上等兵に命じて現在地の前方なる山頂を占領して、小隊の迂廻運動を掩護せしめたり。吉三丸野分隊に屬し、率先嶮峻を馳せ登り分隊の最先頭を以て山頂を占領し、小隊の迂回運動を終るや、丸野分隊と共に敵陣地の左側に向て攻擊し、雨飛する猛火を冒して敵に肉薄せしが、敵は密林及び嶮峻なる地形を巧に利用して堅固に陣地を構成しありて抵抗頗る頑强なり、之れがため丸野分隊の戰鬪は益々慘烈となり、分隊長敵彈に中りて斃るるや、吉三奮然戰友を激勵しつつ猛進し、遂に敵陣地の一部を奪取し、爾後益々戰果の擴張に勉めしが、敵火は愈々慘烈となり此激戰中吉三遂に敵彈を被むりて壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日步兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

吉三性質溫順に氣概に富み、父母に仕へて至孝交友に情誼厚し又雄辯にして劍道を得意とす。入營以來特に軍務に精勵して其成績優良なりき。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　伊藤成价

伊藤成价は、愛知縣名古屋市中區日置町の出身にして、父を宇吉母をいきと云ひ、大正二年十二月十日生なり。昭和三年三月市立日置尋常高等小學校を卒業す。小學在學中成績優等を以て受賞すること多し。大正十三年中姪子速算學會に於て算數の術を修め、爾後家業に精勵せしが、昭和九年十二月歩兵第六聯隊留守隊に入隊し、同月十一日派遣中の歩兵第六聯隊第八中隊要員として名古屋を出發し、同月十八日豆滿江を通過、同月十九日穆稜に於て所屬中隊の位置に到着、直に其の編成に入りて同地の警備に任じたり。

昭和十年五月二十四日に亘る間穆稜の警備に當り、銃前哨巡察斥候其他の要務に服し、常に精勵にして其任務を完了したり。殊に十二月三十一日大石頭河子附近の匪情偵察行動に參加して勇敢機敏に行動し、又二月三日警備地區一齊檢索の際は、滿洲國警察隊の檢索掩護部隊に加はりて活動し、又四月三日より同月十日に亘れる師團の春季射伐に際しては第二小隊第五分隊第三彈藥手として、大石頭河子方面に行動し、人煙の絶へたる密林地帶に行動し、或は解氷增水に依り流失せる架橋の作業に從ひ、危險を冒し困難に克ち、以て諸部隊の行動に支障なきを得しめたり。以上の功績優秀と認められる。

同十年五月中旬中柳毛子河谷に於ける匪賊討伐に參加して勇敢に敵を攻擊し、同年五月下旬より六月下旬に亘れる、旅團の南部寧安縣下の討伐に參加して、匪賊の根據とせる山寨を覆滅するもの數多、常に積極的に活動して其の戰功を認められたり。殊に六月二十八日成价の屬せる小隊は、同日夕鹿道河子發列車を利用、李樹溝に前進中、三道河子北方約三粁附近に於て輕機關銃三を有する百餘名の匪賊より襲擊を受けたり。此時同列車は乘客滿員なりしため對敵行動に便ならざりしも、小隊長以下勇猛奮戰遂に匪賊を一時擊退したるも、該地附近は密林内、加ふる濕地にして深さ膝を沒す。時に日全く暮るるや、近き密林内に匪賊の兵團尚ほ停止しあるを知り、小隊は斷然之を夜襲するに決し、敵に近づきて急激之に猛射を加へたり。匪賊も亦頑强に抵抗し、此激戰中成价は火線に彈藥を補充の際、敵の一彈を頭部に受け、遂に名譽の戰死を遂げたり。中隊長松野大尉の調書に記して曰はく。嗚呼勇士を失ひて斷腸の思あり、此の勇士ありてか、我が伸村小隊の夜襲戰は完全に其効を奏することを得たりと。成价此日歩兵上等兵に進められ、功績拔群を以て左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

成价性質剛直にして義務心强く、事に當り熱心勉勵、軍務の成績優秀なり。平素寫眞繪畫を好み、又相當の伎倆を有し入營前生母の肖像を筆寫し、記念として保存しありと云ふ。遺族は名古屋市日置町成价の宅に現住す。一同の健在多幸を祈る。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　池田嘉三郎

池田嘉三郎は、香川縣大川郡鴨部村大字中筋の人にして、父を愛造母をトヨと云ひ、大正二年生なり。大正九年鴨部尋常高等小學校へ入校、同十五年三月同校卒業、爾後家に在りて家事に精勵せしが、昭和八年十二月獨立守備歩兵第十二大隊へ入營し、同月より第三中隊に在りて事變の勤務に從事し、翌九年四月一日より同年五月十七日に至る間は、新姑附近の警備に任じ、拉賓京圖兩線鐵道を守備し、列車の警乘司令部の警戒其他の要務に服し、四月中馬鞍山附近に出動し、五月中旬中は混成中隊第五分隊に加はりて、駘馬河上溝附近の討伐に參加し、嶮峻なる雜路を經て敵を追躡し、中隊の討伐

行動に貢献する所甚大、以上の功績顯著なるものと認められたり。

同九年五月十八日より六月下旬に亘れる春季討伐に際しては、泥濘深き難路を過ぎ、氾濫せる河流を渡り、危險を冒し困難に克ち、最も士氣旺盛に行動して、海林鏡泊湖和尚屯三塊石二道溝頭道河子三道河子等の各地に轉戰し、又同年六月七月の交は夏季討伐に參加して、第一小隊小銃手として五道溝二道溝東西青溝子深溝奥地房身溝等の各地に於て勇戰、戰功を擧げたり。以上の功績優秀と認めらる。

同九年八月より十一月末に亘り圖寧線の警備を擔任し、匪賊の出沒頻々たる中にありて鐵道建設工事又は通信交通機關の掩護に任じ、其他分遣隊の勤務等に服して日夜精勵、殆んど休憩を得ざる狀態に在り。然して同年十二月より翌十年四月に亘りては東京城附近の警備に任じ、此間同年三月二十日老廟嶺附近に於て匪首齊林の卒ゆる約五十の匪賊を擊破し、四月十日は北谷小隊に屬して鏡泊湖守備隊に連絡の任務を以て同地に向て前進中、大廟嶺北方の山間隘路に於て匪賊約百五十のために要擊せられ飛彈雨の如し。殊に敵は高地の岩石に據りて我を猛射し、小隊は稍々苦戰の狀況に陥りたりしが此時嘉三郎奮然として匍匐しつつ前進し敵に肉薄せり、此の間分隊長以下數名の戰死者を出せしが、嘉三郎尙ほ之に屈せず、手榴彈の爆烟を潛りて敵中に突入し、敵兵二名を刺殺せしが、後方陣地より射擊せる敵彈のため左胸部を貫通せられ遂に壯烈なる戰死を遂げたり。武功拔群を以て即日步兵上等兵に進められ、後日左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

嘉三郎性質溫順にして氣概に富み、事に從ひて熱心誠實、入營以來特に軍務に精勵にして成績優良なり。殊に上官に服從の道を守り同僚と交誼篤くして、上下の信賴淺からず、皆其の戰死を惜しみ、何れも懇切なる吊詞を捧げ哀悼已まざりき。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　渡邊三郎

渡邊三郎は、宮城縣名取郡六鄕村飯田字遠西の人にして、父を榮助、母をきよしと云ひ、大正三年二月四日生なり。昭和三年三月六鄕尋常高等小學校を卒業し、次で同地農業補習學校に入校、同六年三月同校を卒業、爾來家業に精勵しつゝ青年團に入り模範的團員と稱せらる性質溫厚篤實氣慨に富み、進んで難局に當るの美風あり。昭和九年十二月獨立守備步兵第六大隊第一中隊に入隊し、溝帮子に在りて滿洲事變の業務に從事せり。卽ち十二月一日より翌十年三月二十日に亘りては、奉山線及び河北線の守備並に同附屬地の警備を擔任し、次で清原、夏家堡子の警備に當り、時々近傍各地に出動、匪賊の討伐掃蕩に任じたりしが、常に勇敢機敏に動作し戰功あり。殊に四月十八日菱溝子に於て綠林好平滿洲密松滿天紅等の合流匪約三百餘名を攻擊せる際は、輕機關銃分隊に屬して勇戰し、遂に敵を擊退したり。以上の功績優秀なるものと認めらる。

同十年五月中旬下旬は夏季東邊道討伐に參加し、第二小隊輕機關銃分隊銃手として奮戰し、銃の威力を遺憾なく發揮し其の功績を認めらる。五月二十九日清原縣董木匠溝に於て、匪賊數十名我が自動車を襲擊せんと畫策中なるを知り、中隊長は平間上等兵に兵十名滿洲國警察隊員二十名を指揮し之を擊滅せしむ。上等兵以下同地に到着して匪賊を攻擊し、戰鬪愈々激烈となる。三郎も亦該部隊に屬し輕機關銃々手として奮戰す。匪賊等は一度同部落より退却せしも、附近の草叢中に隱蔽して地歩を占め、我を猛射し飛彈霰の如くなりしが、三郎最も沈着にして少しも動ぜず、有効に敵を猛射し、敵兵逡巡漸次に後退し、我部隊は勢に乘じて之を急追したり。然るに敵の一部は窮鼠の狀態を以て再び反轉して我に猛射を加ふ三郎右手に銃を持ち左手に彈藥匣を提げつゝ猛進して、敵を攻擊中不幸飛來せる敵の一彈は三郎の左胸部を貫き、天

皇陛下萬歳を唱へ、銃を握り敵を睨みたるまゝ壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日步兵上等兵に進められ、後日左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七紙並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

岩永大隊長より遺族に寄せたる弔慰書簡の一節左の如し。

（前略）斯の如く寡兵を以て優勢なる敵に對し攻擊を續行し得たりしは、君の如き誠忠なる皇軍將兵の勇戰奮鬪の結果にして（中略）如何に君が最後まで任務遂行に邁進せられし證左にして實に軍人精神の發露に外ならず、軍人の龜鑑として推賞するものに御座候。戰友一同は皆君の誠忠に感激敬服致し居候（下略）

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　品川龜之助

品川龜之助は東京市四谷區簞笥町二八の人にして、父を幸之助、母をたまゑと云ひ、大正四年十一月二十三日生なり。昭和五年三月戸塚第二高等小學校を卒業し、昭和九年十二月五日現役志願兵として獨立守備步兵第十三大隊第一中隊に入營し、呼蘭に在りて同地附近の警備に任じつゝ、初年兵第一期の教育を受け、酷寒を冒して奮勵し、其の功績顯著と認められたり。

斯くて呼蘭附近の警備は翌十年八月初旬に及び、約九箇月の長日時に亘り、酷寒を冒し炎暑に堪へ、十年三月初年兵第一期教育終了の後は、濱北線鐵道の守備並に同沿線の警備を擔任し、屢々危險を冒して線路の巡察に從ひ、又時々要所の衛兵となりて徹宵の監視に任じ、或は潛伏斥候となりて匪賊の動靜を偵察する等、常に熱烈なる意氣を以て終始一貫し、

其の與へられたる任務を完全に遂行せり。以上の功績優秀なるものと認めらる。

同十年八月三日より九月下旬に亘りては、濱江省慶城縣分散配置の警備勤務に服し、混成小隊に屬して地方の治安維持に當り又は示威行軍に加はり、尙ほ匪賊の搜索、不逞徒輩の逮捕を補助して功績少からず、斯くて九月二十七日慶城縣第五區四合成東方約十粁劉海令屯附近に双英鵬飛燕飛小平東洋王連長榮索倫等の合流約三百侵入せる情報を得て、混成小隊は長以下二十八名を以て之が討伐に向ひたり。龜之助第二分隊の一員として之に加はり、倭樹密生せる雜樹林多く、頗る錯雜なる地形に於て然も優勢なる敵と衝突するや、率先陣頭に立ち、勇敢機敏に動作して敵を攻擊したりしが、敵彈の爲め腹部に盲管銃創を受けたるも之に屈せず、尙ほ數發を發射して敵を殪したるが、遂に散兵線上に仆れて再び起つ能はず壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日步兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

龜之助性質溫順にして氣慨に富み、幼時より軍人たらんと志し、丁年未滿にて志願入營せり、爾來特に軍務に精勵して成績優良、將來大いに有望なりしが、雄志半にして遂に國事に殉じたるは洵に惜むべし。然れ共龜之助素志を貫徹し、軍

人の本分を完うし、芳名を千歳に遺したり、男兒の本懷にあらずして何ぞや、亦以て瞑すべきなり。特に其冥福を祷る。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　鹽生常市

鹽生常市は、福島縣南會津郡荒海村大字藤生字百目の人にして、昭和九年十二月二日現役兵として獨立守備歩兵第六大隊第二中隊に入隊し、十二月一日守備地綏中に到着し、直に同地附近の警備に任じ、奉山鐵道線の守備に當り連山山海關間の鐵路並に重要通信施設の保護を擔任し酷寒を冒して徹宵要地の哨兵に服し、又は危險地帶に出入來往して巡察斥候の任務に從ふ等、刻苦精勵、翌十年三月に至り。爾後は石山站山海關の鐵路保護並に主要通信施設の監視に當り、克く上官の指示を體して熱心に服務し、以上の功績優秀なるものと認められたり。

昭和十年五月十三日以降は夏季東邊道の討伐として清原興京兩縣下の匪賊掃蕩に任ずるや、常市第二中隊乘馬小隊に屬し、連絡困難なる山間僻地に分散配置を取り、百難を排して不撓不屈其任務に邁進し、五月二十五日富家堡子附近の戰鬪に於て匪賊の一隊を擊破して戰功あり。殊に六月一日

撥捕溝附近の戰鬪に於ては最初尖兵群に加はりて前進し、匪首海山の指揮する約百名を攻擊するに方り、其の退路を遮斷するこめ胖老溝南方高地に進出し、標高三八一高地の敵を攻擊せしが、該高地附近一帶の密林にして地形嶮峻戰鬪の進捗意の如くならず。此時常市は單身密林中に潜入し、敵の背後に肉薄して小頭目海豹を刺殺したるに、敵匪狼狽、小家は此の機を利用して攻擊を進捗せしめたるが、此の際常市は敵彈の爲胸部に貫通銃創を被りて、遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後日左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

常市父を市太郎、母をキミと云ひ、大正三年二月十五日生なり。昭和三年三月荒浪尋常高等小學校を卒業す。性質溫順にして義務心强く、入營の後特に軍務に精勵にして成績優良、上等兵候補の選に當りあり。常に長上を敬し、同輩に交誼厚く、上下の信用淺からず皆其の戰歿を悼み、深く之を惜みたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　澁谷正之

澁谷正之は群馬縣高崎市成田町の人にして、父を角太郎、母をとめと云ひ、大正二年十二月九日生なり。昭和二年三月高崎市北尋常高等小學校を卒業し、爾後家業に從ひ精勵なりしが、昭和九年十二月現役兵として獨立守備歩兵第二十四大隊第二中隊に入營し、遼陽附近の警備に任じ、二年兵僅少のため、初年兵教育の進歩に應じて、漸次重要なる任務に服し奮勵努力常に其の與へられたる任務を完うし、功績顯著なるものと認められたり。

昭和十年三月下旬より同年六月下旬に亘りては林口附近の警備に當り、林密線奎山分遣隊に在り、能く分遣隊長の命に

從ひて繁劇なる勤務に服したり。該地は匪賊行動の通過地點に方り、小匪賊群の出沒頻繁なるため、特に至嚴なる警戒を勢を保ちつゝあり。正之此の中にありて、屢々要地の哨兵となりて微宵の警戒に任じ、又は斥候に加はりて匪情を詳にし機先を制して敵賊の企圖を挫折し、災禍を未然に防遏したること少からず、以上の功績優秀なるものと認められたり。

同十年六月二十六日午前一時頃奎山分遣隊長は、同地自衛團より乘馬匪賊五六十名鞍山方向より南下中なる情報に接し、之を攻擊せんが爲め部下六名自衛團員七名を併せ指揮して北進中、奎山北方部落に於て掠奪中の匪賊五六十を發見し、直に之を攻擊せり。正之小銃手として之に參加す。敵は不意の攻擊を受けて惶恰退却せしを以て直に之を追擊し、馬鞍山東北方五二三高地に進出す時に午前三時頃なり。此日霧深く目視困難なりしが、午前四時頃より霧飛散したるに、前方濕地を隔てたる山脚の四軒家に匪賊の宿營を認め、直に輕機關銃及び重擲彈を以て之に猛射を加へたり、敵匪狼狽北側高地を越へて退却したるを以て、我部隊は同地に到り敵匪の遺棄せる馬三頭を鹵獲し、一先づ分遣隊に引揚げんとするや、新なる敵は高地に現れ我を猛射し、分隊之に應戰するや先きに退却せし敵匪も亦反轉し來りたるもの〻如く、敵は漸次其兵力を增して我に數十倍となり、我を包圍して猛火を浴せたり。我部隊奮迅の勢を以て對戰したるも衆寡遂に敵せず、指揮官以下敵中に突入して全員悲壯なる戰死を遂げたり。

本戰鬪に於て敵に與へたる損害は相當に多く、敵匪は之れが爲め林密線に妨害を加ふるの遑なく遂に退却四散せり。正之功績拔群を以て即日步兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

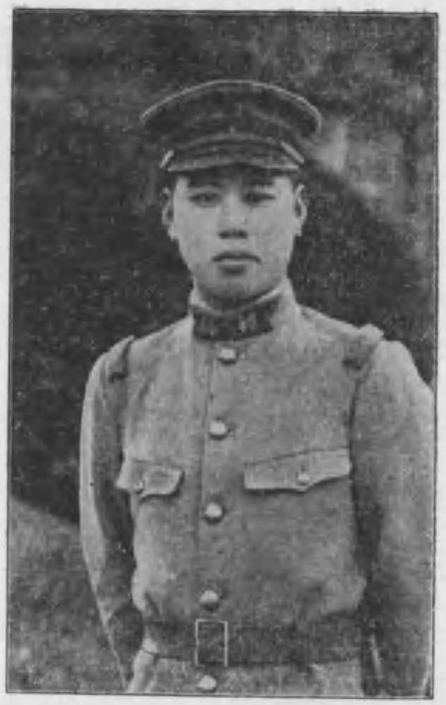
功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

正之性質溫順にして慧敏、事に當りて熱心精勵す。入營以來特に軍務に精勵して成績優良、上下の信用厚かりしが、遂に戰場の華となり散りたり。其の最後に於て指揮官を中心とし猛然敵中に突入して戰死せる勇猛無比の勳作は、以て軍人の龜鑑と仰がる。勇名は千載の後に傳らん、男兒の本懷たらずんばあらず。正之以て瞑すべきなり。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　平野信義

平野信義は長崎縣長崎市大浦東山町の出身にして、大正四年十一月十九日生、父を源藏、母をスナヲと云ひ、大正十一年四月北大浦尋常高等小學校に入學、昭和三年三月尋常科卒業、同年四月高等科へ入り、翌四年三月高等一年科修了し、同四月三菱職工學校へ入學、同七年三月同校卒業、直に三菱造船所に入り業務に熱心精勵中、昭和十一年一月十日第四十六聯隊第二中隊に入營し、同四月十四日滿洲派遣の爲め屯營出發勇躍征途に就き、同二十四日通河に到着し、同日より五月十二日に亘り、該地に駐屯し附近の警備に任ず、當時附近には尙匪賊出沒し、部落を襲擊せんとするの風說ある情況下に於て至嚴の警戒裡に、日夜積極的に諸勤務に努力し、以て克く其任務を完ふせり、五月十三四の兩日に亘り、永發屯及長發屯附近の戰鬪に際しては、第一小隊第一分隊に屬し參加す、當時趙尙志匪は其數約四百乃至五百と稱せられ、匪賊中最も精鋭なるものにして、滿洲國軍及治安隊は却つて此趙匪に惱まされ、遂に我軍に救援を乞ふに至れり、二等兵の屬す

る日高中隊は五月十三日午前零時三十分三臺の自動車に分乘し勇躍通河を出發詳順山に前進途中午後五時永發屯に於て、約三百の騎馬兵と遭遇し、直に之を攻撃し、多大の損害を與へて潰走せしめ、全軍士氣旺盛同夜詳順山に宿營し、翌十四日同地發治安隊と協力して敵匪を索め一殲滅せしむべく三站に向ひ前進中、長發屯に於て再び優勢なる敵匪と遭遇し、直に之を攻撃するや、二等兵の屬する第一分隊は中隊の右小隊の最右翼分隊として、長發屯部落北側より包圍攻撃を實施せり、然るに敵は我中隊の兵力寡少にして、且つ自動車部隊なるを侮り、我を包圍攻撃せんとの企圖を以て、長發屯及其後方部落に兵力を集結せり、其と知るや中隊は迅速なる近接戰鬪を開始せるに依り、敵は全く不意を撃たれ周章狼狽して應戰せり、此時二等兵は勇敢沈着有効適切なる射撃を以て敵に多大の損害を與へ、敵の心膽を寒からしむると共に、常に率先躍進し、敵の機微を伺ひ逐次分隊長に報告し、分隊長の射撃指揮を容易ならしめたり、偶々敵は乘馬或は徒歩にて續々退却するを發見し、之を分隊長に報告すると共に、率先突撃前進を敢行せしが、此の時同部落圍壁内に殘存する敵の側射を受け、不幸左胸部に貫通銃創を受け、茲に名譽の戰死を遂ぐるに至れり、二等兵の此の勇敢沈着且剛膽なる行動は、分隊全員の奮起を促し、遂に敵を潰滅に陷らしめたるものにして、其武功赫々たるものなり、即日歩兵上等兵に進めらる。



功に依り功七級金鵄勳章並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

信義性質溫和にして責任觀念旺盛なり、出征に際しては既に一死以て報國の決心堅く、其活躍振りや眞に鬼神も泣かしむべきものあり、惜むべき哉。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　村松武志

村松武志は愛知縣北設樂郡豐根村大字上黒川字萬治の出身にして、父を仲三郎母をけいと云ひ、大正四年五月七日を以て生る、昭和五年三月黒川尋常高等小學校高等科を卒業す、性快活にして、進取の氣性に富み頭惱明敏なり又運動選手として、陸上諸技に卓越し、且青年團中辯論の巧みなること、君の右に出づるもなく、常に選ばれて、各種會合に自個の理想を發表し、廳者に非常なる感動を與へたりと、越へて昭和十年度徴兵檢査に合格するや、籤外志願に依り、同年十二月一日、歩兵十八聯隊へ入營、十四日滿洲派遣隊第二機關銃中隊要員として、屯營出發、十九日掖河に到着す、其間長途輸送業務の疲勞、氣候激變の勞苦も意に介せず、到着荷物の整理を終へ翌十一年三月初旬に亘り、該駐屯地に於て、第一期猛訓練を受けつゝ、屢々附近の示威行軍に參加し、又三月九日より春季大討伐實施せられ、主力部隊出動に際しては、繁激なる準備要務に精勵努力し、中隊出動を遺憾なからしめる等、幾多の困苦缺乏に耐へ、克く其任務を遂行せり、當時三江省依蘭縣一帶の治安未だ完からず、三月八日より二十五日に亘り、同地區一帶に渉り春季討伐實施せらるゝや、村松二等兵は、第六中隊配屬機關銃第七番手として參加す、中隊は附近一般の匪情に鑑み、討伐の初期より夜間討伐に依り匪首の獲殺を策し、掖河出發以來、地形未知の峻嶮なる山岳を踏破し、酷寒を冒し、士氣益々旺盛、威風堂々、二道河子に於

て、勾心磯を夜襲し、以て黒背に向ひ、同地附近は殆んど、夜間掃蕩を以て治安工作を計り殆んど匪賊の跡を斷ちたり、此間二等兵は不屈不撓克く分隊長を輔け機關分隊をして、常に其機能を發揮せしめたり、殊に黒背二道河子道は、言語に絶する難所なるにも拘らず、自ら銃を負ふて、此難嶮を征服し、討伐行動を神速容易ならしめ、以て中隊長の意圖を滿足せしめたり、所屬小林中隊は、二十四日頭道河子に趙尚志匪約二百名蟠居しありとの情報に接し、之を急襲すべく、歩兵一小隊、及配屬機關銃分隊を指揮し、自動軍二輛に分乘し、二十五日午前五時三十分勇躍出發し頭道河子に至るや、匪情詳かならざるを以て、各家屋を逐次檢索しつゝ、前進し、午前八時二十分頃該部落北端の一軒家に至り、檢索を開始するや、俄然其家の土壁内より一齊に急射を受けたり、玆に於て地形を利用し迅速展開を命じ、交戰開始され彼我の彈丸驟雨の如し此時二等兵は機關銃五番手として、彈丸雨注の中を、最も迅速機敏に、彈藥を搬送し機關銃をして充分機能を發揮せしめ中隊掩護に奮鬪せり、敵は巧に土壁及望樓銃眼を利用し、小銃及輕機を以て、三方より、我機關銃に火力を集中せり、之が爲め機關銃側銃手相次て敵彈に斃る、二等兵は後方にありて、彈藥補充に奮鬪中此情況を目擊するや、自ら銃側銃手たらんとして勇敢に突進し一番銃手の下に至り、彈藥裝塡を決行せんとするや敵彈二等兵の胸部を貫通し玆に名譽の戰死を遂ぐるに至れり其勇敢鬼神の如き行動は一般の士氣を振張せしめ、且機關銃の特性を遺憾なく發揮せをめたり、其功績や偉大なると謂ふべし、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り金鵄勳章功七級並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級

杉井文一

杉井文一は、愛知縣東加茂郡旭村大字小畑字西ヶ洞の人にして、父を見喜造母をすゑと云ひ、大正三年三月二十五日生なり。大正十五年三月旭村築羽尋常小學校を卒業し、後父母を助けて家業農に從事せしが、昭和九年十二月一日現役兵として歩兵第十八聯隊留守隊に入隊し、十二月十一日第二中隊要員として滿洲派遣の爲屯營出發、同月十七日圖們江を通過同月二十二日佳木斯に到着、直に同地の警備に任じ、零下三十度の酷寒下に於て、教練に内務に奮勵し、第一期檢閲修了の後は、直ちに春季大討伐に參加し、歸還後疲勞を醫するの暇もなく、又々衛兵其他の諸勤務に服し、常に士氣旺盛にして成績優良、以上の功績顯著なるものと認められたり。

同十年五月下旬より八月下旬に亘りては湖南營附近の警備に當り、粗惡なる給養に甘んじつゝ、斥候巡察衛兵等日夜繁劇なる勤務に服して終始一貫熱心精勵せり。然して同十年三月中旬より四月上旬に至る間、北境地區春季討伐に方り、柏野小隊第三分隊員として之に參加し、三月十九日双鴨子東方の戰鬪に際しては勇敢に動作して敵を掃蕩し、其後連日連夜毎日十數里の山岳地帶を越へ、又は大濕地を渡り、常に士氣旺盛にして少しも勞苦を事とせずして活動し、又同年七月八月の交は角子沟附近の討伐に參加し、七月二十七日西達運范に於て文武匪約百名を擊破し、以上の功績優秀なるものと認められたり。

柳毛河附近は交通の要點にして、匪賊は此地を經て各地に向ふ旅人馬車を襲ひ金品を掠奪するを常とし、其の跳梁跡を絶たず。派遣隊は同地附近に出沒する匪賊を徹底的に討伐せんとし、機の至るを待ちたるが、偶々八月十八日午後七時軍服を着せる九山匪福島班北側温家屯に現れ、同部落民王寶山以下七名を拉致し、身代金千七百圓を要求し來れり。依て派

遺隊長池田特務曹長以下二十七名、十二日午後十時夜暗に乗じ、人質奪還並に匪賊撃滅の目的を以て出發せり。文一第一分隊員として之に加はり、尖兵に屬して前進、柳毛河を掃蕩して匪情を確かめ、其の足跡を辿りつゝ小營崗溝裏に至り、一民家を搜索中其の隣接家屋より不意の亂射を受く。派遣隊は別に敵の占領しある陣地と共に之に向て攻撃を開始せり。然るに敵の陣地前は濕地並に雜草繁茂の地にして、射撃と運動とを甚しく阻碍あられ、攻撃の進捗意の如くならず。此時中央火線たる第一分隊は敵の集中火を意とせず、猛進して敵の右側背に迫り、次で敵陣に突撃するや、文一勇猛、敵彈の爲め胸部を貫通せられたるも之に屈せず、阿修羅の如く奮闘し、敵の腰及び肩を刺突し、兩手に堅く銃を握り刺突せる儘敵と共に其場に斃れたり。小隊長以下の手當を受くるや、僅に眼を開き「天皇陛下萬歳」を微かに唱へ莞爾として瞑目したり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ後日左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

文一性質溫厚にして剛勇。入營以來特に軍務に精勵して成績優良なり。殊に其の最期に於ける動作は實に軍人の模範たるに足るものとして上下之を嘆賞し、皆之を敬慕せり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　松尾正二

松尾正二は、愛知縣渥美郡二川町大字谷川字堤下の人にして、父を角吉母をなつと云ひ、大正三年一月二日生なり。昭和三年三月二川町東部尋常高等小學校を卒業し、次で同地青年訓練所の業を畢り、昭和九年十二月現役兵として歩兵第十八聯隊留守第二中隊に入營し、十二月十一日第九中隊要員として滿洲派遣の爲豐橋を出發し、宇品釜山を經て十二月二十八日佳木斯に、翌十年一月二日依蘭に到着し、直に同地附近の警備に任じ、傍ら軍事の訓練を重ね、熱心精勵にして諸般の成績優良を以て第一期檢閲を終了す。以上の功績顯著とす。

同十年三月十一日以降河合小隊第三分隊に屬して北境地區の春季大討伐に參加し、同賓方正等の各地に於ける匪賊を撃破し、次で通河夾皮溝屯に前進して匪賊の情況を偵察し、危險を冒し、積雪を踏み、常に分隊長を輔佐しつゝ積極的に活動し、所屬小隊の任務達成に貢獻せる所甚大なり。殊に三月十六日通河北方瑪瑯河上流楊木頂子附近の戰闘に際しては、最初尖兵に屬し、天明と共に夾皮溝を出發し、午前十時敵の警戒陣地を突破し、次で第一陣地に向て攻撃中、小隊は右前方山頂より敵の猛射を受けたるため、小隊は主力を以て右方に迂回して敵陣地の左側背に向て攻撃を敢行するに決したり。

正二は此の迂回部隊に加はり密林嶮峻然も尺餘の積雪を踏破し、率先して勇敢機敏に前進し、目的の地點に進出するや直に展開して攻撃を開始す。然るに敵は機關銃を有する有力なる部隊を以て該方面に向て逆襲に轉じ、戰闘頗る激烈となりしが、小隊長以下奮戰遂に當面の敵を撃退し、若干距離之を追撃したるに、敵は山頂と密林とを利用して陣地を構成しあり、敗退せる敵は此の陣地に於て收容せられ、敵火は再び熾烈となれり。此時正二最先頭にあり、巧に地形を利用しつゝ敵に肉迫し、沈着正確なる射撃を以て敵火を制壓し、且つ敵情を分隊長に報告し、この勇敢なる動作は小隊全員の士氣を鼓舞し、小隊の全線同時に突撃に移る。正二益々勇躍戰友を激勵しつゝ率先猛進し、敵前約六十米に達したる時、不幸敵の一彈を受けて遂に壯烈なる戰死を遂げたり。功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

正二性質溫順にして篤實、然も意思堅固にして事に當り之を成就せざれば止まざるの美風あり。入營以來特に軍務に精

勵して成績優良、上下の信頼厚かりしが、遂に戰場の華となりて散り、皆其戰沒を惜み深く之を哀悼せり。遺族は二川町谷川家堤下の正二が宅に現住す。遺族の健在多幸を禱る。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　前田弘

前田弘は愛知縣西春日井郡楠村大字味鋺の出身にして、昭和九年十二月一日歩兵第六聯隊留守隊に入隊同日派遣歩兵第六聯隊第三機關銃中隊に編入同十二月十一日名古屋出發同二十一日東寧に到着直に東寧附近の警備に任じ、城内一齊檢索の際は、克く率先活動し不逞分子の逮捕に努め其任務を完ふせり、爾來第一線部隊として、虎視耽々たる蘇軍と相對し、且背後に跳梁極なき匪賊を制し、日夜作戰準備訓練、並掩護警戒等各種繁劇なる勤務に、常に精極的に奮勵努力したり、同四月一日より十日に亘る、師團春季討伐には東寧屯地警備隊として、東寧に位置し其間僅少なる人員を以て、連日連夜衛兵巡察或は連絡勤務傳令等に服し就中討伐隊糧秣輸送掩護並連絡に際しては、勞苦を意とせず危險を冒し進んで、難局に當るの氣慨を以て献身的に行動し其重要任務を完全に遂行し功績優秀なるものあり續いて九月廿四日より師團秋季大討伐に際し青木部隊配屬機關銃小隊に參加し、十月十日には糧秣輸送掩護隊小銃手として午前七時東片底子を發し大綏芬河を渡河し密林雜草地を經て午前九時三十分西嶺子西南方二粁附近の谷地を通過の際突然李三俠匪約六〇と遭遇し分隊長の命に依り分隊最右翼兵として側方を掩護しつゝ勇敢且有効なる射擊を以て敵に多大の損害を與へ之を潰走に陷らしめ尚前進中左大腿部貫通銃創を受けしも、沈着毫も屈する色なく益々盛に退却する敵匪に對し、猛烈に射擊し戰果を有功ならしめつゝありしが、右側方高地の敵收容陣地より第二彈飛來し左胸部に命中し遂に壯烈なる戰死を遂げたり此より先歩兵一等兵に進められ即日歩兵上等兵に進級す。

陸軍歩兵上等兵勳八等　寺地哲夫

寺地哲夫は青森縣上北郡三本木町大字切田字堰向の出身にして、第八師團に入營中昭和六年十一月十一日滿洲派遣編成下令、同十四日青森發勇躍征途に就き、同二十日奉天着直に第一次奉天警備に任じたり、當時市内及附近に潜入しありし便衣隊の跳梁甚しく、爲めに人心惶々たるものありしが不眠不休の努力を以て、警備勤務に從事し治安維持に貢献せり、同十一月二十六日より翌七年一月九日に亘る間、新民警備の任に就き、第一線警備部隊として、常に警戒至嚴に克く任務を達し、又十一月廿七日錦州出動に際しては、機關銃中隊に屬して活動し一月四日突如新民府兵匪の襲擊を受くるや、急據出動し歩兵第五聯隊第二中隊に協力して敵主力と激戰し、之を大街方面に急追し徹底的打擊を加へたり。

同年二月二日より四月十八日に亘る間、齊々哈爾警備の任に就きしが、當時北滿四團の狀勢は馬占山の去就判然せず、李海青軍の跳梁、加ふるに蘇軍の陰謀等ありて極めて微妙なる道程を辿り暗憺として、全く豫斷を許さゞるものありしが機關銃手として該地西地區警備隊に屬し日夜不撓至嚴なる警戒裡に克く其任務を遂行せり、同六月九日興城驛附近の戰闘廿六日の飯馬河平川營胡恂附近の戰闘にも又銃手として參加し其威力を發揮し、勇敢適切なる射擊は機宜に適せる行動と相俟つて、各戰闘に多大なるの効果を齎らしたり、同四月二十三日以降九月三十日に亘る間、綏中附近の警備及戰闘に參加し、續いて、十月一日以降前所附近の警備、葉家屯、附近の戰闘大拱附近の討伐、上中平溝附近の戰闘、山海關の戰闘等各地に轉戰し、赫々たる武勳を樹て功績優秀なり。尚同八年一月十日以降九門警備、前衛及び綏中方面各警備の任を完

ふし、同二月二十八日以降馬道嶺及大松木溝の戰鬪潘家口附近の戰鬪を經て凌源附近の警備續いて井上附近の討伐特に新開嶺附近及密雲追擊戰に際しては、終始勇敢に奮戰し、其戰果を完からしめ同五月二十一日以降八月廿七日に亘る間門懷柔附近の戰鬪後該地附近の警備及び密雲地方警備等に任じ各々敵匪の乘ずる機なからしめ以て治安維持に遺憾なからしめたり。

寺地哲夫は二ヶ年有餘の間各地の警備及戰鬪に參加する事十數回に涉り常に周到至嚴なる警戒に任じ克く治安を確保し戰鬪に際しては、率先勇奮苦鬪し常に功績拔群なりと認められしが、八年八月廿八日不幸右肺尖炎（公病）により古北口衛生班に入り十月四日廣島衛戍病院に轉院し十一月十七日留守隊第一中隊に編入同日靑森衛戍病院に入院爾來加療中十二月廿五日歩兵上等兵に累進し、昭和十年三月十二日遂に病歿せり然れども其遺烈は遠く萬古に輝くべし。

功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　杉澤德松

杉澤德松は秋田縣雄勝郡院内町上院内字中ノ澤の出身にして昭和八年十二月一日、獨立守備歩兵第五大隊第三中隊に入營し、教育の傍ら警備勤務に服し、日夜繁激なる諸勤務に精勵し、興京縣下の治安を恢復せしめ、以て中隊の警備任達成に貢献せり、二月二十日より三月十七日に亘り、冬季討伐實施するや、中隊は興京にありて、第一中隊及布上支隊に協力し、日夜奮鬪し、又獨力を以て山間僻地を掃蕩し、蘇子餘、仁義軍、双虎、古東邊、等不逞團を悉く擊滅し、以て初期の目的を完全に達成せしめたり、四月一日より九月十六日の間東邊道守備に任じ、朝陽鎭に位置し、衛兵、巡察、斥候等繁激なる諸勤務に精勵し、以て克く其任務を完ふす、此間、紅軍匪陳東劉法師保國の合流匪約三百九月十四日以來、金川縣大西溝黃泥河子附近に蟠居しありとの情報に依り、一等兵は小銃手として、之が討伐に參加し彈雨を冒し敵前百五十米に近接し、勇猛沈着に有効なる射擊を加へ、敵に多大な損害を與へ遂に敗走せしむるに至れり、次いで十月一日小孤山附近の戰鬪に於て、匪首陣軍西邊好の率ゆる約百六十の匪賊を擊滅し、續いて西岔溝裡附近に、老長靑の率ゆる約百の匪賊と交戰するや、輕機銃彈藥手たりし一等兵は、敵の猛射を意とせず、一意前進に努め近距離に迫るや、沈着勇敢に射擊を續行し、敵をして抵抗を斷念せしめ、遂に密林中に潰走せしめ、引續き八馬橋子附近、大荒溝附近、閣枝子溝附の各戰鬪に、勇戰奮鬪し、皇軍の威力を發揮せしめ、以て討伐目的達成に貢献する處大なるものあり、九月十七日より十一月七日に亘り秋季東邊道討伐に際し、小銃手として參加し、連日連夜嶮峻難路を踏破し、風塵を冒し、討伐に掃蕩に又歩哨斥候巡察等に不眠不休多大の困苦饑渴に堪へ、常に積極的に行動し、克く其任務を完ふし、隊任務達成に貢献せり。

翌十年一月二十九日より三月六日に亘り、冬季討伐實施するや、之に參加し積雪膝を沒する山岳地帶の嶮峻難路を越へ極寒と鬪ひ各所に勇戰奮鬪し、又は歩哨斥候巡察等所有要務に精勵努力せり、就中二月六、七兩日に亘る西牌子附近の戰鬪に、指揮機關として參加し、最も勇敢機敏に積極的活動を續け、遂に敵をして潰滅に歸せしめたり、次いで再び東邊道守備に服し、五月十九日より七月一日に亘り夏季討伐實施するや、一等兵は留守隊勤務員として、僅少の人員を以て駐屯地の歩哨斥候巡察等に努め、又屢々附近の討伐に出動し、或は出動部隊の糧秣輸送患者護送等、繁激なる諸勤務に不眠不休積極的に行動し、克く其任務に邁進し、以て出動部隊をして後顧の憂なく活動せしめたり、斯くして夏季討伐を終へ、直に秋季討伐に參加活躍し、十二月一日より冬季討伐に勇躍參加す、此間朝陽鎭又は山城鎭に位置し、奉吉線の守備、又は治安警備工作、示威行軍等に從事せしが、偶々翌十一年一月十日崗山頭道附近に匪賊の潛入を偵知し、殘留部隊長は部

下九名を指揮して、午後零時二十分之を奇襲せんとせしに、敵は早くも之を察知し逃走せり、此時一等兵は命に依り迅速機敏に、敵の占據せし家屋に突入し、隱匿兵器類多數を鹵獲せり、一月十四日大泉源附近の治安維持に任じありし、東瀨軍曹は小都嶺附近に於ける、稲田小隊の戰況を知り之に策應すべく前進中、午後二時頃西溝に於て匪賊と遭遇し直に之を擊退し午後三時頃一軒家に達す、此時敵は左右兩高地谷地に逃走せしを以て、軍曹は測面高地に進出し敵の退路に追らんとして其中復に達せる頃四圍高地に占據し居りし敵は一齊に輕機銃の猛射を浴せたり、此時一等兵は小銃手として中央にありて勇戰奮鬪中なりしが、分隊長の命に依り正面高地の占領に努めたるも、敵火熾烈にして前進意の如くならず、分隊は漸次死傷者を生ずるに至れり、午後六時頃薄暮と共に敵は攻勢に轉じ來れり、玆に於て一等兵は猛烈之が防戰に勵めたるも、既に彈丸缺乏し敵は漸次近迫し、來り近きは數米遠きは十數米となれり、此時分隊長は白兵戰の號令を下すや、自ら敵陣に突貫せり、一等兵又共に敵中に突入したる刹那遂に敵彈の爲め左頸部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂ぐるに至れり、一等兵の勇猛果敢なる行動は軍人精神の發露として、永く戰史に燦然たるものあるべし、即日歩兵上等兵に進めらる。

功に依り功七級金鵄勳章並に勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

陸軍騎兵上等兵勳八等功七級　原田政治郎

原田政治郎は愛知縣幡豆郡一色町大字中外澤字壹町割八六の人にして、昭和九年十二月一日騎兵第三聯隊留守隊に入隊同日軍令に依り騎兵第三聯隊第一中隊に配屬せられて名古屋出發、宇品釜山を經て十二月十九日圖們江を渡り、同月二十日哈爾賓に到着し、初年兵としての訓練を重ねつつ、警備勤務に從ひ、精勵努力率先難事に當り、更に勞苦を事とせず、蹄鐵工務兵として中隊馬匹の護蹄に貢献する所多く、中隊の討伐行動に支障なからしめたり。然して十年三月四月の間春季討伐として聯隊主力の出動中は、哈爾賓に殘留し少數兵員と共に繁激なる勤務に服し、又同年六月下旬中隊主力の山河屯分駐並に討伐出動の間も亦殘留として日夜不休の激務に從ひ、刻苦精勵以て留守隊警備の任を完うせり。以上の功績優秀なるものと認めらる。

同十年九月二十日以降秋季討伐として聯隊主力の出動するに方りては三浦小隊に屬して勇敢に動作し、又中隊馬匹の裝蹄に任じ又日々の行動間絶へず各馬の護蹄に留意し、中隊の戰鬪力保持に貢献する所甚大なり。然して九月三十日より十月七日の間三浦小隊と共に嘎子溝に分駐し、十月八日九日の兩日は聯隊馬匹の裝蹄作業に從ひて二晝夜に亘り全く寢食を廢して精勵し、皆其の精力の絶倫と旺盛なる義務心を嘆賞せざるものなし。又十月十日聯隊春陽より松乙溝に前進中、數日來大降雨のため河川增水山野到る處濕地深きため總數の約三分の一落鐵したるが、是れが落鐵豫防並に裝鐵は特筆の値ある難作業なりしが政治郎率先躬行、戰友を勵ましつつ作業を終了したり。以上の功績も亦優秀と認めらる。

同十年十一月二十二日午後村瀨軍曹の斥候群に加はりて二道河子東北方約八粁附近の密林内匪賊山寨の情況を審にして之を報告し、次で小隊が此山寨に向て徒歩戰を以て攻擊を決行するに方りては、敵彈を冒して小隊長の傳令に服し、午後一時十分小隊長より攻擊目的に關する緊要の命令を分隊長に傳達せんがため疾走中、敵彈のため右前額部並に右上膊骨に貫通銃創を被りて壯烈なる戰死を遂げたり。政治郎功績拔群を以て騎兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

政治郎性質溫順にして剛勇、殊に義務心旺盛なり　入營以來特に軍務に精勵し其の成績優良、衆兵の模範たり。上下の

信頼厚く隊内敬愛の的たり。其戦没するや皆之を惜み、痛く之を哀悼せり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　石川伊助

石川伊助は神奈川縣足柄上郡岡本村大字塚原の出身なり昭和九年十二月一日歩兵第三十八聯隊留守隊に入隊し、滿洲に在る聯隊の編成に入らんがため、同月七日留守隊を出發し、同月十五日齊々哈爾に於て所屬聯隊に到着し、同日第三機關銃中隊に編入せられて、同地の警備に任じ、又各地の匪賊討伐に出動して戦功少からず、同年九月二十七日一等兵、同月二十九日歩兵上等兵に進められ、同日吉林省楡樹縣大于屯附近の戦闘に於て名誉の戦死を遂げたり。以下其戦歴中主要なるものに就き其概要を記さんとす。

昭和九年十二月十五日より翌十年五月十三日に亘りては、齊々哈爾の警備に任じて精勵す。殊に三月初年兵教育を終了しての後は、中隊主力と共に同地南兵營に駐屯して各種の重要なる任務に服し功績あり。十年五月六月の交第二獨立守備隊の春季討伐として聯隊主力の出動するや、伊助第四分隊八番彈薬手として之に参加し、約四十日間に亘りて吉林省京圖線附近並に拉賓線東方の大密林地帯を行動し、又同年六月下旬より八月末に亘りては同じで夏季討伐として舒蘭縣四道滴達に駐屯して同地附近の討伐に當り、炎熱を冒し宿營の不備給養の粗悪を忍びつつ長期に亘れる討伐行動を行ひ、常に率先難局に當りて精勵し。其の功績優秀なるものと認められたり。

十年九月一日より同二十九日に亘りては第二獨立守備隊の秋季討伐として舒蘭縣東曾家船口に分駐し、上官の命に從ひ衛兵斥候其の他の勤務に服したりしが、九月十四日は伊藤小隊に屬して楡樹縣大于屯に移駐し、爾後少數兵員と共に至嚴の警戒し、殆んど寢食を廢する狀態なりき。殊に九月二十五日は東三道溝に蟠居せし約四十名の匪賊を夜襲して之を撃滅し、小銃擧銃並に彈薬若干を鹵獲せり。又同月二十九日拂曉大于屯西北地區より南下中の匪團を攻撃するため同日午前五時四十分出發、敵と遭遇之を猛撃して大打撃を與へ、次で之を追撃して松花江支流を渡り再び之を攻撃せしが、敵匪は逆襲に轉じ、却て我小隊を包圍せんとしたり。此時伊助分隊長の命を受け沈着有効なる射撃を以て敵に大損害を與へたりしが、午前八時三十分頃、彈薬を悉く射耗し、分隊長に從ひて敵中に突入し、混戦亂闘中、敵彈のため腹部に貫通銃創を被り、遂に壯烈なる戦死を遂げたり。伊助功績拔群を以て即日歩兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

伊助性質溫順にして氣概に富み、責任觀念旺盛なり。入營以來特に軍務に勉勵して成績優良、上下の信用篤く、皆其の戦歿を惜しみ、深く之を哀悼せり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　池本正代

池本正代は山口縣熊毛郡城南村大字宿井の人にして、昭和九年十二月獨立守備歩兵第七大隊第一中隊要員として同月八日鐵嶺なる獨立守備歩兵第十九大隊に入隊し、二月十日圖們なる獨立守備歩兵第七大隊第一中隊に到着して、直に事變に關する業務に從事し、翌十年三月初旬に至る間圖寧線に任じつつ初年兵としての教育を受け、日夜至嚴の警備勤務に服すると共に衛兵又は列車警乘等の要務に服し、中隊の警備遂行に貢献せる所甚大なり。殊に同年四月上半期間は春季討伐に方り、機關銃手として之に参加し、常に献身的奮勵を以て匪賊の掃蕩、並に治安維持に盡瘁したりしが、同年四月十二日

車廠溝附近の戰鬪に際しては機關銃手として、克く分隊長の意圖に合する如く行動し、常に勇敢機敏なる動作を以て敵を攻擊し、以上の功績優秀と認められたり。同十年五月二日哈爾巴嶺附近の戰鬪に際しては特に奮戰して偉功に立てたり。即ち此日午前二時三十分第二〇二列車は京圖線哈爾巴嶺驛の西方約三粁の地點に於て、突如脫線轉覆と同時に約二百名の匪賊より襲擊せられたり此の時正代は列車に警乘しあり。警乘長五十嵐上等兵の指揮下に車內の燈火を滅し其入口に錠を下し、以て迅速機敏に戰鬪準備を爲し直に敵と交戰し、之に猛射を浴せたり。人數の衆多を恃みたる匪賊群も容易く列車に近くこと能はず激戰數十分なりしが、其數に於て甚しく優勢なる匪賊群は漸次に列車に近接し來りたるを以て、警乘兵は敢然下車して戰鬪を繼續したるも、彈藥悉く射耗したるに依り、警乘長以下銃劍を振ひて奮迅猛鬪遂に群がる敵匪中に突入す。正代猛烈なる格鬪に依り數敵を殪したるも、敵彈の爲頭部及左胸部に貫通銃創を被り遂に壯烈なる戰死を遂げたり。中隊長野口大尉の作製せる調書の末文左の如し。

本戰鬪ニ於ケル二等兵ノ沈着ニシテ機敏ナル行動ハ慘虐ノ渦中ニ在ル一二等寢臺車及三等車一輛ノ乘客ノ生命ヲ安全ナラシムルト共ニ其勇戰奮鬪ハ寡ヲ以テ衆ヲ制スル皇軍ノ意氣ヲ遺憾ナク發揮シ斃レテ後止ムノ犧牲的精神ト守備隊本然ノ任務ニ向ヒ邁進セシ旺盛ナル責任觀念トハ長時間ニ十數倍ノ敵ヲシテ一指ダニ染メシメズ克ク其被害ヲ最小限ニ止ムルヲ得タリ其武功拔群ナリト認ム

斯くて正代即日步兵上等兵に進められ、後左の恩賞あり。

功に依り金鵄勳章功七級勳八等白色桐葉章を授け賜はりたり。

正代性質溫順にして沈着且つ剛勇なり殊に責任觀念强く、入營以來特に軍務に精勵して其の成績優良なりき。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　後藤泰忠

後藤泰忠は秋田縣雄勝郡秋ノ宮村中村字中崎の出身なり。

昭和六年九月十八日夜滿洲事變突發するや、獨立守備步兵第五大隊第一中隊に屬して直に出動し、翌十九日に亘れる北大營東大營の戰鬪に小銃手として勇敢機敏に第一線に奮鬪し、敵は多大の損害を與へて戰勝に貢献し、引續き二十日昌圖に急行、紅頂山兵營の攻擊に加はり、沈着に勇戰し分隊の行動を有利に導き、次いで二十九日迄吉長線卡倫及び下九臺に在りて、公安局員の武裝解除及び吉長線警備に服し、爾後翌七年九月末日迄四洮線及び滿鐵線の警備に當り、寡兵を以て長大なる區間に亘り日夜奮勵以て列車の運行を容易ならしめ、且つ此區間下の如く活動し、幾多の功を奏せり。十月五日虻牛哨東南方荒地附近の敗殘兵討伐に、木原小隊に屬し數倍の敵に對し約五十米に接近し攻擊を開始するや、敵は圍壁を利用し頑强に抵抗せしも、沈着剛膽に彈雨中小隊長との連絡に任じ、敵動搖の色を發見、直に小隊長に報告し、又突擊に際しては率先果敢に突入して敵に抵抗の遑なからしめ、二十一日八面城附近の戰鬪には、坂尾小隊に屬し、地形地物を利用し頑强に抵抗せる敵に對し、彈雨を顧みず奮進して遂に之を擊退し、十一月二十四日半拉山門の掃蕩には、敵を東北方に潰走せしめ、十二月六七日馬仲河子家堡附近討伐に於ては、各種勤務に精勵し、二十一日より二十日迄の昌圖縣討伐中は、常に第一線に奮鬪して治安確保に貢献し、一月七日鐵嶺附近の戰鬪に方りては、敵は地隊を利用し頑强に抵抗せるも沈着剛膽而かも機敏に行動して敵を擊退し、十一日孟家塞に於て敵を潰走せしめ、二十二日より二十七日に亘り法庫門附近の掃蕩に、迫擊砲手として出動せしが、二十六日歸還の途次黑坨子に於て數百の敵に遭遇するや、迅速果敢なる射擊を以て大隊の攻擊奏効を迅速ならしめ、二月八日殷家屯に約四百の敵匪侵入掠奪中の情報に接し、大隊之が討伐に際し狙擊

砲手として加はり、途中蘇芽屯に於て敵に遭遇するや、適切なる射撃を以て敵を震駭せしめて大隊の攻撃を容易ならしめ四月二十日八面城三江口間に於て電線被害及び運行妨害ありしを以て、其附近の討伐をなし、二十三日出動して四平街襲撃を企圖する自治國民軍約百五十喇嘛甸子より三道林子方面に移動中なるを知りて之を掃蕩し、八月十六日英城子附近に蟠居せる兵匪約百五十を掃蕩し、二十一日中隊主力を以て昌圖西側地區に、一部を以て昌圖城に入城し、同地の治安恢復に努め、兵匪約一千の同城攻撃を斷念せしめ、以て滿鐵線の脅威を排除せし際、機關銃手として同城西側地區に前進し、同地官民の後楯となりて活動し、二十七日より九月一日迄中隊主力瀋海線朝陽鎭、海龍方面赴援間、機關銃手として敵の包圍中にある朝陽鎭を警備、且つ孤立せる海龍守備小隊との連絡、補給に盡力し、列車の運行妨害を排除する等、同地附近警備上に多大の貢献を致し、八月五日午前三時頃馬仲河驛分遣隊約四百の義勇軍兵匪の包圍攻撃を受け苦戰中との報を受け、中隊主力北方より赴援するや、機關銃手として驛北方六百米附近より分遣敵を包圍せる敵を射撃し、彈雨中驛附近に突進し、敵の主力を索めて射撃し、遂に敵を潰走せしめ驛及び附屬地を完全に防護し、二十日大會試屯設近の敵を攻撃潰走せしめたり。

爾後十月五日迄滿鐵線並に昌圖縣、十二月二十日迄洮昂線を守備し、十二月二十一日より翌八年二月十三日迄洮南憲兵分隊補助憲兵として日夜精勤せしが、中にも昭和七年十二月初旬より膽檢及び突泉方面を根據とする馬賊團は、晝夜巧に變裝し洮南城内に潜入し、各所に强盜掠奪を恣にし、城民恐怖しありしが、此不安を一掃するに力り、憲兵の勤務を熱心に補助し、日夜滿洲國軍隊及び警務局巡警を指導捜査に任じ、遂に馬賊一味が大車六臺を掠奪糧秣を積載入城し、賣却後糧棧に於て金錢授受中を、隊員と共に包圍し、頭目劉然恍以下六名を檢擧し、城内民は安んじて正業に就くに至らしめ、又一月頃洮南城外南姑四洮鐵路從業員家宅に馬賊侵入し、家人を銃殺し家財全部を掠奪逃走するや、犯人捜査の命を受け情報の蒐集或は四洮鐵路滿鐵派遣員と密接に連絡して熱心に捜査を續け、遂に短時日内に馬賊一味を逮捕し、益々憲兵の聲價を揚げ、其他四洮、洮昂、洮索各線の重要地點たる洮南驛の取締の爲、日夜出張其任を完うし、次に五月二十二日迄滿鐵線並に昌圖縣の警備に精勤し、此間三月二日より十一日迄機關銃手として、熱河作戰初期に於て軍司令部戰闘司令所新京より錦州に移動の輸送列車、並に在錦州軍司令部の掩護及び護衛に任じ、且つ錦州一部警備を擔任し、以て軍司令官の熱河作戰の戰闘指導に支障なからしめし等、其功績甚大なり。

然るに此間右濕性胸膜炎に冒され、五月二十三日鐵嶺分院に入院、内地還送の爲七月十一日同院出發、十四日大連港を出帆、十八日宇品港に上陸、廣島衞戍病院に收容、十月五日兵役免除此間醫療に努めたれ共其効なく、同九年十月十八日遂に長逝するに至れり。

之より先七年六月一日歩兵上等兵を拜命、功に依り勳八等白色桐葉章を授け賜はれり。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　武昌知

武昌知は神奈川縣中郡東秦野村寺山の出身にして大正四年四年十三日生父を鎌太郎母をハマと云ひ、昭和四年三月東秦野尋常高等小學校高等科を卒業し、後昭和十一年三月一日現役兵として、獨立守備歩兵第四大隊第二中隊に入營するや、時恰も古參兵の大部は各地に出動し、中隊の兵員極めて僅少加ふるに、警備地區内には大小匪賊團の横行頻繁にして、頗る困難なる情況下にありて、猛烈なる教育訓練の傍ら、鐵道守備に任じ、衞生巡察斥候等繁激なる警備諸勤務に精勵し、以て匪團の襲撃に備へ、常に優秀なる成績を擧げ、沿線一帶の治安を維持し、列車運行を安全ならしめる等中隊守備に貢